

AREA CAMPUS MOGAMI

エリアキャンパスもがみ 研究年報 2022



山形大学
Yamagata University

エリアキャンパスもがみ
研究年報 2022

「エリアキャンパスもがみ研究年報 2022」 発刊にあたって

エリアキャンパスもがみキャンパス長 大西 彰正

最上地域をそのままキャンパスとした「エリアキャンパスもがみ」は、2005年3月のスタート以来、最上広域圏8市町村のご協力とご指導の下、途絶えることなく運営されてきました。このキャンパスで開講される基盤共通教育科目「フィールドワーカー共生の森もがみ」は、累計で3,622名もの学生が履修し、山形大学と地域社会との共育・共創の場として成長を続けています。この授業の大きな特徴は、学生たちが地域の人々と共に考え協働して地域課題に向き合う中で、最上地域の自然や文化、歴史、そしてこれらを守り伝える人々の人間性をも学ぶことにあり、このことは学生の地域課題の発見・解決能力の育成にとどまらない、人間形成や地域理解の深化、さらには各地域の人材育成と活性化などにも繋がる成果をもたらしてきました。

今回の研究年報は、2022年度の「エリアキャンパスもがみ」の活動を記録したもので、第16号となります。第1部には事業内容の概要を記しています。第2部は「フィールドワーカー共生の森もがみ」の履修生が作成した授業記録となっており、今年度は、新庄市、金山町、最上町、舟形町、真室川町、大蔵村、鮭川村、戸沢村においてそれぞれ1つのプログラムが実施され、総計で77名の学生が地域の皆様と様々な学習を行いました。この記録には、各プログラムで活動した学生たちが、何を学び、何を感じ、何を考えたかが率直に記述されています。それぞれのプログラムで設定した課題に若者らしい発想力と視点で主体的に取り組み、自らの課題発見・解決能力や人間性を高めるとともに、地域社会への理解を深めたことが読み取れます。この授業で身に付けた能力と貴重な学習体験は、必ずや学生たちの長い人生の糧となることでしょう。

「エリアキャンパスもがみ」は、最上広域圏8市町村の皆様の高等教育に対する熱い思いと、地域創生・次世代形成を掲げる山形大学の教育理念が呼応して進展してきました。これからもこの「エリアキャンパスもがみ」での共育・共創事業が、最上地域の皆様とともに継続して実施できますようどうか変わらぬご支援をお願い申し上げます。

目 次

| | |
|---|---|
| 「エリアキャンパスもがみ研究年報 2022」発刊にあたって エリアキャンパスもがみキャンパス長 大西彰正 | 2 |
|---|---|

第一部 研究年報

| | |
|------------------------------|----|
| 第1章 エリアキャンパスもがみ令和4年度事業の概要 | 5 |
| 第2章 初年次教育 フィールドラーニングー共生の森もがみ | 7 |
| 第3章 もがみ専門科目 | 18 |
| 第4章 もがみ活性化事業 | 27 |

第二部 授業記録

| | |
|---------------------------|----|
| 「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム | 28 |
|---------------------------|----|

| | |
|------------------|----|
| エリアキャンパスもがみ関係者名簿 | 84 |
|------------------|----|

第一部 研究年報

第1章 エリアキャンパスもがみ 令和4年度事業の概要

I エリアキャンパスもがみの概要

1 はじめに

山形大学は、過疎化の進む最上広域圏全体をキャンパスに見立てて教育・研究・地域貢献を展開する「エリアキャンパスもがみ」を平成16年度に発足させた。

エリアキャンパスもがみでは、「自然と人間の共生」をキーワードに、大学と最上広域圏双方の人材育成と活性化を図ることを目的に、自然や伝統文化を活用した実践的活動について、その知識や知恵、ノウハウを、最上広域圏全体で共有・活用するだけでなく、地域の教育資源として教育活動に活用している。

特に教育活動については、本学の初年次教育の展開に活用しており、本学の学生は、社会性や課題探求能力を身につけるために、地域の講師と子供から老人までの幅広い世代の住民を交えた現地体験型授業や課外活動に参加している。

2 これまでの経緯

県の北東部に位置する最上広域圏は、南西に最上川が流れ、一部盆地を含む大部分が山岳・丘陵地帯の自然豊かで市町村毎に独自の文化を有する農山村地帯である。その一方で、8市町村のうち6町村が「過疎地域自立促進特別措置法」に基づく過疎地域に指定されている状況にある。

また、最上広域圏は大学・短大が一つもない県内唯一の広域圏であり、山形大学は、平成16年度に最上広域圏の8市町村と包括協定を締結し、広域圏全体をキャンパスとする「山形大学エリアキャンパスもがみ（以下、YAM）」を設立し、総合大学として組織的な地域貢献の挑戦を開始した。

YAMは、地域の自然や伝統文化などを教育資源として活用し、学生自らが現代社会の課題を発見し、探求し、解決するためのフィールドとして好適な場である。YAMの開設以降、最上広域圏を活性化させる様々な事業（以下、それらを総称して「もがみ活性化事業」と呼ぶ）を立ち上げ、多くの学生が課外活動として参加し、学生と住民の交流の中から、地域活性化の新たなシーズが生み出されてきた。

平成17年、大学は、YAMのこれまでの活動を振り返り、学生に社会性を持たせ、広い視野の下、課題探求能力を伸ばしていくには、柔軟性に富んだ初年次の学生を対象とした基盤教育の授業を立

てることが必須である、と考えた。

そこで、地域からの申し出もあり、地域の方を講師として、学生と住民、特に子供たちが現地で一緒に活動することができる初年次の全学生を対象とした基盤教育授業『フィールドワーカー共生の森もがみ』を平成18年度から開講することとした。

この初年次の基盤教育授業を骨格として、それに学部の専門教育の授業と課外活動を連携することによって、地域に根ざした実践的な課題探求能力を育成することになった。

なお、これらの取組については、「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」として、平成18年度文部科学省「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」に採択された。



「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト概念図」

3 目標

エリアキャンパスもがみでは、次の2点を目標に掲げ活動を行っている。

（1）大学生に対する教育

- ①過疎化、少子高齢化、環境などの現代社会が直面する課題発見・探求・解決能力を向上する。
- ②社会性を向上する。
- ③コミュニケーション能力を向上する。
- ④プレゼンテーション能力を向上する。
- ⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出

する。

(2) 最上広域圏の人材育成と活性化

①未来遺産の共有・活用・発展を図る。②地域の自然や文化を子供たちに伝える。③子供たちの地元に対する誇りを抱かせる。④情報発信力を向上する。⑤豊かな地域社会の建設に関わる人材を輩出する。

4 運営体制

YAMの運営体制は、小白川キャンパス長がエリアキャンパスもがみのキャンパス長を務めており、YAMの運営の中核をなす「運営会議」は、山形大学と最上広域圏から選出された委員で構成されている。

山形大学の運営委員は、キャンパス長、教員7名、事務職員3名、で構成されており、最上広域圏の運営委員は、各市町村の教育長8名、文化団体等の代表3名で構成されている。

また、現地に最上広域圏の事務職員が常駐する「最上事務局」を設置し、YAMを円滑に運営するための、橋渡し役を担っている。

本プロジェクトの関連経費は、各事業の内容に応じて大学と各自自治体で応分に負担している。また、地元講師の謝金等は市町村が負担する寄付授業となっている。

5 教育改革への有効性

(1) 教育課程、教育方法等の創意工夫

「フィールドワーカー共生の森もがみ」は、正規の授業を地域の人材育成活動と連結させている点に特色があり、学生は、初年次の授業で地域に出て、社会性と課題探求能力を身に付け、それを大学の在籍期間を通して、専門教育と課外活動で伸ばしていくことができる。そのために、本授業では、次のような創意工夫を行っている。

- ①授業そのものが地域のニーズに基づいたもので構成され、地域の活性化に直接結びついている。
- ②現地で行う体験型学習となっている。
- ③現地にいるその道の達人が講師として直接指導に当たる。
- ④開講日を土・日曜日にすることによってたくさんの住民が参画できる。
- ⑤学生は子供の指導に関わることによって責任感を持つ。
- ⑥この授業は、「大学コンソーシアムやまがた」の単位互換協定に基づき県内の大学・短大生が履修できる。

(2) 期待できる成果等の教育改革への有効性

地域活動が活発になればなるほど、教育面での受益者は増すという相乗効果が期待できる。授業「共生の森もがみ」で、学生は世代の異なる住民と交流することによって、社会性が増し、「過疎化」「少子高齢化」「環境」などの現代的な問題群と向き合うこととなる。多くの学生にとって、このような日本が直面している現代的な問題に對峙し、それを考えることは、これからの我が国の発展のために大きな意義がある。

II 事業実施計画

1 基本的な年間スケジュール

- 4月「フィールドラーニングー共生の森もがみ」と「もがみ活性化事業」開始
- 7月 エリアキャンパスもがみ運営会議
フィールドラーニング活動報告会
- 10月 エリアキャンパスもがみ懇談会
- 3月 もがみ担当者会議
研究年報刊行

2 令和4年度実施事業

(1) 教育活動

①初年次教育

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」
8プログラム

②主なもがみ専門科目

- ・地域教育文化学部「教育実践実習」新庄市
- ・大学院教育実践研究科（教職大学院）
「学社融合の実践と課題」戸沢村

など

(2) もがみ活性化事業

①山形大学見学旅行

R4実績なし（コロナウィルス感染症流行のため）

②フィールドラーニング応用編

R4実績なし（コロナウィルス感染症流行のため）

(3) 広報事業

- ・エリアキャンパスもがみ研究年報（3月）

第2章 初年次教育

フィールドラーニング—共生の森もがみ

I 意義

本授業は、山形大学の全学共通教育である基盤教育の正規の授業として開講された。本授業の特色は、①初年次教育、②全学共通教育、③現地体験宿泊型学習、④少人数教育、⑤山形大学の理念「自然と人間の共生」の具現化、⑥自然豊かな農山村地の活用、⑦現地講師による指導、である。

初年次教育は、通常、アメリカで初年次の学生の退学を防ぐことを目的として、大学への適応を意図した教育プログラムを指す。初年次学生の退学者が少ない日本ではおかれている状況がアメリカとは大きく異なっており、そこから必然的に初年次教育はアメリカのそれと異なったプログラムとなる。

我々がこの授業を初年次教育として強く意識しているのは、本学の学生は一年目に基盤教育を受講し、その後は各学部で専門課程を受講することから、専門に入る前に学問の専門性を超えた社会に対する問題意識を持ってもらいたいということである。

混沌とした社会においては、これが問題ですよというように、はっきりとしたかたちでは現れてはくれない。急激に変化する時代にあって、我々の知恵と感受性で問題を主体的に拾い出していくしかない。それが現代の市民に求められている。社会に主体的に関わっていくためには、自分で問題を発見していく能力を養っていかねばならないのだ。この授業の教育目標は、社会の様々な事象の中から学生自らが問題を発見することにある。

山形大学は6学部からなる総合大学であるが、6学部の学生が交流する機会はそれほど多くない。学生は学生の交流の中から自らを発見していく。本授業は全学共通教育の特性を活かして、学部を越えた学生の交流を図っている。

現代の若者は体験が少なくなっている。大学教育において意図的にこの体験を増やしていくしかない。リアルな体験を通して、学生の思考を深め、社会性を涵養させ、行動的にしていくことが求められている。そこでこの体験を濃密にするために、現地体験宿泊型学習を導入した。土・日曜日の宿泊型にすることによって、平日の授業と競合することがない。また、食事や宿泊を共にすることによって、人間関係が濃密になる。

この授業は10名程度の少人数教育となっており、地域の講師の人々との交流が密になり、教育効果もあがるように設計されている。

山形大学の理念である「自然と人間の共生」を

教育に反映するために、この自然豊かな「エリアキャンパスもがみ」を活用する。しかし、同時に、そこは少子高齢化、過疎化の進む現代の課題の先進地域でもある。こうして、学生が多くのことを考える場になっている。

この授業の大きな特色は、現地の達人を講師とし、この達人を中心とした授業を地元の方と大学で設計し、実施している点にある。大学という学問に立脚した知の拠点が、学問的知を越境し、社会的、日常的、実践的な知に踏み込む教育活動でもある。このことは教育の主役を教員から学生に重心移動したことの一つの表れでもある。つまり、学生にいま必要なことは何なのかを問い詰めていけば、授業において様々な可能性を試していかなければならない時代に入ったということが考えられる。学生は現地講師を通して、コミュニティということ意識し、故郷や家庭、そして自己を再考するきっかけとなっている。

本授業のもう一つの重要な側面は、この授業を学生教育だけでなく地域活性化のために活用するという点にある。では、この大学の授業が地域活性化にどのように貢献するのであろうか。

一つには、大学がなく若者があまりいない地に学生が入るだけで活性化される。学生が入ることは授業でなくてもいいのだが、正規授業でもなければ学生が観光地でもない遠隔地に集団で入ることはまずない。

二つ目は、授業の中に子どもを含めた地域住民との交流が入っており、学生と地域住民との交流が密になる。そこには、大学生による地域の子どもの指導なども組み込まれている。

三つ目は、全国から集まった大学生の新鮮な眼によって、地域が再発見されていく。そのことによって、地域の人々に地元の誇りが醸成される。

四つ目は、学生によってまちおこしなどの具体的な提言がなされる。

この授業によって上記のような地域活性化が考えられるが、実際にはことはそううまくは運ばない。授業に参加する学生は一年生であって、学問的な専門性を身につけているわけではない。そこで、専門的な視点からの提案を求めることはほとんど不可能である。また、現実には熱意のない学生が参加することも十分に考えられる。

この授業を大学と地域の双方に利益がある形に高めていくためには、これからのたゆまぬ授業改善が必要である。特に、上記の特性を踏まえた綿密な授業設計が重要である。

II 令和4年度シラバス

【授業名】フィールドラーニング

ー共生の森もがみ

(領域：山形から考える)

【担当教員】阿部宇洋

(教育開発連携支援センター)

【授業概要】

・授業の目的

自然豊かな山形県最上地域でのフィールドラーニングを通して、地域の文化や歴史、自然、環境等だけでなく、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと共に学び、実践的な視点から知識を獲得し、山形から日本、世界及び過去から、現在、未来の空間及び時間軸で現象を把握する力を養う。

・授業の到達目標

この講義を履修した学生は、

- 1) 地域から与えられた課題を発見できる。

【知識・理解】

- 2) 地域で発見した課題を探求することができる。

【知識・理解】

- 3) 課題を議論することで、コミュニケーションできる。

【態度・習慣】

- 4) プレゼンテーションを行うことができる。【技能】

- 5) 行動力、社会性の基礎的な力を身につけることができる。【態度・習慣】

【授業計画】

・授業の方法

この授業は、各自が以下のプログラム(①～⑧)から1つを選択して受講する。受講の流れは以下のとおり。

- 1) オリエンテーション
- 2) 事前学習(WebClass)
- 3) 【1泊2日フィールドラーニング(1回目)】
- 4) 中間学習(WebClass)
- 5) 【1泊2日フィールドラーニング(2回目)】
- 6) 最終レポート(WebClass)
- 7) 活動報告会に向けた説明会・練習、活動報告ポスター作成
- 8) 活動報告会での発表

[プログラムリスト]

- ①(新庄市)十日市復活ー未来のウォークアブル街づくりについて考えるー
 - ②(金山町)かねやま旅情
 - ③(最上町)最上町から生まれた楽器を全世界に広めよう
 - ④(舟形町)里地里山の再生I
 - ⑤(真室川町)子どもの自然体験支援講座
 - ⑥(大蔵村)知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて
 - ⑦(鮭川村)人と地域をつなぐ環境保全活動
 - ⑧(戸沢村)里山保全と角川のパワースポット巡り
- 以上、8プログラム

・授業日程

- ①4月5日(火)～4月12日(火)プログラム説明会・WebClass(プログラム選択希望調査を同時に行う。)
- ②4月13日(水)当選者発表
- ③4月22日(金)16:30～18:00 オリエンテーション(プログラム顔合わせ・役割決め・フィールドラーニング上の留意点について)
- ④5月7日(土)～7月3日(日)フィールドラーニング活動期間(土日2回、計4日間)
- ⑤7月22日(金)16:30～18:00 活動報告会

【学習の方法】

- 1) 安全第一を心がけ、積極的に活動に参加してください。
 - 2) 専門分野の方法論や数値的なデータだけではなく、フィールドラーニング(あるく・みる・きく)で集めたデータをもとに考えるよう心がけてください。「現場で考える」「体で考える」(もちろん頭も使います)ことが合言葉!そして、自分の想像力を大事にしてください。
- ・学部の行事や、サークル活動(大会)と予定がバッティングしないように気をつけてください。必ず確認すること。
 - ・メールでのお知らせや掲示板での情報がありますので、必ず確認してください。

・授業時間外学習へのアドバイス

- 1) オリエンテーションで配布される「しおり」を熟読し、内容を理解して授業に臨んでください。
- 2) オリエンテーションでの詳細説明に基づき①事前学習、②中間学習、③最終レポートに取り組んでください。また、フィールドラーニング中はこまめに記録ノートを作成するよう努めてください。
- 3) フィールドラーニング終了後、活動報告会に向けて準備を進めてください。方法については説明会を開催し、発表指導を2回行います。

【成績の評価】

・基準

- 1) 地域での活動により課題を発見し、探求により深め、活動報告会の発表により他者に伝える事が出来たかどうかを評価の基準とする。
- 2) 一連のグループ学習の中でコミュニケーション能力や主体的学習力、社会性などを発揮できる事を評価の基準とする。
- 3) 現地講師による活動評価、受講態度や、指示に対する達成度を数値化しそれを参考に教員が相対的に評価を実施する。

・方法

前提として、現地活動にはすべて参加していること、また最終レポート提出が基本条件。

フィールドラーニング活動への参加度 40 %
活動報告会での発表の完成度(ポスター含む) 30 %
現地講師による活動評価 20 %
受講生による相互評価 10 %

【学生へのメッセージ】

フィールドラーニングとは、山形大学オリジナルの学術用語で、学部専門で学ぶであろう、フィールドワークの入門編として設計されました。フィールドワークでは全て、みずからの関心で調査する事に対して、フィールドラーニングとは、提示されたプログラムを通して、課題発見などを行なう教育プログラムになっています。最上地域は、学生諸君を温かく迎え入れてくれるでしょう。是非、もがみを見て、聞いて、感じて(味わって)、 「共生の森」のパワーを体全体で吸収してきてください。この講義をきっかけに、多くの学生が最上地域での課外活動に参加してきました。教員を目指す学生や、地域でのボランティア、地域活動を体験したい学生にはお勧めです。本授業は宿泊や実技体験を伴いますので、参加費が必要となります。(詳細は、プログラム説明会の際に説明します。)

【オフィスアワー】

原則として Webclass のメッセージで質問を受け付けますが、オフィスアワーとして「阿部研究室」(基盤教育1号館2階東側)において、予約制で受け付けます。会議や出張等で不在にすることもあるため、確実に面談したい場合は事前に Webclass のメッセージで予約をお願いします。3人の教員が担当していますが、基本的には阿部へ連絡をください。

Ⅲ 受講者数

| プログラム No. | 開講プログラム | 受講者 |
|-----------|------------------------------|-----|
| 1 | 十日市復活-未来のウォークラブル街づくりについて考える- | 8人 |
| 2 | かねやま旅情 | 8人 |
| 3 | 最上町から生まれた楽器を全世界に広めよう | 8人 |
| 4 | 里地里山の再生 I | 9人 |
| 5 | 子どもの自然体験活動支援講座 | 15人 |
| 6 | 知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて | 9人 |
| 7 | 人と自然と地域をつなぐ環境保全活動 | 5人 |
| 8 | 里山保全と角川のパワースポット巡り | 14人 |

Ⅳ 活動報告会

フィールドラーニングー共生の森もがみ
日時：7月22日(金)16:30～
場所：基盤教育1号館112教室



Ⅴ 授業改善アンケート結果について

本年度に実施した授業改善アンケートについて、73人(回収率94.8%)から回答があった。

アンケート結果については、表のとおりであり、基盤共通教育科目全体の平均値と比較してみると、総じて学生の満足度が高いことが読みとれる。

表:「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の授業改善アンケート結果と基盤教育科目全体の平均値との比較

| 質問項目 | FW | 全体平均 |
|-----------------------------|-----|------|
| この授業を意欲的に受講しましたか | 4.9 | 4.3 |
| この授業の内容を理解できましたか | 4.8 | 4.4 |
| 考え方、能力、知識、技術などは向上しましたか。 | 4.8 | 4.4 |
| 自ら学ぶ意欲は湧きましたか。 | 4.9 | 4.3 |
| 自ら進んで課題を発見し、探求する力が身につきましたか。 | 4.8 | 4.2 |
| 教員に熱意は感じられましたか。 | 4.7 | 4.4 |
| 考え方(教授法)はわかりやすかったですか。 | 4.6 | 4.3 |

| | | |
|-----------------------------------|-----|-----|
| 教員の一方的な授業ではなく、コミュニケーションはとれていましたか。 | 4.7 | 4.0 |
| 板書や配布物、提示資料は読みやすかったですか。 | 4.7 | 4.4 |
| この授業を総合的に判断すると良い授業だと思いますか。 | 4.8 | 4.4 |

大学と地域の連携で思うところ

学術研究院 学士課程基盤教育機構

講師 阿部宇洋

フィールドワークをしているときに、時折耳にするのが「若い衆がたくさん来た」という地域住民の声である。かくいう私も若いという自覚はあり、私も含めた若い衆という自覚がまだあった。

いつから若い衆ではなくなるのか。共同体の中では、後継者が若い衆と呼ばれることが少なくない。「後継者ができた」と認識すると、若い衆からの地位的な転換が図られるのだろうか。しかしながら、高齢化は深刻で 70 過ぎの父がまだ地域の若者組に所属しているのも私という後継者が育っていないからかも知れない。

さて、なぜ若人、若い衆に焦点を当てているかという、年の始めに行なわれた大学入試試験でのことである。大学入試試験の監督官は基本的にミスが許されない。非常に緊張する仕事である。その緊張の中で、何を思ったのか、不意に感動してしまったのである。涙こそ出なかったものの、受験生の親の気持ち、受験生の気持ち、そして試験に対する情熱を感じ取ってしまったのである。いままでは、そのようなことは全くなく、感動まではゆかないものの、激励の一方的な気持ちはあった。それが今年は感動であったのである。激励は私から受験生へ向けた心の動きであるが、感動は、受験生から私の心への働きかけであった。

試験が始まる直前の張り詰めた空気で呼吸する教室と、始まってからの濁流にも似た受験生の熱気、真剣さをふくんだ教室のなかで熱気に飲まれて、感動したのである。

真剣に試験に打ち込んでいる受験生は本当に美しかった。監督官は不正がおこらないように監督し見張るわけだが、今年は疑惑の目で見ると監視という感覚よりも、フィールドラーニングで受講生を見守る気分に近かったと後に気づいたのである。

若人の真剣に打ち込む姿の美しさを感じるには、年をとる必要があるのかも知れない。自身を若いと感じていたり、若人とふれあうことが少ない大人、そして自身はまだ若いと思っている人はその感動を見付けることは難しいかも知れない。大学共通試験の受験生は山形大学で受験しても、必ずしも山形大学に入学するわけではない。いわば受け入れ側、フィールドラーニングでいうと最上地域なのである。フィールドラーニングを受講する全員が受講後、何らかの形で最上に関わるかわからない。私は、種をまく講義と言ってきたがこの大学入学共通テストとフィールドラーニングとの思わぬ共通点であった。年を重ねた結果なのだろう。

さて、ブラックバイトやブラック企業といった、労働力の搾取が問題となって近い。私が大学生だった頃、日本の大学では研究室や大学での活動の中で教育活動という名目で教員自身の研究の手伝いや、資料集めなどを無償で行わせていた研究室もあった。私は幸いなことに、自身の研究を遂行できる研究室に所属ができたが、緩やかな時代であったと思う。

では地域ではどうだろうか。「大学生にやらせよう。若い感性で、、、」「大学生にやらせた結果、地域おこしが失敗した。」などとなっていないだろうか。大学生の地域連携や、地域での学びは本来、「成功、失敗」

という両義のみでとらえるものではなく関与した過程やもたらした変化によってみるべきであろう。

また、教員もまだまだ古い体質の教員がいることも事実である。「学生を使って、学生に、やらせますよ。」「学生を動員できますよ。」そしてうまくいけば教員の成果になり、様々な場所で発表し、あたかも自分の成果の如く振る舞うのである。なんとも情けない。はたしてアクティブラーニングの本質である学生主体の学び方なのだろうか。学生は幸せなのだろうか。これは教育活動ではなくグルーミングではなからうか。このように、思うところがある。

教育成果は、様々な指標はあるが、数値にできない部分もいまだに多い。気づかないうちに教員の言いなりになってしまっている場合もあるだろう。近年その行為がアカデミックハラスメントという言葉で表面化してきている。学生が地域に関与することが教員の成果、評価になり、地域連携が教員の成果作成のための強引な手段にはなっていないだろうか。これは、私自身も気を付けなければならないが、今後も、教員主導の地域連携に巻き込まれる学生は増えるだろう。また、地域にとって余計なことをする場合も増えるだろう。

その点、教育としてのゆるやかな地域連携をしている『エリアキャンパスものがみ』に関しては、サークル活動をはじめ、学生と地域の個人的なネットワークも醸成され、学生主体での学びが、基幹科目のフィールドラーニング共生の森ものがみで学んだあとも続いていることは誇りたいものである。

教員としてはご迷惑をおかけしているだろうと思いつつも、その関係性で変化する

地域をみていると最上地域の関係者の方々の教育に関する熱意と、若者の力は改めて感心する。

主体性の育成や学生の達成感、成功体験の獲得のためには、教員はサポートに徹するか、もしくはよき相談者でありつづけたいものだ。

さて、このような連携もある一方でいまの社会は学生や生徒を教育活動の名目で自信の目的や政策の目標の達成のために利用していないだろうか。こればかりはいい結果を見たことがない。「日本人は情報を食べる」とはよく言ったもので、大学と連携というと世間的にはいい印象を与える。しかし、本当の連携はその肩書や役職、学歴、権威を脱いだ先にあるのではないかと思うのである。人間同士の連携が本質であって、連携する、関係を持ち続けられるかは、人間性や担当者の努力なのだと常々思っている。

『エリアキャンパスものがみ』は、全国的な先駆けとしてバーチャルキャンパス、つまり、物理的な建造物が存在しない、地域全体をキャンパスと見立て、仮想的に存在するとした考え方である。近年の仮想現実 (VR) が隆盛になっている中で、やっとな世界が『エリアキャンパスものがみ』に追いついたのかもしれない。ただし、そこにはたしかに現実があり、学生が学び、地域や大学を支える構造がある。

山形大学では教育 DX の一環として、地域で学びたい、フィールドラーニングを受講したい学生向けに 360 度カメラでフィールドラーニング風景を記録したものを提供している。バーチャルキャンパスのバーチャルツアーといったところで、この動画をきっかけとして、地域での様々な学びがし

たい、積極的な、外向的な学生が履修し成長するように設計を変化させている。4年、もしくは6年をより効率的に、自分のやりたいことを効率的にマッチングして有意義な学びに繋げて欲しいものだ。

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」
コラム

基幹科目「山形から考える」としての「フ
ィールドラーニングー共生の森もがみ」

山形大学学士課程基盤教育機構 橋爪孝夫

山形大学では初年次学生向けの教育プロ
グラムとして基盤共通教育が実施されてお
り、中でも「基幹科目」という科目区分にあ
る一連の授業は、少人数のアクティブラ
ーニング型授業としての開講を基本としてお
り、全ての新入学生が大学での「学び」を経
験する場となることが期待されている。

この「基幹科目」授業群中に「山形から考
える」という統一されたテーマを持って開
講される 43 の授業（令和 5 年度予定開講
数）がある。これらの授業は山形大学の在所
であり学生が日々暮らす「山形」そのものを
題材とし「①自らを取り巻く環境を見つめ
る。②内在する課題を発見する。③課題解決
の道筋を具体的に策定する。④改善活動を
粘り強く実践する。」という四つの能力の獲
得を目指して設置されている。（以上、令和
5 年度「山形から考える」ハンドブックより）

現在基盤共通教育授業「フィールドラ
ーニングー共生の森もがみ」はこの「山形から
考える」43 授業のうちの一つとして開講さ
れている。基盤共通教育の集中講義の中
でも強い特色を持った授業として展開し、大
学の社会貢献、大学と地域の連携、地域その
ものに学ぶエリアキャンパス＝バーチャル
キャンパス構想、といった様々な画期的な
試みが着実に教育的効果をあげていく中で
年月が過ぎ、多分に「フィールドラーニング
ー共生の森もがみ」の成果からフィードバ
ックを受けつつ「山形から考える」という教

育プログラムが実現されたと称し得る。

そのような視点から見たとき、ある意味
で「山形から考える」の発端となった「フ
ィールドラーニングー共生の森もがみ」だか
らこそ、数ある「山形から考える」科目の中
でも埋没することなく、より特色を発揮し
て継続していくための工夫をしていく必要
があると考えられる。

何となれば、従来山形大学の地域系科目
といえば旧「フィールドワークー共生の森
もがみ」の「学生たちが地域に赴き一泊二日
の学び体験を 2 回繰り返し、地域の方との
交流の中で得た成果を発表する」という定
型があったわけだが、これは密度の濃い学
びが出来る反面、学生側の参加に対するハ
ードルが高いという側面も抱えていた。

これほどの特色ある教育プログラムはほ
かになく、地域系教育科目という魅力もあ
って成り立っていたが、その魅力ある試み
を維持しつつ「フィールドラーニングー共
生の森もがみ」よりも多くの学生が参加し、
地域学習での体験を得ることが出来るよう
に整備された新しい教育プログラムが初年
次開講全学生必修の「山形から考える」科目
群であることから、学生からすると「フ
ィールドラーニングー共生の森もがみ」以外の
正課授業としての地域学習への選択肢が 40
以上も充実して整備されたことになる。

もともと山形県最上地域に魅力を感じて
いて、出来ることなら最上地域で学びたい
という希望を持っていた学生は別として、
漠然と地域学習の希望があった学生からす
れば「フィールドラーニングー共生の森も
がみ」ほど参加へのハードルが高くない授
業も十分魅力的な履修の対象になり得る。

換言すれば従来までの「ほとんど唯一の

特色ある地域系学習のための授業」であった立場から「四十数個の興味ある地域学習対象の一つ」となったと言える。

ここで「山形から考える」科目群の中で「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の位置づけを見てみる。四十数個の科目は4段階の「地域学習タイプ」と同じく4段階の「協働学習タイプ」という指標で区分されている。「地域学習タイプ」とは地域で学ぶ度合いが大きいのか、教室での座学として学ぶ度合いが大きいのかを指している。「協働学習タイプ」とは、チームで学ぶ傾向が強いのか、独りでも学べる講義の傾向が強いのかを指している。

「フィールドラーニングー共生の森もがみ」は両方の指標が最大値の「4-4」カテゴリに属している。(参考までに、カテゴリ「1-1」が最も個人で受講する講義型の「授業」に近い)これは全体の中でも最も「地域に出てグループで」学ぶ傾向が強い授業の分類に入る。このカテゴリ「4-4」に属している授業は「山形から考える」の中でも四つしかない。四十数科目中の四であるから、全体の9割はもっと地域に出ない、もっと自分独りのペースで学べる、参加へのハードルが低い授業ということになる。

この中で、敢えて「フィールドラーニングー共生の森もがみ」を受講しようという学生。即ちスケジュール調整や参加費用確保といった参加へのハードルを乗り越えるだけの地域学習への熱意を持った学生にインフォメーションを届ける必要がある。また人数的にも、先年までの傾向で見れば先ほどのカテゴリー「4-4」に属するほか三つの授業は受講者数が数名乃至十数名という少数精鋭のゼミのような授業であることに対

し「フィールドラーニングー共生の森もがみ」は出来得ることなら100人規模の受講学生を集めたい授業であることから、参加者確保に向けた工夫が必要と考えられる。

この点、広報の工夫も重要であり、独自の説明会を毎年行ってもいるが、この機会に地域系科目としての原理原則に立ち返れば、やはり教育プログラムそのものの質を高めること。「山形から考える」四十数科目の中では参加へのハードルが高いけれども、それを乗り越えてでも参加したいという意欲を学生の中に喚起することが本義となる。

学びへの参加ハードルが高いことを忌避せず「より深く地域で学べる」魅力と捉えてもらうためにも、改めて最上8市町村で展開されている地域学習教育プログラムの内容や、地域そのものの魅力を伝えていくことの意義が大きい。

前者については菊田先生を中心にエリアキャンパスで学生を受け入れてくださっている地域の皆さんに対するインタビュー調査に令和4年度より着手している。後者については阿部先生の手によりVR動画教材の開発にこれまた着手しており、今年度の参加学生はVRで最上地域の風物に触れた上で参加している。このような授業改善の試みには大学と地域の連携が今まで以上に重要となってくる。

基幹科目としての位置づけに伴い大学教育の質保証面での取り組みも重要となっている。「フィールドラーニングー共生の森もがみ」の特色である大学と地域が連携して教育を行う強みを生かすことで必要とされる授業改善を続け「山形から考える」科目群の中でも特色ある教育プログラムとして更なる発展へつなげたい。

「フィールドラーニング

ー共生の森もがみ」コラム

地域系科目の授業改善に SA が参画することの可能性

山形大学 学術研究院 菊田尚人

本コラムでは、地域系科目である「フィールドラーニングー共生の森もがみー」(以下、FL もがみ)の授業改善を進めるに当たって検討すべき事柄の一つを、授業に対する SA(Student Assistant)の語りを通して示すことで、地域系科目の授業改善に SA が参画することの可能性を示したいと思う。FL もがみには、過年度に受講した学生が SA¹として参加している。地域での SA の立場は、教員や受講学生とも異なっているため、彼らの目から見た授業の様相を明らかにすることで、多様な関係者を巻き込んだ授業改善を実現することが期待できる。本コラムでは、SA へのインタビューを通して明らかになった授業改善につながる視点の一つを紹介したい。

ちなみに、フィールドラーニングでは、SA が自主的に学びを深めている様子もみられる。そうした、地域系科目における SA の豊かな学びの実態について、インタビューによる質的な研究を通して明らかにしようとする取り組みも進められている(菊田他 印刷中)。

SA の語りを通して、受講学生が地域での活動と自身の学びとをつなげる際に、教員側ではどのような働きかけができるのかを再検討する必要があることに気付かされた。FL もがみでは、地域での活動を通して発見した課題とその解決策について探究し、報告することを求めている。こうした

学修のプロセスにおいて、受講学生が地域での活動を探究へとつなげていく際の、教員側の支援のあり方に改善の余地があることが分かった。

SA の語りの一部を筆者がまとめたものを以下に示す。

最上のフィールドラーニングで求めているものが、聞いた話を他に伝えることなのか、それとも改善策を発表することなのか分からないところがあります。そういう趣旨を先生は言わないですね。

受講学生は、大学に入ってきてすぐのこの授業で、自分たちが何を求められているかとか、どうやったら点数がもらえるんだろうとかを考えてしまうと思います。考える過程を大事にしていて提案はおまけだったら、提案はおまけだからということをきちんと言えばよいのではないのでしょうか。そうすると、きちんとしたデータをもってきて、自分が体験した地域はどうだったかとかを整理して提案を出すという、過程に主軸をおいたプレゼンができると思います。

こうした語りは、受講学生としての経験もある SA の立場だからこそその切実さを伴っており、授業改善を考える上で重要な論点となり得るものである。もちろん、教員なりの考えをもって授業設計や助言をしているのは確かである。ただし、そうした中でも、SA に対するインタビューで示された視点は、教師側の意図やねらいを多角的に捉え直すための資料として活用が期待できるだろう。

今回のように、SA と教員とが授業について語り合う機会を継続的に設けていくなど、SA が授業改善に参画できる仕組みを整えていくことで、こうした語りを積み重ねていきたい。

注 1

FL もがみの SA は、山形大学の規定によって AA(Administrative Assistant) という名称で雇用されている。また、授業では独自に「学生サポーター」と呼んでいる。

注 2

SA へのインタビューは、山形大学地域教育文化学部倫理委員会より承認を得て実施している（承認番号 2021-31）。また、インタビューへ協力することの同意書も得ている。

参考文献

菊田尚人・阿部宇洋・橋爪孝夫(印刷中)

「地域での体験活動を中心とする科目での SA の自主的な学びの様相—『フィールドラーニング—共生の森もがみ』でのインタビュー調査を通して—」『山形大学 教職・教育実践研究』第 18 号

第3章 もがみ専門科目

I 地域教育文化学部

“新庄市での教育実習（もがみ教育実習）”

山形大学大学院教育実践研究科 江間史明

1 「もがみ教育実習」の16年の歩み

新庄市での教育実習プログラムは、学生が、実習期間中（3週間）、新庄市内に合宿して実習を行うという現地滞在型の教育実習である。「小規模から中規模までの学校を実習校に選べる」など、学校での授業実習に加えて、広く地域と関わって教育実習を行えるという特徴を持つ。この教育実習は、新庄市教育委員会の全面的なバックアップによるものである。この教育実習で学んだ学生の中から、最上地域の市町村で初任教师として第一歩を踏み出す学生が生まれている。地域と大学が連携し、地域を担う教師を育てるという取組が、具体的成果を生みつつあると言える。

この教育実習は、2006(平成18)年度にスタートし、次の表1のように実習生が参加してきた。

表1 新庄市の教育実習実施状況

| 年 | 2年基礎実習 (1週間) | 3年実践実習 (3週間) | 栄養 実習 | 合計 (人) |
|------|-----------------|-----------------|----------|-----------|
| 2006 | 8 | | | 8 |
| 2007 | 18 | 10 | | 28 |
| 2008 | 15 | 11 | | 26 |
| 2009 | | 14 | | 14 |
| 2010 | | 14 | | 14 |
| 2011 | | 12 | | 12 |
| 2012 | | 18 | | 18 |
| 2013 | | 20 | 2 | 22 |
| 2014 | | 25 | 4 | 29 |
| 2015 | | 20 | 6 | 26 |
| 2016 | | 24 | 4 | 28 |
| 2017 | | 12 | 6 | 18 |
| 2018 | | 16 | 6 | 22 |
| 2019 | | 21 | | 21 |
| 2020 | | 4 | | 4 |
| 2021 | | 8(3) | | 11 |

()内は、4年生の副実習で外数。

2009(平成21)年度から、基礎実習(1週間)は、附属学校での実施になり、新庄市教育実習では実施しなくなった。栄養教育実習は、2013(平成25)

年度より2018(平成30)年度までの実施であった。

2020(令和2)度は、新型コロナウイルス感染症の世界的感染に直面した。2月末からの全国一斉休校は3ヶ月に及び、大学でも授業はオンラインとなった。新庄市教育実習でも、合宿形式は、集団生活が密な環境となるため実施できなかった。結果として、2020年度は自宅から実習校に通える学生4名のみでの実施となった。

2021(令和3)年度は、新型コロナウイルスの感染再拡大への対応から、自宅と新庄市のビジネスホテルから通える学生に限っての実施となり、3年生8名(小学校)と4年生3名(中学校)の11名が実習を行った。

2022(令和4)年度は、新型コロナウイルス感染症に対応する3年目の教育実習であった。

2 新庄市教育委員会からの申し入れと実習生

2022(令和4)年度の新庄市教育実習については、2021(令和3)年12月14日付で、新庄市教育委員会よりエリアキャンパスもがみのキャンパス長あてに「山形大学地域教育文化学部教育実習の新庄市での実施について(要望)」(新学発第5395号)という文書が、提出された。

要望書は、2021(令和3)年度教育実習において、新型コロナウイルス感染症への対応で実施が限定的になった点に言及しながら、「実習校においても、教育実習生を受け入れることを大きな刺激として受け止め」ていたことを述べ、「新庄市ならではの少人数指導、小中一貫教育、地域と密着した教育活動」を活かし、令和3年度も引き続き新庄市での教育実習を継続実施するよう要望していた。新庄市教委は、平成25年度より教育実習の宿泊施設である山屋セミナーハウスの使用料(一人あたり1人1030円×20泊)を予算化して、充実した教育実習ができるように、大学との協力体制の整備も行っている。

この要望書を受け、学生へのもがみ実習オリエンテーションを行い、参加者を募った。その結果、2022年度の新庄市の教育実習には、3年生と4年生の9名(小学校6名、中学校3名)が希望した。

3 2022年度教育実習への準備と指導体制

2022(令和3)年度の新庄市の教育実習は、次のように行われた。

- 2022年8月29日(月)～9月16日(金)3週間
 ○教育実践実習A(3年:小6名)
 ○教育実践実習B(3年:中1名、4年:中2名)

小学校実習校は、3校（新庄小、日新小、本合海小）、中学校実習校は、2校（新庄中、日新中）、義務教育学校は1校（明倫学園）であった。

なお、実習期間中の宿泊場所は、新型コロナウイルス感染症への対応で新庄南高校同窓会館が使用できなかったため、山屋セミナーハウスを利用した。市内からやや離れているため、タクシーの乗り合わせで実習校への通勤体制を整えた。

この実習への準備として、2022年8月8日（月）に「山形大学エリアキャンパスもがみ教育実習打合せ」を、新庄市民プラザで行った。江間が実習生と参加した。中西正樹学部長からは、オンラインで大学からの挨拶をいただいた。ここが、学生と実習校との顔合わせの場所になる。全体打合せのあと、学生は、自分が実習を行う学校を訪問して打合せをした。その後、宿泊場所となる山屋セミナーハウスを見学し、実習への準備をすすめた。



打ち合わせ会の様子 8月8日

教育実習期間中の指導体制については、新型コロナウイルス感染症への対策から、実習校が指導を希望する場合には、地域教育文化学部の教員が研究授業を参観し、事後研究会にも参加することとした。これは、山形市など村山地域の実習校と同様の指導体制であった。

4 「地域懇談会」の中止と地域連携の学び

これまで、新庄市教育実習の特色の一つとして、地域懇談会を位置づけてきた。懇談会には、新庄市教育委員会、各実習校の校長および保護者代表者が参加し、大学側からは、江間が参加してきた。学生にとっては、学校内の教育実習に加えて、学校と地域の関係を直に学ぶことのできる貴重な機会であった。学校長からは、学校における地域についての学習や、地域とのつながりのある活動等が紹介された。保護者代表からは、地域とのつながりにおいて学校に期待することや未来の教師に期待することが述べられてきた。

しかし、2022年度については、2020～2021年度

と同様に、新型コロナウイルス感染症への対策から、地域懇談会を中止せざるをえなかった。各校の小中連携や地域との連携は、校長先生の講話や各学校での取組みで扱うこととした。こうした中で、学生は、普段の学校の取組から小中や地域との連携について学んでいた。河内真望さん（資料1、後掲）は、新庄小の取組みに参加した感想を次のように述べている。

新庄小学校では新庄中学校と合同で授業研究会を行っており、新庄中学校の授業も見学させていただきました。事後研究会にも参加させていただきました。小学校と中学校の先生方が意見を出し合い、授業をよりよくしようとしている姿を見て、学校間で連携することで、より質の高い教育と子どもたちの安定した学習環境の実現につながるのだと思いました。

また、地域連携については次の指摘がある。

新庄小学校のPTA役員会にも参加させていただき、保護者の方による挨拶運動や創立記念式典での内容の検討など、学校での活動を進めるにあたって保護者の方や地域の方の力がどれだけ大きいのか実感しました。給食で地域の特産品が出された日には、生産者の方が放送でお話をしてくださり、味わいながら地域のことについて知ることができました。

実習中の日々の教育活動から、河村さんが、新鮮に地域との連携を学んでいることが伺われる。

5 学生の受けとめと今後の課題

このように、2022年度も、新型コロナウイルス感染症による様々な制約の中での実施となったが、新庄市教育委員会と協議しながら進めることができた。では、学生は、2022年度の実習をどう受け止めたのだろうか。

資料3の実習生の今回のアンケートは、回収数9（回収率100%）であった。アンケートからは、次の3点を指摘できる。

第一に、回答者の7名（78%）が、「もがみ地域の学校で実習ができたこと」を「よかった」と回答している（問10）。「指導主事による学習指導案等への指導」も6名が「よかった」としており、新庄市教委の手厚いサポートを受け止めている。「先生方が温かく見守ってくださる」「先生方からの手厚い支援」という指摘もあった。

第二に、実習の前と後で、教職への意欲・関心（問2）が、「大幅に高まった」5名（56%）「少し高まった」4名（44%）とする学生がいたことである。教職への強い意欲を示した点で、本実習が、教師を目指す学生に対して高い教育効果を持ったことを指摘できる。

第三に、実習を体験して勉強になった点（問4）について、「②授業の進め方（板書・発問・展開・等々の仕方）」を回答者の9名全員があげている。それに「⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方」が8名（89%）と続いている。これは、実習生が、授業の基本的な進め方とあわせて、個々の児童生徒へ向き合い方を、同時に学んだことを示している。池田光太郎さん（資料2、後掲）は、「子どもたちの素直さに、私は何度も救われました」として、次のように述べている。

ある時は子どもたちの満面の笑顔に元気をもらい、ある時には子どもたちのつまらなさそうな表情から授業のヒントをもらったりしました。そんな子どもたちの素直さはとても魅力的で、彼らと関わっていると言葉では表せないような力が湧いてきました。「子どもたちのためなら、いくらでも頑張ることができる」ということを冗談抜きに実感しました。

ここで池田さんは、「子どもと接する」という教師の根本を、教育実習で学んでいることを指摘できる。

最後に、来年度への課題についてである。実習校からのアンケート（回答数4/6、回答率66.6%）には次の指摘がある。

- ・非常に礼儀正しく一生懸命な学生が多い印象を受けている。実習に臨むにあたっての心構え、社会人としての基本的な気構え等、基本的な指導を今後も継続してほしい。
- ・今まで通りで構わないと思いますが、あえてあげるなら、板書に慣れていないと思うので経験してくるといいかなと思いました。
- ・今後のことを考えると、ICTの活用などが必要かと思われる。

なお、山屋セミナーハウスから実習校への通勤手段については、自転車の老朽化への対応や、タクシーの配車と退勤時間の調整などの要望が実習生と実習校の双方から出されていた。自転車は、すでに10年以上経過したものである。自転車につ

いては、今年度末に更新できた。来年度は、自転車の通勤を基本に天候等でのタクシーの利用を組み合わせることを検討していきたいと考えている。より充実した教育実習となるように、新庄市教育委員会と協議をしながら進めていきたい。

資料1

新庄小学校での3週間を振り返って

児童教育コース3年 河内真望

私は今年度、新庄小学校で三週間の教育実習をさせていただきました。様々な教科・学年の授業見学や下校指導、実際に子供たちの前に立って授業をさせていただくなど、子どもたちと関わりながら、たくさんのことを学ばせていただきました。今でも鮮明に思い出せるほど濃く、充実した時間を過ごすことができました。この実習を通して感じたこと、学んだことを三つ述べたいと思います。

一つ目は、授業づくりについてです。授業見学を通して、理解が遅れている子の支援だけでなく、理解が早い子に対する追加教材の準備など、全ての子どもたちの学びを止めない授業づくりを学びました。子どもたちの意欲を引き出し、考えるきっかけを作る発問の仕方や子どもたちが考える材料がちりばめられた教材づくり、教材の提示の仕方など、全ての子どもたちが自分に合った方法、ペースで学びを深められるような工夫がたくさん実践されていました。しかし実際に自分で授業を行ってみると、全ての子どもたちへ目を配ることができなかつたり、予想していなかった意見に戸惑い、時間が足りず、子供たちの言葉でまとめられなかつたりなど、子どもたち主導の授業づくりの難しさを感じました。これらを今後の課題として改善に努めていきたいと思います。また、生活科の授業で地域の公共施設について扱った際に、子どもたちが、目をキラキラさせて楽しそうに授業に参加していたことから、身近なものと学習を関連させることで、子どもたちの学習意欲を引き出せることを体感しました。この経験をもとに、子どもたちの身近なものと関連付けた教材研究に力を入れ、子どもたちの主体的な学びを引き出せ

るような教員を目指したいと思います。

二つ目は、子どもとのかかわり方についてです。校長先生のお話から多様性を尊重し、全校生が認め合い、自分らしく過ごせる学校づくりをしていること、そのために学校のルールの意味を問い直し、子どもたちにあったものへと変化させたことを知りました。これまでの慣例に従うのではなく、全ての子供たちが心地よい学校生活を送ることができるよう工夫している姿を見て、教師のあるべき姿を感じました。私も、何が子どものためになるのかを常に考え、変化し続けられるような教師になりたいです。

三つめは、学校間、学校と地域の連携についてです。新庄小学校では新庄中学校と合同で授業研究会を行っており、新庄中学校の授業も見学させていただきました。事後研究会にも参加させていただき、小学校と中学校の先生方が意見を出し合い、授業をよりよくしようとしている姿を見て、学校間で連携することで、より質の高い教育と子どもたちの安定した学習環境の実現につながるのだと思いました。また、実際に授業を見学し合うことで、小学校では中学校で扱う内容を見越した授業が、中学校では小学校の内容を基盤とした授業が行いやすくなり、より系統性を意識したものになるのではないかと感じました。

さらに、新庄小学校のPTA役員会にも参加させていただき、保護者の方による挨拶運動や創立記念式典での内容の検討など、学校での活動を進めるにあたって保護者の方や地域の方の力がどれだけ大きいのか実感しました。給食で地域の特産品が出された日には、生産者の方が放送でお話をしてくださり、味わいながら地域のことについて知ることができました。これが開かれた学校であり、地域に根差した教育なのだと感じました。教師を目指す私自身も、もっと地域に目を向け、地域の良さを知り子どもたちに伝えていく役割を担うとともに、地域と連携して子どもたちの成長を見守っていきたいです。

最後になりますが、新型コロナウイルス感染症の影響のなかで、私たち実習生を受け入れてくだ

さったこと、お忙しい中ご指導して下さった新庄小学校の先生方や子どもたちをはじめ、新庄市の教育委員会の皆さま、地域の方々、保護者の皆様に深く感謝申し上げます。この実習で学んだことや感謝の気持ちを忘れず、これからも教員という夢に向かって日々学び続けていきます。



資料 2

明倫学園（前期）での3週間を振り返って

児童教育コース3年 池田光太郎

私は2022年度に新庄市立明倫学園（前期課程）にて三週間の教育実習をさせていただきました。実習では、6年生の外国語を中心に授業を行いました。授業の度に先生方からご指導いただき、大学で学んだことも併せて、最終日には成長を実感することができました。明倫学園での三週間はとても充実していて、今でも当時の気持ちを鮮明に思い出すことができます。もがみ実習の明倫学園で実習を行うことができ、心から良かったと思います。ここからは、私が実習で学んだことや感じたことを三つ述べたいと思います。

一つ目は、子どもを見ることの重要性です。子どもは一人一人違う性格や個性を有しています。私はこの言葉を知ってはいましたが、実習を通して、それを体験的に理解することができました。外国語の授業をした時、積極的に明るく英語の発音や発表を行う子どももいましたが、あまり声を出さず、下を向いてあまり自分から英語を話さない子どももいました。私は、教師が積極的に子どもたちに働きかけることで彼らのやる気を引き出

すことができると考えていました。しかし、実際には子ども一人一人を理解し、性格や個性を踏まえて授業を行うことで、彼らのやる気を引き出すことができることに気づかされました。ここから、子ども一人一人のことをしっかりと見て理解し、彼らの目線を踏まえながら授業を組み立てていくことの重要性を学ぶことができました。

二つ目は、子どもたちの魅力を肌で実感したことです。子どもたちはとても素直で、笑う時は思いっきり笑い、つまらない時は本当に面白くなさそうな顔をしていました。そんな子どもたちの素直さに、私は何度も救われました。ある時は子どもたちの満面の笑顔に元気をもらい、ある時には子どもたちのつまらなさそうな表情から授業のヒントをもらったりしました。そんな子どもたちの素直さはとても魅力的で、彼らと関わっていると言葉では表せないような力が湧いてきました。

「子どもたちのためなら、いくらでも頑張ることができる」ということを冗談抜きに実感しました。この気持ちを忘れず、これから先も子どもの素直さに、全力で応えていきたいです。

三つ目は、何事においても自分一人ではできないことを学ぶことができました。三週間の実習では、たくさんの人に助けられました。授業を考える際にご指導いただいた先生方。いきなり現れた教育実習生の私を歓迎してくれて、授業にも積極的に参加してくれた子どもたち。そしてそれを受け入れてくださった保護者の方々。さらには、もがみ実習のために尽力してくださった山形大学や新庄市教育委員会の方々。たくさんの人のおかげで、私は三週間の実習を充実したものにすることができました。独りよがりにならず、常に関わる全ての人に感謝をする。この気持ちを忘れず、これから先も過ごしていきたいです。

私にとって明倫学園での三週間はかけがえのない宝物になりました。毎日が充実していて、楽しくも悔しくもあり、常に心に何かしらの感情が充満していました。楽しく嬉しくて笑ったことも、悔しくてやるせなくて落ち込んだことも、すべてが大切な思い出です。そのどれもが、明倫学園の

教職員の方々や子どもたち、そして山形大学や新庄市教育委員会の方々のおかげです。このような場ではありますが、皆様には深く感謝を申し上げます。私にこのような貴重な機会を与えていただきありがとうございます。これからも「教師になる」という思いのもと、日々努力していきます。



資料 3

教育実習に関するアンケート(もがみ教育実習)結果(別紙)

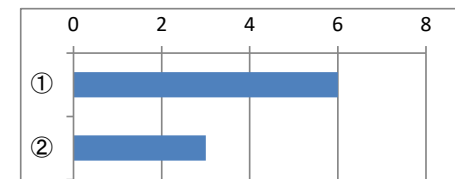
教育実習に関するアンケート(もがみ教育実習)結果

以下の質問について該当する選択肢に☑してください。

1. あなたはどこで教育実践実習(以下「実践実習」)を行いましたか。

- ①小学校
- ②中学校

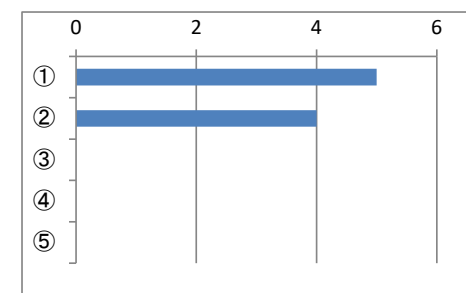
| | |
|---|---|
| ① | 6 |
| ② | 3 |
| 計 | 9 |



2. 教育実践実習(以下、「実践実習」)体験後の教職への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
- ②実習前より少し高まった。
- ③実習前とあまり変わらない。
- ④実習前より少し下がった。
- ⑤実習前より大幅に下がった。

| | |
|---|---|
| ① | 5 |
| ② | 4 |
| ③ | 0 |
| ④ | 0 |
| ⑤ | 0 |
| 計 | 9 |



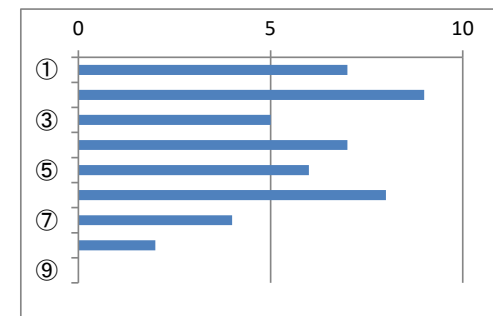
3. 問2で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)

回答なし

4. 実践実習を体験してどんなところが勉強になりましたか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
- ②授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)
- ③教材研究の方法
- ④学級経営の理解(掲示物の示し方・児童一人一人の理解・児童の関係づくり)
- ⑤児童生徒集団の理解の仕方
- ⑥個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑦教具・教育機器の活用の仕方
- ⑧特別活動(児童会・生徒会活動・クラブ活動・学校行事)の指導の仕方
- ⑨その他

| | |
|---|----|
| ① | 7 |
| ② | 9 |
| ③ | 5 |
| ④ | 7 |
| ⑤ | 6 |
| ⑥ | 8 |
| ⑦ | 4 |
| ⑧ | 2 |
| ⑨ | 0 |
| 計 | 48 |

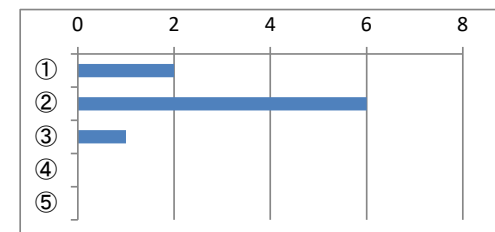


5. 実践実習体験後の大学の授業への意欲・関心の変化

- ①実習前より大幅に高まった。
 ②実習前より少し高まった。
 ③実習前とあまり変わらない。
 ④実習前より少し下がった。
 ⑤実習前より大幅に下がった。

①
②
③
④
⑤
計

| |
|---|
| 2 |
| 6 |
| 1 |
| 0 |
| 0 |
| 9 |



6. 問5で④または⑤を選択した方は、その理由を記入してください。(自由記述)

回答なし

7. 大学の授業の効果について

小研・特研を行った教科と、役立ったと思う授業科目名を記入してください。

小研:国語 初等教科教育法Ⅱ

小研:国語 初等教科教育法ⅠⅡ(国語)

小研:算数 初等教科教育法Ⅱ

小研:算数 初等教科教育法(算数) この単元でどのようなことを学ばせるべきなのかを理解したうえで教材研究に取り組めたことで、大学の授業が身につけているのだと感じた。

小研:英語 英語科の授業全般特研:英語 英語科の授業全般

小研:外国語 初等教科教育法(外国語)ミラー・ジェリー授業回分。

特研:保健体育 保健体育科の教材分析B

小研:道徳 電車の中で(思いやり) 特研:理科 イオン

8. その他実践実習で役立ったと思う授業科目名を記入してください。

生徒指導・進路指導(5)

特別活動論(2)

教育経営学(2)

初等教科教育法(社会)(2)

初等教科教育法Ⅱ(算数)

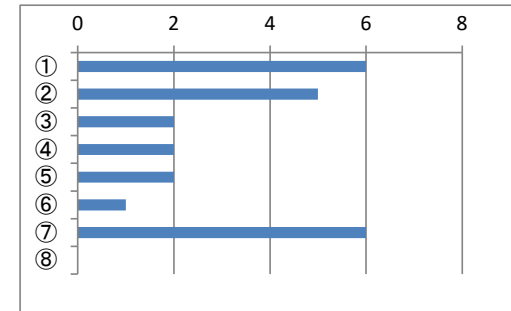
安全教育

道徳教育の理論と実践

9. それらの授業が役立ったところはどんな点ですか。(複数回答可)

- ①教科の内容の理解
- ②教科・道徳の指導案の書き方
- ③担任教諭の学級経営上のポイントの理解
- ④児童生徒集団の理解の仕方
- ⑤個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑥教材研究の仕方
- ⑦授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)
- ⑧その他

| | |
|---|----|
| ① | 6 |
| ② | 5 |
| ③ | 2 |
| ④ | 2 |
| ⑤ | 2 |
| ⑥ | 1 |
| ⑦ | 6 |
| ⑧ | 0 |
| 計 | 24 |

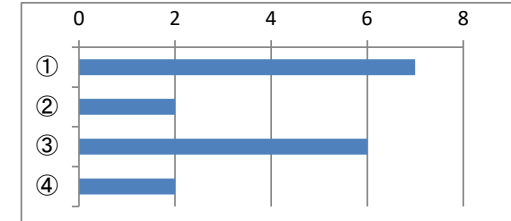


10. 「もがみ教育実習」の内容で、よかったのはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①最上地域の学校で実習ができたこと
- ②保護者や地域の人を交えた懇談会
- ③指導主事による学習指導案等への指導
- ④その他

- ・先生方が温かく見守ってくださる
- ・先生方からの手厚い支援

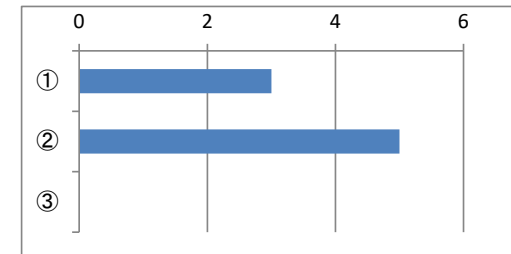
| | |
|---|----|
| ① | 7 |
| ② | 2 |
| ③ | 6 |
| ④ | 2 |
| 計 | 17 |



11. 「基礎実習」(2年次)の効果について

- あなたは、「基礎実習」の経験が役立ったと思いますか。
- ①大いに役立った
 - ②少し役立った
 - ③あまり役立たなかった

| | |
|---|---|
| ① | 3 |
| ② | 5 |
| ③ | 0 |
| 計 | 8 |



12. 問11で答えた理由・改善して欲しい点など(自由記述)

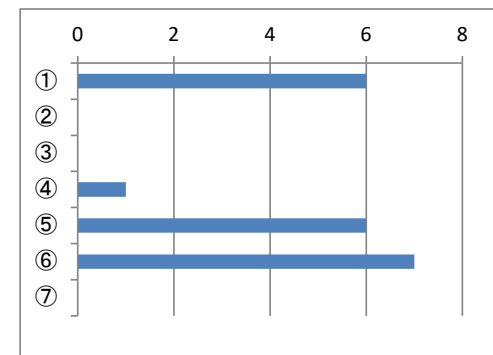
- ・基礎実習で経験は積めたが、付属の子どもたちと最上の子どもたちでは性格や能力が全く異なっていたため。
- ・基礎実習では1年生を今回の次週では2年生の担当となり、低学年の児童についてより深く理解が進められたと思う。

13. 「基礎実習」の経験で役立ったところはどんな点ですか。(複数選択可)

- ①教科・道徳の指導案の書き方
- ②学級経営案のポイントの理解
- ③児童生徒集団の理解の仕方
- ④個々の児童生徒の理解と受容の仕方
- ⑤教材研究の仕方
- ⑥授業の進め方(板書・発問・展開等々の仕方)
- ⑦その他()

- ①
- ②
- ③
- ④
- ⑤
- ⑥
- ⑦
- 計

| | |
|---|----|
| ① | 6 |
| ② | 0 |
| ③ | 0 |
| ④ | 1 |
| ⑤ | 6 |
| ⑥ | 7 |
| ⑦ | 0 |
| 計 | 20 |



14. 実践実習の前に、学習・準備しておくと言ったことについて自由に記入してください。

- ・実習終了時に児童に渡すプレゼントや色紙について、予め計画したり準備したりしておくこと(実習が始まると教材研究で時間がとれない)。
- 教科書会社の年間指導計画に基づいて教科書を読んでおくこと。休み時間に子ども達と一緒に遊ぶネタを考えておくこと。学習指導要領を読んでおくこと。
- ・1板書。授業を実際に想定し板書計画を具体的に考えてみたり、文字を黒板にかいてみたりするとよいと思った。

2話すネタ。子どもと距離を縮めるために、子どもの興味を引くような楽しかったり面白かったりする話をいくつかもっておくと良い。子どもとの良い関係や距離の近さなしに授業や実習は成り立たない。

- ・教材の把握
- ・研究授業をしたいと思っている教科について考え、その教科の教科書を少しでも見ておくこと。
- ・自分が行う単元を調べて指導案を見ておく。→自分が授業する時にどんな工夫をしたいのか考えやすい
- ・教科書の授業担当範囲をチェックしておく
- ・道徳の指導案や体育の指導案など書きなれていない指導案の書き方の確認

15. もがみ教育実習について、改善すべき点等があればご意見をお聞かせください。

- ・主に宿泊の面だが、学校によって退勤時間が異なることで、相乗りの実習生の待ち時間が長くなっていることと、車を使える人が1人だけだったことで、車を持っている人への負担が大きかったことが改善すべきだと感じた。
- ・自転車を新しいものにしてほしいです。あの自転車であの坂を上るのは酷すぎます。
- ・送迎はタクシーにすべきだと思います。他の実習生にお願いすると、特に退勤時間が実習校ごとに違うため、送迎する実習生、あるいは送迎してもらおう実習生のどちらかが待つことになり、今回の実習ではそれがほぼ毎日ありました。送迎をタクシーにして、各々の時間で通退勤できるようにする方が良いと思います。
- ・もがみ実習は附属での実習よりも人数が少ないため、先生方が丁寧に教えてくださり嬉しかった。また最上地域の生徒たちもとても素敵な生徒たちばかりで、2回目の教育実習だったがとても楽しかった。もがみ実習に改善点は特に思いつかないが、コロナの影響で予定されていた英語科の模擬授業が全てできなくなってしまったまま教育実習に臨んだ学年だったので、先生方に普段よりもお手数をおかけしてしまったように思う。もし3年生や2年生の副免の授業で、実習前に模擬授業ができていない学年がいたとしたら、それぞれの教科で対策をするべきだと思った。
- ・自転車のサドルが高く、宿泊した半数が自転車に乗ることができなかったため、調節ができるものを用意してほしい。

第4章 もがみ活性化事業

I 大学見学旅行

最上地域の子供たちに、もっと山形大学のことを身近に感じてもらうために「山形大学見学旅行」を開催しております。

児童の皆さんには、身近なものを使った「化学実験教室」として、楽しい実験を体験してもらうほか、校内散策や学食の利用等をとおして大学の雰囲気を味わってもらいます。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実績はありませんでした。

II もがみ協力隊

もがみ協力隊は、エリアキャンパスもがみに関連した活動へ参加する山形大学の学生組織です。

1 フィールドラーニング応用編

フィールドラーニングを受講した学生が、授業外で自主的に地域へ訪れる活動を「フィールドラーニング応用編」と呼んでいます。

令和4年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、実績はありませんでした。

第二部 授業記録

○「フィールドラーニングー共生の森もがみ」プログラム

1. 十日市復活ー未来のウォークブル街づくりについて考えるー 29
2. かねやま旅情 35
3. 最上町から生まれた楽器を全世界に広めよう 41
4. 里地里山の再生 I 47
5. 子どもの自然体験活動支援講座 53
6. 知られざる大蔵村の歴史と文化、郷土の食を求めて 63
7. 人と自然と地域をつなぐ環境保全活動 70
8. 里山保全と角川のパワースポット巡り 74

十日市復活－未来のウォークアブル街づくりについて考える－

活動状況

○実施市町村：新庄市

○講師：一般社団法人最上のくらし舎 吉野優美，本澤充夫
万場町歩行者天国企画チームの皆様

○訪問日：令和4年5月7日(土)～8日(日)，5月14日(土)～15日(日)

○受講者：人文社会科学部1名，地域教育文化学部1名，工学部3名，農学部3名 以上8名

○スケジュール：

| 1回目 | 2回目 |
|--|--|
| <p>【1日目】5月7日(土)</p> <p>8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 10:00 のくらし到着 10:20 集合，オリエンテーション，自己紹介 10:40 (1)万場町の昔の様子について 12:00 昼休憩 13:00 (2)商店街を知る ・万場町商店街を歩き，何店舗かに話を聞かせてもらう 15:30 (3)十日市を行う場所について確認 16:00 まとめ 16:30 山屋セミナーハウスへ移動</p> | <p>【1日目】5月14日(土)</p> <p>8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 10:00 のくらし到着 10:20 (6)5月8日で各自が決めた役割をもとに十日市へ参加 15:00 十日市終了・片付け 16:00 十日市に参加して気づいた点や感想についてまとめ・共有 16:30 山屋セミナーハウスへ移動</p> |
| <p>【2日目】5月8日(日)</p> <p>9:30 山屋セミナーハウス出発 10:00 (4)万場町ホコテン企画チームの方と交流及び学生へプロジェクトの趣旨について説明 11:00 (5)企画チームからの説明を踏まえて十日市での役割について学生に決めてもらう。 12:00 昼休憩 13:00 午前中に決めた各自の役割を遂行するために必要なことを考えてもらう。 15:30 次回やることについてまとめ 16:00 終了 新庄駅へ移動 16:30 新庄駅山大バス発</p> | <p>【2日目】5月15日(日)</p> <p>9:30 山屋セミナーハウス出発 10:00 (7)のくらしの吉野さんと参加学生で十日市への参加を通してウォークアブル街づくりや商店街の抱える課題(後継者問題など)について考える 12:00 昼休憩 13:00 全体のまとめ 学生たち自身の発表内容について考えてもらう 16:00 プログラム終了 のくらし発 16:30 新庄駅山大バス発</p> |

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Kさん

私は、このプログラムに参加する前は、地域内外からのお客さんが多く訪れ、賑わいのある商店街を想像していた。しかし、今回フィールドラーニングを行った万場町商店街は、私の想像と全く異なっていた。

まず、万場町商店街を訪れた時の感想は「ここは本当に商店街なのか？」というものであった。辺りはシャッターで店が閉ざされていて、仙台市にある商店街とは大きく違っていた。街の散策をした時も、歩道は整備されておらず、人通りも無かった。しかし、地域の方々の地元愛や人柄は素晴らしいものであった。

5月14日に行われた「よろず市」は今回試験的に実施された万場町商店街のイベントである。初めての開催であったため、知名度が無かった。また、この日は雨・風ともに強かったため、お客さんが来ないのではないかと考えたが、最終的にはお店側が準備していた個数よりも多く売れ、完売した店舗もあった。店主の方にお話を聞くと「万場町にこんなに人が集まったのは久しぶりだ。予想以上に商品が売れ、驚いている。」とのことであった。「よろず市」は一応成功に終わったが、人手不足といった多くの改善点が出たほか、お子様連れの方にお話を聞くと「もっと子供が楽しめる催しや商品があると良かった。」との意見もあった。

そこで、私は2つの解決策を提案する。1つ目は、スタンプラリーや抽選会を実施したり子供向けの商品を多く販売したりすることである。この取り組みを行うことにより、お客さんがより多くの店を回ろうと思えば、お子様連れの方にも飽きないで楽しんでもらうことができるのではないかと考える。2つ目は他の商店街と連携したイベントを行うことである。講師の本澤氏のお話では、まず万場町が羽州街道沿いにあったため、昔は賑わいがあったものの、新庄駅ができたことにより駅前には3つの商店街ができ、駅前から遠い万場町に賑わいが無くなったとのことであった。人通りの多い駅前と連携イベントや催し物を一緒に行うことによって、地元の方が万場町にも足を運ぶようになるのではないかと考える。そして、地域連携や地元愛を持つ人が増えることによって人手不足解消にもつながるとも考える。

「その地域にいる人が楽しめるようになれば、自然と商店街も楽しくなる」という吉野氏のお話にもあったように、住民1人1人の地域への愛着も重要である。今後、人口減少が進んでいく中で、地域の人々がそれぞれ問題意識を持ち、活性化へ向け行動に移していくことが鍵となると思う。

地域教育文化学部 Sさん

万場町を訪れて、将来の街の在り方を深く考えるきっかけになったと思う。商店街に再び活気を取り戻すには、地元の人にどれだけ地元への関心を持ってもらえるかが大切であると思う。今回は、万場町を歩いて、また、よろず市を開いての体験から考察しようと思う。

まず、実際に万場町を歩いてみて感じたのは、町の歩きにくさだ。

歩く、という面でいうと、車道幅が広く、歩道幅が狭いこと、道が入り組んでいて奥のほうに店があることもあり、どこに行けばよいかわかりにくいことなどがあげられる。後者の改善のため、フィールドラーニング2回目で行ったよろず市に向けて来場者用にマップを作った。よろず市当日は、そのマップと現地を対応させて店を巡り、手前のほうは何もない時よりも回りやすくなったが、奥のほうは、手前のほうよりも店数が少なく、マップがあっても店までたどり着きにくかった。一度回っている私もそう感じているため、初めて訪れた人にとっては少し不親切になっているかもしれないと思った。

精神的な面でいうと、シャッターが閉まっているような静かで店に入りにくい雰囲気や、店の中に入ってもスーパーマーケットと違って店員の目を気にしてしまうことなどがあげられる。前者は、店側が客足の低下に伴って店を閉める日を増やしているからだと考えられる。よろず市などのきっかけがあることによって、雰囲気の改善は十分にできると思う。後者は、商店街にある専門店ならではのことであり、自分の知らなかったことを知るきっかけになるので、入りづらくてもよい特徴なのではないかと思う。

次に、よろず市は、万場町の発展に不可欠なものだと感じた。予想していた以上に宣伝効果があり、親子連れのお客さんを中心にお客さんが多く来ていた。それぞれのお客さんの店への滞在時間が長いことが印象的だった。商店街の空間そのものを楽しんでいるような気がして、また、商店街にとっては外に開くきっかけになったため、よい企画だったと思う。今後、商店街はよろず市を開くことにより生きがい生まれ、よろず市によって商店街に客足が戻るという相互作用が生まれるだろう。

商店街に活気を取り戻すためには、地元の人に地域への関心を持ってもらうことが必要である。商店街だけではなく、公園や神社など、地元には何があるか、地域住民には何ができるのかを考えられる「よろず市」のような場を設けることによっても地域への関心を持つことができると思う。また、店と街が一緒に場を開くことによって、地元の人々が商店街の人々との交流を増やすことができると思う。

今後は、今回の万場町の体験を通して私が住んでいる町には何があるかを実際に歩いて調査してみたと思う。そして、人が楽しく、歩きやすく過ごせるまちづくりをするためには何ができるのかを考えていきたい。



工学部 Sさん

私が今回このフィールドラーニングに参加した理由として、高校3年間新庄市にある学校に通っていたが、地域のことについて詳しく知らなかったため、今回の活動を通して解決策を見つけられるのではと思い参加した。

初めに、商店街を歩いてみて、「なんか寂しいなあ」と感じた。なぜなら、歩いている地域の方は見られず、さらには開いているお店も少なかったために、町全体が暗く感じたからだ。また、お店が開いていても何を売っているお店なのかがわからず店内に入りにくいお店も多かった。店兼住宅という作りになっているお店がほとんどで店員さんはお客さんが来たら家の中から出てくることが多く、さらに入りにくい空間になっていた。

5月14日に行われた「よろず市」は今回初めて行われ、あいにくの雨や風の影響でお客さんがあまり来られないのではと思われていたが、こちら側の予想を超えるお客さんが来られたため、お店側が準備していた個数よりも多く販売することができたり、完売になったりしたところもあった。また、来られたお客さんの中でも特に幼稚園・小学校低学年のお子さんを連れた家族層が多く見られた。しかし、お客さんに話を聞いてみると、「子供が遊べるような出し物や企画をもっと増やしてほしい」という意見があった。

そこで私は今後の「よろず市」開催の改善点・課題解決策を提案する。それは子供向けの企画・体験を増やすということである。今回の「よろず市」では遊学の森さんの出店で、けん玉の連続チャレンジや箸づくり体験があったが、難しかったという意見がありました。そのため、私はスタンプラリーや抽選会という企画を提案する。なぜなら、この企画は小さいお子さんでも気軽に楽しむことができたり、お客さんがより多くのお店や屋台を回ろうという思いが増したりと、すべてのお客さんに楽しんでもらうことができると考える。また、これらスタン

プラリーや抽選会の結果は最上郡内の施設、例えば温泉・旅館などで割引券にするなどをして地域とのつながりを強くすることができると思う。

そこに住んでいる地域の方の意識が変われば街を変えることができると感じた。今回の「よろず市」は住民1人1人の意識や考え方が変わる良い機会だと感じた。

「よろず市」を通して万場町の商店街に活気が生まれ、これからより住みやすい・歩きやすい街、つまり、吉野さんをはじめとする万場町の皆さんが目指した『万場町』になっていくと思った。

工学部 Sさん

現在、日本のいたるところでシャッター商店街が問題視されている。そして私の地元の商店街も例外ではなく、これらの問題を解決するためのヒントとなるのではないかと考え、このプログラムに参加した。このレポートでは、新庄市での学習を通して見えてきた万場町の抱える課題と解決法を考察していきたい。

1. 万場町の商店街の現状とそこにいたるまでの経緯

初めて商店街を歩いてみた印象としては、どちらかというと住宅街のような雰囲気、閉まっているお店がみられ、やっていたとしても少々入りにくい状態のお店もある、というものだった。昔は羽州街道が通っており、明治時代には遊郭も集まっていたため、にぎやかであったというのに、どうしてこのような状態になったのだろうか。少子高齢化やショッピングモールの影響、車社会になったことなど、さまざまな原因が考えられるが、私はそれ以上に大きな問題があると考えた。それは、地元の人がどうにかして現状を変えたいと思う気持ちをあまり持っていないということだ。しかし地元の人を責めているわけではなく、むしろ自然なことのように思う。高齢の方々には特に、客観的に見て自身の町の状況に気づくのは難しい。また、気づいていたとしても、未来のために改善していこうと行動する気持ちにもなりにくいのも事実だ。そこで大事になるのが外部の人の働きかけであると思う。そう強く感じたきっかけはよろず市の開催だ。これから、よろず市とはまず何なのかを説明していきたい。

2. よろず市のねらいと効果

よろず市とは、昔万場町で毎月十日に行われていたという「十日市」と呼ばれる大売出しにのっとった市場である。コンセプトは、万場町あたりを歩くことが楽しみのひとつになってほしいというものだ。ショッピングモールのようにモノの売買が中心の商売でなく、ゆっくり歩くことで人とコミュニケーションをとることを楽しむことができる。

次に、よろず市をすることになった経緯を説明する。まず、令和1年度にまちおこしをしようということで、「万場町のくらし」の店主さんや、地元や市役所の

方々と話あった結果、歩行者天国をしたいという案がでた。それから、新型コロナウイルスの影響によりすぐには実現しなかったものの、段階的に毎年イベントを行っていき、今年にやっとよろず市を開催することができた。最終的には歩行者天国も実現させたいと考えているようだ。

市場開催のねらいとして、多くの人にきてもらい、にぎわってほしいというのもたしかにあったが、万場町でおこなう初の大きな試みとして、少しずつやっということうことで社会実験的な要素もあった。したがって、いつも落ち着いていて静かな万場町に、どのぐらい人が来てにぎわうのか、誰も予想することができなかった。しかし、よろず市が始まってみると、予想していたより数倍もの人が来たのである。初回だったため、改善点はたくさんあったものの、情報発信やお店側の工夫をすれば、ちゃんと人が来るということが証明されたように感じた。

また、もう一つのねらいとして、冒頭に示したように通常時は入りにくかったお店もよろず市という場を設けることで、地元の人でなくても入りやすくするこた。実際には、すべてのお店ではなかったが確実に入りやすくなった店も多かった。よろず市を重ねていくうちに、お店側の熱意が広がっていき、お店同士のこのような差も縮まっていくことを期待している。

3・まとめ

このプログラムでは、共に行動していく中で、「のくらし」店主の彼女のまちとの関わり方を見て、まちづくりをするうえで大事なことを学ばせていただいた。それは地域の人とよくコミュニケーションをとることで、彼らは何を望んでいるのかを汲み取り、その地域の足並みにあわせてまちづくりをしなければならぬということだ。すべての地域において、人がたくさん来ることが、必ずしもよいまちづくりだとも言えないし、適切なまちづくりの方法は異なる。今回のよろず市でも、どのようにして初回の活気を失わずに続けていくかという課題が出たが、そのような課題を客観的にかつ、寄り添いながら分析して、地元の人とともに歩いていかなければならぬと感じた。また、このプログラムを通して、地元の人々だけでは難しいことが、外部の人が働きかけてあげることによって可能になるというのを目の当たりにし、外部の人の新しい風は、地元の人々を再集結させる力があると感じた。



工学部 Nさん

1. はじめに

私が今回このフィールドワークに参加した理由は、自分の地元の商店街がシャッター街になっているのを見て、廃れてしまった商店街に活気を取り戻すにはどうすればいいのかを考えようと思ったためである。また、国土交通省によると、ウォーカブルなまちとは「居心地がよく歩きたくなる」まちのことである。では何をもって「居心地がいい」「歩きたい」となるのか？万場町を歩き、よろず市を通して考えたいと思う。

2. 万場町を歩いて

私が初めに万場町商店街を歩いて感じたことは、歩きづらい、そして商店街感がないということである。歩道があまり整備されておらず通りを歩いている人はほとんどいなかった。また、シャッターの閉まっている店や、店内が暗く開いているのか分からないような店が多く、町全体に活気が感じられなかった。

3. よろず市に参加して

準備段階で感じたことは地域の人たちのつながりの強さだ。今回お世話になった吉野さんを中心に、万場町の人たちだけでなく、新庄市の市役所の方や他地域から出店する人までが互いに協力し合いながら会場の設営を行っていた。

よろず市が始まると予想を上回る数のお客さんが訪れた。幼稚園、小学校低学年くらいの子供を連れた家族が多く、お年寄りや大学生くらいの集団も見られた。商店街の方々もここまで人が集まるとは思っていなかったようで、完売してしまった店もいくつかあった。一回目のフィールドワークとは対照的に、よろず市開催中は万場町に活気があった。

また、よろず市で人通りが多かったためか、雨で足場が悪かったにもかかわらず万場町が一回目に歩いた時より歩きやすいと感じた。

4. 全体を通して

私ははじめ、町の歩きやすさは歩道などがどれだけ整備されているかで決まるものだと思っていたが、よろず市を通してそれだけではないと考えるようになった。万場町を活性化し歩きやすい商店街にするには、商店街の人々や地域による歩きやすい雰囲気づくりが必要だと感じた。そのためには吉野さんがおっしゃっていたように、定期的によろず市のようなイベントを開催することが効果的であると考えている。回数を重ねるごとに地域の人たちが商店街に興味を持ち、よろず市が開催されていなくても人々が商店街に足を運ぶようになれば、万場町は居心地が良く歩きやすい商店街になるのではないだろうか。

今後、今回の万場町での経験を活かして、自分の地元の商店街にはどういった問題があり、自分には何ができるのか考えていきたいと思う。



農学部 Tさん

私は今回参加した理由として、自分が3年間通った高校がある新庄市をあまり知らない事、そして私の出身の町も隣にあり同じように町の活気低下、シャッターが下りている商店の増加などを課題として持っているので今回の活動を通して何か解決の糸口を見つけられるのではと思い参加した。

万場町商店街を歩いて商店街らしさがないと感じた。なぜなら商店街特有のアーケードが無く、シャッターが下りている店舗も多く活気があるように感じられなかったからである。さらに店内が暗く外から店員さんの姿が見えないためただ暗いのかやってないのかの判断が付きづらいというのを感じた。他にも手入れがなされておらず放置されている神社もあった。この後講師の吉野さんに聞いたところ、人が集まらなくなり商店街や神社など地域の施設が衰退していきより人が集まらないと

いう悪循環を繰り返すそうだ。そこで今回企画されたのが「よろず市」である。今回の「よろず市」は商店街に人を呼び込むために行うのはもちろんで吉野さんは「よろず市」がゴールと考えておらず、万場町商店街が人々の集まる場所になることが目標であるので「よろず市」は1つの手段（通過点）と考えている。

自分が「よろず市」を歩いてみて、自転車屋さんがスイーツやゼンマイを売っていて、鮮魚店の中に多くの似顔絵が飾ってあるなど本来の商売とは関係ない事がそのお店に入るきっかけとなると感じた。またいつもと違う商品があれば店主とお客さんの会話も生まれ、その会話が次回開催した時にも来る一つの理由となるのではと感じた。また吉野さんと共に市を企画した方は天候が悪い中でもここ数年で万場町通りに一番人が集まったのではないかとおっしゃっていた。特に来場者の平均年齢が低く、幼稚園や小学校低学年の子供を連れた親子が多かった。

今後の取り組みとして次回以降の開催予定が決まっている「よろず市」の改善が現実的かつ効果的だと考え、2つ提案する。

1つ目は今回低年齢向けの出店が無く、低年齢向けの出店を増やす事を提案する。けん玉体験もあったが幼稚園児には難しい様で、例えば小野銃砲火薬店さんが狩猟用の鉄砲の一部を持つ体験や、遊学の森さんが出店していた木製製品を生かし積み木や輪投げができる様にするのも子供が楽しめる工夫だと思う。

2つ目はスタンプラリーの開催である。一定店舗で買い物をするすると景品がもらえる仕組みにして普段入らない店舗に入るきっかけになると考えられる。

今回の市で思うように集客できなかった店舗が他の店主さんと話しをして改善していったりすることで商店街の活性化と地域の繋がりが相互に働き、吉野さんの目指す掘りどころとなると感じた。

農学部 Aさん

最初に万場町の商店街を回ったときは、見た目ではお店か住宅か、また、営業しているかどうか分らず、本当に商店街なのかと思ったほどだった。しかし、今回のフィールドラニングを通して、万場町の住民の皆さんの繋がりの強さに触れ、商店街復興の可能性を肌で感じることができた。

商店街の一番の魅力は、そこで繰り広げられる交流（会話）にあると考える。スーパーに行けば、そこにはマニュアル化された世界があり、店員や客との会話は殆どない。スーパーは商品を購入するための場所であり、店員との会話は、あったとしても事務的なものに限られてしまう。だが、商店街では、型にはまらない独自の世界が繰り広げられる。会話は、世間話や近状報告なども含め、気兼ねなく行われる。また、商店街には専門店が多いことも魅力の1つだ。店員は、販売する商品のこと

を熟知しているため、客は自分のニーズに合った商品を気軽に尋ねられるし、店員から専門店ならではの情報を教えてもらうなど、お互いに気持ちの良い空間が商店街にはある。

私は、商店街を活性化させる目的は、ひとえに地域に活気を取り戻すことにあると考える。

地域の「顔」としての商店街は、その地域の性格が色濃く表れる場所であることから、商店街の活性化は、地域に活力をもたらすための最短かつ最善の方法であると思う。

今回のよろず市では、商店街活性化に向けた一歩を踏み出すことができたのではないかと感じた。まず、よろず市に参加した店舗の多さが挙げられる。始めに訪れたときは、あまりに閑散としていたため、店側に、商店街を復興させたいという気持ちがあるのか疑問に感じてしまった程だった。だが、今回初開催だったにも関わらず、よろず市に参加した店が多かったことから、店側にある、商店街を元気づけたいという気持ちが伺えると思う。また、今後の商店街の活性化に向けて、よろず市の定期的な開催が鍵を握ると考える。今回のよろず市では、初開催かつ悪天候という条件の悪い中、多くの来客があり、店側が驚くほど商品が売れたところもあった。商品の購入のみならず、地元の方同士の気兼ねない会話も多く見られ、地域の方々の繋がりを感じた上、店側も客側も、よろず市を楽しんでいたように思う。その状況は、商店街らしい姿であったように感じる。

よろず市を定期的な開催することで、商店街の方々が以前の活気を取り戻し、よろず市でない普通の商売へも、良い影響が及ぶと思う。そして、よろず市が店側にとっても客側にとっても生きる上での「楽しみ」になっていくのではないだろうか。

吉野さんがおっしゃったように、よろず市は「手段」でしかない。だがその手段を通して得られるものは、何物にも代えがたいものであると感じた。

農学部 Sさん

今回の山形フィールドワークに参加した理由として、私は、様々なことに対して興味を持つ性分で、ウォークアブル町作りについてどのようにすれば人中心の町に生まれ変わるのか、どのようなことが求められるのかなどを知りたいと思ったためです。

まず、一週目の活動において、新庄市の昔について教えていただき、その後万場町を散策し、周辺の街並みを見たり、店舗の方々の話を聞いたりしました。万場町を含む新庄市では昔からの豪雪地帯であり、冬季には家から外出することが難しかったそうです。そのため、家々ではそれぞれで商いが発展してきました。また、新庄市は7つの村と7つの町から形成されて生まれました。そして市を流れる川が農業用水として用いられた街であることも語られていました。戊辰戦争のころは、新政府軍

側に移動したことで庄内藩に攻撃され、現在まで残っている歴史的建造物は少ないそうです。

私が今回の活動で街を歩いて感じた感想としては、万場町近隣の店はどれも用品がある程度特化しており、スーパーなどとは異なり、店ごとの個性が存在することで、街をグループの皆さんと散策した際、日本国内でも有数の銃砲火薬店があったり、魚屋の壁面いっばいに似顔絵が張られていたりなどが見られるほか、個人店舗のために自由な品ぞろえがされている店が多いと思いました。

二週目の活動においては、よろず市で出店の手伝いや、店番を行いました。その過程で古い建物を使用しました。この時小さい子供が中が暗いなどから怖がり、入ってこられないことがあったほか、もっと小さい子供が参加できる催しが必要であるとも意見をいただきました。このことから開く店の内容だけではなく、使う場所に対しても一般目線では入りやすい環境の用意は必要になるのだと感じました。また、よろず市がなくともどの店でどのような商品が並んでいるのか知ってもらえれば万場町でより人が歩く状況を作る後押しになるだろうと思いました。

よろず市を経験しての意見としては、店舗を展開する場所の見栄えを整えることがあります。今回、旧銀行倉庫を店の展開場所としていましたが部屋の奥は一部の壁がはがれていたり明かりのない部屋が見えたりと小さい子供によっては怖いと思われ、布や紙で隠す、光源を取り入れるといった対策は必要だと思いました。また、雨天時の休憩所の用意に対しては決定されていましたが強風などでテントが飛ばされることがあったため、安心して休んでもらえるようにきちんと対策を立てるべきであると感じました。以上のことから今回の学びを生かしてどうすれば人が街を歩く社会になるのかを考えていきたいと思います。



かねやま旅情

活動状況

○実施市町村：金山町

○講師：遊学の森 三上重幸，谷口銀山保存会 井上敬助

○訪問日：令和4年5月14日(土)～15日(日)，6月4日(土)～5日(日)

○受講者：人文社会科学部1名，地域教育文化学部2名，医学部3名，工学部2名 以上8名

○スケジュール：

| 1回目 | 2回目 |
|--|--|
| 【1日目】5月14日(土) 8:00 山形大学発 9:45 新庄駅集合 10:40 遊学の森着 11:00 オリエンテーリング・そば打ち 12:00 昼食 13:00 水辺の観察会 15:30 振り返り 16:00 ホテルへ移動 | 【1日目】6月4日(土) 8:00 山形大学発 9:45 新庄駅集合 10:40 遊学の森着 10:50 森の感謝祭2022 ①木エクラフト②ネイチャーゲーム ③観察会④そば打ち 15:00 終了，振り返り 15:30 ホテルへ移動 |
| 【2日目】5月15日(日) 8:40 ホテル出発 9:00 谷口地区公民館着 谷口歴史講座 12:00 昼食(町内飲食店) 13:00 谷口銀山見学とボランティア清掃 14:30 遊学の森へ移動 15:00 振り返り 16:00 新庄駅解散 18:00 山形大学着 | 【2日目】6月7日(日) 8:45 ホテルパル集合 9:00 木育×食育フェス「ブナの新緑フェスト」 ブナの新緑案内やマイ箸づくりなど 13:00 スポーツ GOMI 拾い 15:00 振り返り(グリーンバレー神室管理棟) 15:20 グリーンバレー神室出発 16:00 新庄駅解散 18:00 山形大学着 |

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

今回のフィールドラーニングを通して金山町の魅力を発見すると共に、金山町の抱える課題について身をもって体感することができた。

まず、金山町の魅力については何といても広大な自然だ。活動の中でも自然に関する体験が多く、特に谷口銀山見学や木工クラフトはここでしか体験できないと感じさせられた。また木育×食育フェスでは多くの町民の方々や来町者の方々と交流し、新型コロナウイルス蔓延拡大の影響を差し置いても交流の場が減少していると感じられる世の中において貴重な機会であると感じた。更に2回のフィールドラーニングを通してひしひしと感じたのは、町民の方々の人柄の良さである。私たちへご支援して下さることはさながら、金山町への熱い思いを私たちにどうにか伝えようと真剣に対話して下さった。木育×食育フェスの際にお話を交わした町民の方も、金山町のことを広く知ってもらおうと現状の課題についての考えを私たちに訴えていた。事前学習では金山町について情報収集したつもりではあったが、今回実際にフィールドラーニングを通して実感体感した魅力は、事前学習からは殆ど感じとることができていないものばかりだった。私たちはほんの2回金山町を訪れただけであるがとても愛町心を抱いた。町の観光資源、特産物、町民の温かさ、町の雰囲気、すべて合わさって訪れた人を魅了するところが金山町の魅力なのではないだろうか。

次に、私が体感した金山町の抱える課題については広報に関してである。先述した通り金山町を実際に訪れないと感じる事の出来ない魅力というものがある。しかし町民の方々も仰っていた事なのだが、町外はたや町内にも催事開催に関する情報が行き届いていない。今回参加した木育×食育フェスを例にとると、町民の参加が殆どを占めていた。広報活動として行ったのは1月前ほどに掲載した広告とインスタグラムのみのものであった。今回のフェスを大々的に開催しようという意図がなかったとも捉えることができる。しかし、もう少し広報活動の仕方があるのではないかと考える。金山町も広報活動において様々な活動を行っていると思われるが、より金山町をPRする良案を私たちが考案し実現することができれば更なる地域活性化に繋げることができると考える。

今回金山町関係者の方をはじめ、多くの方々にお世話になった。その感謝の気持ちを最終発表にてより良く実現可能な提案をできるよう班員と協力していこうと思う。



地域教育文化学部 Kさん

1回目のもがみでは、遊学の森でそば打ち、木工クラフト、谷口銀山を体験した。遊学の森には珍しい動植物が沢山生息しており、絶滅危惧種に指定されている種も見ることができることを知った。木工クラフトでは、遊学の森の散策場所で採集した木の実などを使用することができる。子どもたちにとって自然に触れながら発想力を引き立たせることができる良い体験だと感じた。谷口銀山跡地では実際に新大切鋪跡地に入り、坑道内を観察することができた。坑道に入るという経験は貴重だと感じた。

2回目のもがみでは、遊学の森でそば打ち、森の感謝祭2022「森のクイズラリー」、ふれあいの森、木育×食育フェスを体験した。森の感謝祭「森のクイズラリー」では、ガイドとして、遊学の森の散策コースに設置されているクイズを、山形県の小学生と一緒に解いた。子供から大人まで楽しく、美しい自然に触れることができるイベントだと感じた。宿泊先のシェーネスハイムでは夕食を実際に食べた。沢山の山菜が使われていたり、金山町で採集することができるメイプルシロップ使われていたりして、金山町の食に触れることができた。ふれあいの森には広大なブナ林が広がっており、あちこちから湧水が流れ、木漏れ日も美しく、神秘的な森だった。木育×食育フェスでは運営側として参加し、金山町の食や地域の人々に触れることができた。

私は、もがみを通して、金山町の自然の美しさ・豊かさ、地域の人々の温かさに触れることができた。森林セラピーという言葉があるように、森林には癒しの効果があり、ストレス解消にも効果があると言われている。金山町には疲れた心を癒し、活力を与えてくれる力があると感じた。

これから金山町の観光人口を増やすために旅行プランを考えるうえで課題となってくるのは、第一に交通の便が悪いことだ。この課題に対処するために、旅行プラ

ンのターゲットを、一般的に車を所有している家族にするべきだと考える。そうすることで、バスなどを手配することなく交通手段を確保することができるからだ。また、自然が多い特徴を活かして子どもに自然教育をさせたい親向けの旅行プランを考えることも効果があるのではないかと考える。それに加え、近年スマホの使用が増えている子どもたちにスマホ立ちをさせるのにもいい環境が整っていると感じた。デジタルデトックスをしながら、自然に親しむことができる環境が整っている場所は金山町ならではのと思うので、これらを組み合わせ合わせたプランを考えていきたい。

次に、SNSを有効に活用して、魅力の発信をすることも欠かせないと思う。多くの人目に留まるような動画などを作成することで、観光客の増加に繋がられるのではないと思う。

お世話になった方々のためにも魅力あふれる金山町を発信し、観光人口の増加に繋がられるよう尽力したい。



地域教育文化学部 Kさん

4日間のフィールドラーニングでは、そば打ち・自然体験・谷口銀山坑道体験・木育×食育フェスボランティアなどを行いました。人のあたたかさを感じながら、仲間と協力して最高の活動にすることができました。何よりもとても楽しかったです。すべての活動が私にとって実りのあるものとなりました。実際に金山という地で活動してみて、1日目に金山の方々のあたたかさに心を動かされました。実際に足を運んだ者にしかわからない人の好きに触れ、本気で今回の旅の目的を達成したいと思うようになりました。そんな今回の目的は新たな町旅を提案し、観光資源をPRし観光客の増加を促進させることです。実際に金山には面白いスポットや、広大な自然があり、魅力が多いところだと感じました。しかしながら、私たちがその多くを認知していなかったように多くの方が金山の魅力に気付くことができていないと思います。私はPRの仕方に問題があると思いました。今回はSNSを使うこともマストな事象なのでInstagramを主

として自然派・自然派ママ・自然派育児をターゲットにして、投稿活動を通して金山町について少しでも知ってもらえるきっかけを作ります。また、今回の活動では行いませんがCM作成・最上の駅構内に金山杉を使った木彫りアートなど自然に目に入ってくるようなものを作成することもひとつの手段として吟味すべきだと思います。町旅プランとして今回の目的から考えた理想は、金山町の認知度が上がり、観光客が今よりも増加している状況にすることです。そのために、金山町の武器と相性のいい競争相手の少ない土俵を探し、魅力から逆算して活動していかなければなりません。プランとして今の時代の流行に乗ってデジタルデトックス×自然教育ができればなと思っています。年齢層や当てはまる人というのは少なくなってしまうかもしれませんが、PRの面や金山の良さ知ってもらう機会には最適な案だと思っています。2回の活動は終わりましたが、パワーポイント作成などこれから勝負だと思っています。金山の方の力に少しでもなれるように引き続き協力して取り組んでいきたいと思っています。金山の方とお話しする中で、「リピーターとしてまた金山町に来てもらえるようにしたい」と話されていたのを聞いて、活動した私たちが率先してリピーターとして足を運びSNSなどを用いて引き続き発信できれば良いなと考えています。本当に貴重な体験でした。ありがとうございました。



医学部 Yさん

1回目のフィールドラーニングでは、1日目に遊学の森で蕎麦打ち体験と金山に生息する動植物の講和、木工クラフト体験、2日目に谷口銀山の歴史講和と洞窟探検に参加しました。蕎麦打ち体験ではもがみで採れたそば粉を利用して調理するだけでなく、遊学の森の方々と体験を通してコミュニケーションを取ることができました。町の方々は私たちに遊学の森のこと、近くの山で採れた山菜のこと、町の方々の想いや考えなど多くのことを楽しそうに話してくださり、町の方々の温かさを心から実感しました。動植物の講和では、初めて聞くような

虫や植物の名前を写真とともに紹介していただきました。普段生活する中で身近にあってもなかなか気にすることがなかったですが、これをきっかけに周りの動植物に興味を持つようになり生活が豊かになったように感じます。また、そんな素敵な自然を広め、継承していくべきだと思いました。谷口銀山ではなかなか入ることのできない洞窟に入り、金山でしかできないことと言っても過言ではないと思ったので、ぜひ提案の中に組み込めたらいいと感じました。

2回目のフィールドラーニングでは、1日目に遊学の森で蕎麦打ち体験と山形県内の小学生とともに森のクイズラリーに参加しました。2日目には森の散策と「木育×食育フェス」に参加しました。森のクイズラリーでは小学生が周りにあるもの全てに興味を示し、質問する姿を見て、より多くの子どもたちに自然の中で楽しむことの良さを知ってほしいと思いました。また、それは将来の自然の受け継ぎにもつながっていけばいいと思っています。森の散策では今まで生きてきた中で初めて空気のおいしさに気付かされたほどの圧倒される森を散策しました。この自然の素晴らしさを多くの人に広め、体感してほしいと、このとき改めて感じました。「木育×食育フェス」では、そこに集まる方々が体験したり食べたりする中でコミュニケーションをとり、楽しんでいる姿を目にしました。広大の自然と穏やかに流れる時間の中にある人と人との繋がり素晴らしさに触れ、これこそが金山のよさであると思いました。

最後に、これらの経験を通して、金山の魅力は広大な自然と人の温かさだと感じました。これらは実際に金山に訪れてみないと感じられないことなので、今回のフィールドラーニングの提案をきっかけに多くの人に金山について知ってもらい訪れてもらいたいと思っています。今後もフィールドラーニングの仲間とともに案を練り、魅力的なプランを提案し、発信していきます。



医学部 Oさん

私は今回の計四日間のフィールドラーニングでさまざまな体験をし、金山町の魅力に触れることができたと考えている。

一回目のフィールドラーニングでは、遊学の森での蕎麦打ち体験、自然講和、木工クラフトに加え、谷口銀山の講和とボランティア、坑道の探検などを行うことができた。金山町に行くのは初めてだったため、遊学の森や谷口銀山といった観光地は知らなかったが、遊学の森での自然を生かしたイベントと、谷口銀山での普段体験できない坑道探索を楽しむことができた。特に蕎麦打ち体験は難しかったが、地元の方が丁寧に手本を見せて教えてくれたので、初めてだったがなんとか作ることができ、とてもいい経験になったと思う。

二回目のフィールドラーニングでは、遊学の森での二回目の蕎麦打ち体験に加え、ふれあいの森の散策、森のクイズラリー、木育×食育フェスを体験することができた。小学生たちの案内やお店の手伝いなどを通じて、ふれあいの森の雄大さ、地域の人たちの結びつき、そして金山町の自然の豊かさを直に感じる事ができたのが、今回の最も大きな収穫だと感じた。

以上の体験から旅の提案について考えると、やはり売りにするべきは金山町の自然の豊かさであり、近年トレンドとなっている自然教育を取り入れた形で家族旅行プランを作成すればよいのではないかと考えられる。遊学の森、ふれあいの森、谷口銀山といった自然豊かかつ金山町独自の観光地を中心としたプランとすることで、自然教育を行いながら家族で楽しむことができる、私たちの理想とした観光プランを作ることができると考えられる。一方、ここまで豊かな自然と観光地があるにもかかわらず観光客が増加していないのはなぜかと考えた時、理由はおそらくPR不足であると考えられる。駅に金山町のポスターを展示すると言った方法も確かに有効ではあるが、もっと広い範囲から観光客を呼び込むためには、SNSを用いたPRが効果的である。そのため、インスタグラムに定期的に写真をあげるなどして、若者に興味を持ってもらえれば、観光客の増加につながると考える。

医学部 Uさん

2回の活動を通して、自分自身が直接現地に出向くことの大切さを知った。ネットなどで調べたことや人から聞いた話だけでは感じなかった金山の魅力が今回のフィールドラーニングを通して気づくことができた。実際に体感しないと分からない金山の魅力を私たちが提案する旅の計画を通して発信していきたいと思った。

1回目のフィールドラーニングでは遊学の森でそば打ち、金山でみられる植物や生き物についての講座、谷口歴史講座、谷口銀山見学を行った。遊学の森ではそば打

ちだけでなく、ピザづくりなどもできる環境が備わっていることがわかった。そのような点は金山の旅の提案をするうえでとても強みになると思った。また、本来ならば遊学の森にある水辺の観察会をする予定であったが、あいにくの雨により観察会は実施することができなかった。そのため水辺の観察会の代わりに金山でみられる植物や生き物についての講座があった。大自然に恵まれている金山には絶滅危惧種に認定されている植物や生き物が多くあることがわかった。それらを守っていくためにも金山の自然は壊してはいけないものと認識したと同時に金山町の人たちが自然を重要視していることにも納得した。そして谷口銀山に入山してみて、谷口銀山こそ金山でしか体験できないことだと思った。はじめて洞窟の中を自分の足で歩き、動画や写真で想像していたものをリアルに経験することができてよかった。しかし、この谷口銀山を旅の中に組み込むことはそう簡単ではないと感じた点もあった。谷口銀山を散策していくなかで足の踏み場が悪い場所が何か所か見受けられたため、旅の案に組み込むのならば環境整備が必要であると感じた。

2回目のフィールドラーニングでは1回目同様遊学の森でそば打ち、少年団の小学生と森のクイズラリー、森の散策を行った。また、木育×食育フェス「ブナの新緑フェスト」にも参加した。小学生と行った森のクイズラリーを通して、無邪気に純粋に自然のことについて知識を深めていく様子を直で見て、子供には自然教育がとても大切であり必要なものであると感じた。そして森の散策は人生で一番自然の美しさを感じた時間だった。緑の美しさ、鳥たちの鳴き声、川に流れる水の音、すべてが組み合わせることができるあの空間にとっても感動し心が浄化された時間だった。木育フェス×食育フェスは小規模ではあるが金山町の子供から大人までが集まるととても和やかな雰囲気イベントであった。ピザづくりやマイ箸づくりをはじめとした体験型の出し物や多くの出店があり、金山町以外の市町村からもっと来てほしいと切実に思った。

最後に、金山の一番の魅力は恵まれた自然環境であると私は考える。その魅力は実際に訪れて肌で感じることでわかってもらえるものだと思う。その魅力を最大限に活かすことができる旅をグループの人たちと協力して提案していきたい。



工学部 Sさん

今回のフィールドラーニングの目的は、SNSの活用と新たな旅案の提案によって、金山町の観光資源の発信と観光人口の増加につなげる役割を担うことである。まず、これらに取り組むにあたって、私たちは「課題」を、ある理想的な状態と現実の状態にギャップがある場合、そのギャップを埋めるために行わなければならないことであると定義した。そして、今回の目的から、金山町の認知度が上がり、観光客が今よりも増加している状態を理想的な状態と定めた。そこで発見した課題は二つある。

一つ目は金山町の武器と相性のいい、競争相手の少ない層を探すことである。山形県には銀山温泉や山形蔵王をはじめとした強力な観光地が存在する。これらの観光地と同じ層の人々を呼び込もうとした場合、競争は避けることができない。そこで、潜在的に金山町を求めている層にアプローチしていくことが重要だと考えた。その層とは、金山町の持つ武器からの逆算と流行を組み合わせることで想定することができる。まず、金山町の武器としては、特産物の金山杉や遊学の森をはじめとした魅力的な自然である。特に、二回目のフィールドラーニングで訪れたふれあいの森のブナ林は圧巻の一言で、美しい木々が見渡す限り広がっている場所だ。また、世間では、インターネットや電子機器から距離を置くデジタルデトックスが話題に上がっていることや、新型コロナウイルスの影響により、密集を回避した旅行形態が求められている。したがって、デジタルから距離をおきたいと考えている層、感染の心配をすることなく旅行がしたいと感じている家族層をターゲットに定められるのではないかと考えた。

二つ目の課題はSNSを活用した情報発信である。この場合、デジタルデトックスを考えている層に近い距離で情報を届けることが可能であるため、このSNSの活用は大きな効果があるのではないかと予想しており、具体的には、Instagramやツイッターの活用を検討している。その理由として、まず、写真や動画などを共有機能にある。美しい自然や町の景観を、文字での宣伝により

魅力を伝えることは難しいため、写真や動画は必要不可欠である。次に、これら二つのSNSで幅広い世代に対して宣伝が可能である点だ。総務省の調査によると、10代の67.6%、20代の79.8%がツイッターを利用しており、30代の55.6%がインスタグラムを利用していることが分かる。注1 つまり、若者にも、子を持つ親世代の人々にも、宣伝が可能であると考えられる。

これら二つの課題から、旅案の方向性を定めることができた。今後はより具体的なプランとして形にしていきたい。

注1 総務省『令和2年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書』

https://www.soumu.go.jp/main_content/000765258.pdf (2022/06/11閲覧)

工学部 Sさん

計4回のフィールドラーニングを通して、金山町の魅力を見て、聞いて、感じて、実際に訪れなければわからないようなことを知り、また、なぜこの魅力が多くの人に認知されていないのかを考えることができた。

金山町の大きな魅力の一つとして、私は豊かな自然を肌で感じるができることだと考える。金山で体験したこととして、木工クラフトや銀山見学、「森のクイズラリー」、ふれあいの森の散策など、金山の自然を肌で感じて魅力に気づけるようなイベントが多かった。また、そば打ち体験や「木育×食育フェス」では金山の自然から採れた食材を使用しており、大勢で楽しみながら自然に触れることができるイベントもあった。

このような様々なイベントを体験して、これらのイベントを幼い子供を持つ家庭に知ってもらえることができれば強く興味を持ってもらえるのではないかと考えた。木工クラフトや銀山見学は自然教育として、特に子供にとっては自然に触れながら楽しむことのできるイベントだと考える。そば打ちや「木育×食育フェス」では大人も子供といっしょに楽しめるイベントだと思う。親が自然に興味のある方だったり、自然教育に力を入れている方だったりするとさらに興味を示してもらえることができると考えられる。幼い子供を持つ家族層をターゲットにPR活動を行えば、より人が集まり金山の魅力を知ってもらえるのではないかと考えた。しかし、同じような層をターゲットにしている有名な活動やスポットは東北地方でもほかにたくさんあり、その中であえて金山に来る人は少ないのではないかと考えた。そのため私たちはどのような層をPRのターゲットにすればより多くの人を金山に呼べるのか、どのような層が金山の魅力に触れながら金山を楽しむことができるのかを深く考えていかなければならないと感じた。またなぜこのようなイベントがあまり多くの人に認知されていないのかについては、やはりPRの方法や頻度にあるのでは

ないかと考えた。「木育×食育フェス」の際に町民の方からお聞きした話では、その方はInstagramでフェスの存在を知ったがほとんどの町民はイベントが行われていることすらわからないだろうということだった。1ヶ月前にフェスの広報を行っていたみたいだがそれを見て来た人は少ないだろうとおっしゃっていた。私たちができることとしてこのような金山の魅力やイベントを多くの人に発信し知ってもらい、来てもらうことだと考える。PRの方法についてどのようにSNSを利用するのかを考え、金山町の活性化に少しでも貢献できるようにこれからも協力し合いながら活動をしていこうと思う。



最上町から生まれた楽器を全世界に広めよう

活動状況

○実施市町村：最上町

○講師：木と音の会代表 泉谷 貴彦

○訪問日：令和4年5月28日(土)～29日(日)，6月11日(土)～12日(日)

○受講者：人文社会科学部1名，地域教育文化学部2名，医学部3名，工学部2名 以上8名

○スケジュール：

| 1回目 | 2回目 |
|--|---|
| 【1日目】5月28日(土) 8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 10:30 最上町到着 講師紹介・活動紹介等 12:00 お昼休憩 13:00 ワークショップ 16:00 宿到着 | 【1日目】6月11日(土) 8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 10:30 最上町到着 ワークショップ 12:00 お昼休憩 13:00 発表準備など 16:00 宿到着 |
| 【2日目】5月29日(日) 9:00 活動開始 12:00 お昼休憩 13:00 ワークショップ・発表準備など 15:30 最上町出発 新庄駅へ 16:30 新庄駅発 18:00 山形大学着 | 【2日目】6月12日(日) 9:00 活動開始 発表準備など 12:00 お昼休憩 13:00 活動発表 15:30 最上町出発 新庄駅へ 16:30 新庄駅発 18:00 山形大学着 |

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Aさん

今回私たちは最上町を訪れ、講師の泉谷先生から木でできた楽器の演奏、町民との交流について実際に体験させていただきました。泉谷先生から、楽器が生まれるまでの経緯や活動のコンセプトをお聞きし、さらに自分たちで演奏することで、木の楽器の温かみを感じることができました。この楽器での演奏は技術など関係なく、純粹に音楽を楽しむことができました。

私たちの活動のテーマは「最上町から生まれた楽器を全世界に広めよう」でした。その中で私が特に力を入れたいと感じたのは、「発信」と「交流」です。まず1つ目の「発信」についてです。私が必要だと感じたのは、最上の素晴らしい楽器とその取り組みについての情報はあまり町外に発信されていないと感じたからです。私自身、最上の楽器について検索しても情報がほとんど得られませんでした。現代はインターネットの時代であるので、ホームページの作成やSNSの活用などを通して国内外の方に向けた発信を行えたらと思いました。また、楽器の愛称を決めることで様々な人に呼んでもらい、より多くの方に知っていただけるのではないかと考えました。私たちは活動の中で「もがっき」と呼んでいました。

続いて「交流」についてです。私は、最上町に実際に訪れて楽器を演奏したり、地域の演奏団体の方との演奏をしたりしたことを通して、この楽器は人々との交流を生み出すことができるものであると感じました。泉谷先生がおっしゃっていたこの楽器のコンセプトは、「子供が作り、演奏することができる楽器」というものでした。そこで私たちが提案したのはストリートライブの開催です。これは、通常のコンサートとは異なり、広いスペースに楽器を持っていき、演奏する。そして演奏に興味をひかれ集まってくれた方と次は一緒に演奏してみる、といった形式で行います。演奏する曲も難しいものではなく、聞きなじみのある曲で行い、簡単なパートからやりがいのあるパートまで、参加する方が選べる形にすることで、音楽経験などにかかわらず、誰も参加することができるようにします。このような交流の場を作っていくことで、楽器を広めていくことだけでなく、最上町興味を持ってくださる方を増やせたらいいなと考えました。

私は、今回フィールドワークで最上町を実際に訪れることで、楽器が生まれた土地について知って、町の方々と交流するなど、大学内にいるだけでは行うことのできない学習に取り組むことができました。最上から生まれた楽器たちを広めることで、最上町内外から人が集まり、つながりが生まれていったらとても素敵だと思います。



地域教育文化学部 Iさん

二回のフィールドラーニングを通して、私たちは“もがっき”を多くの人に知ってもらうにはどうすればいいか考えました。“もがっき”とは、最上町の木から生まれたハープやフィドルや太鼓などの楽器の総称として私たちがつけたものです。四日間のプログラムでこの“もがっき”に親しむ中で、“もがっき”の音色の温かさや“もがっき”を通じた地域の人々との交流のすばらしさを実感しました。

一日目は、「きらきら星」を使って合奏をしてみました。簡単な楽譜でみんなで合わせることの喜びを感じ、簡単な音楽でも人を惹きつけることができると知りました。二日目は、楽器になる前の素材である最上町のアカマツを見て、特有の木のにおいや触り心地などを体感しました。最上町の観光地である前森高原にも行き、自然の美しさに触れたり、観光地での演奏会をするというアイデアの構想を練ったりしました。

三日目は、自分たちが好きな曲を楽譜に縛られないスタイルで自由に演奏しました。メロディーの音がわからないときは歌うことで代用し、楽器があまり得意ではない人も、太鼓で簡単なリズムをたたきました。このような自由なスタイルでも、立派に音楽が成立し、演奏して楽しめることがわかりました。

四日目は、実際に地域の方々と「きらきら星」を使って合奏をしてみました。その日初めて顔を合わせた方々でしたが、一緒に音楽を奏でることができました。また、ビンなどの身近なものも楽器として使ってみました。そうすることで、合奏することの警戒心やハードルが一気に下がって、気軽に参加できることがわかりました。

このように私たちが体験したこと、感じたことをもとに、“もがっき”や“もがっき”のつくる地域交流の良さを広めていくためには、実際に楽器に触れて合奏を体験してもらうことが必要だと考えました。

そこで私たちは、観光地(前森高原)でのストリートライ

ブを提案することにしました。

楽器をたくさん置き、音楽が好きなら誰でも飛び入り参加できるようなストリートライブで、私たちが三日目に作ったような、自由なスタイルで合奏をすることを体験してもらうことが目的です。曲は、誰もが知っているスタジオジブリやディズニーの曲を演奏し、参加してくれる方が増えてきたら参加者の好きな曲を演奏していきます。

楽器を触ったことがない、楽器があまり得意でない人は太鼓や歌で参加してもらい、国籍や年齢の垣根を越えた交流の場にしていきます。

このような交流を通して、「もがっき」と最上町の良さがたくさんの人々に知ってもらえたらとても素敵だと思います。

私自身も体験を通して、最上町の良さを知ると同時に音楽の楽しみ方について視野がとても広がりました。この貴重な経験を、今後の活動と自分の人生に活かしていきたいです。

ありがとうございました。



地域教育文化学部 Sさん

今回の活動は、本当に貴重な体験となりました。今まで、たくさんのおもいでにさまざまな形で触れてきましたが、こんなにも楽しく音楽ができたのは初めてです。もちろん、今までも音楽は楽しかったのですが、この楽しさは今まで感じたことのない楽しさでした。

まずはじめに、現地に着き、楽器に触れてみました。「きらきら星」を全員で合わせましたが、誰もが知っている曲だったのですぐに合わせることができました。その合わせ方（練習の仕方）に驚きました。それは、演奏しながら会話をしたり、ゲームをしたりすることです。それによって、緊張もほぐれ、楽しみながら演奏することができました。今までの音楽経験は、しっかり練習してから本番に挑むという形が多く、辛いと思うことも多くありました。しかし、「音楽を楽しむ」というコンセプトのもと、『誰でも演奏できる』という考え

方がとても素敵で新鮮だなと思いました。「上手に演奏する」ことではなく、「楽しく演奏する」ことが最大の目的であり、同じ楽器でも楽譜の難易度を人によって変えることで、ストレスなく参加できるように工夫したり、誰でも演奏できたりするのがこの楽器の良さの1つだと思います。

そんな素敵な楽器を広めるためにたくさんの案が出ました。1つ目はこの楽器に名前（愛称）をつけ、親しんでもらうことです。今回は「もがっき」とつけて呼んでいました。愛称をつけることで親しみやすさが倍増し、呼びやすくなりました。2つ目は、ホームページを作ることです。この楽器を知ろうと検索してみた時、有力な情報が掴めませんでした。これでは気になったとしても知ることができません。だから、ホームページを作るという案が出ました。そのホームページの内容は、楽器の紹介だけでなく、演奏動画や簡単な楽器の作り方、活動紹介、フリー楽譜の配布、ゆるキャラを作って、そのゆるキャラの紹介などです。また、SNSなども普及しているので、それらを活用できればいいと思います。そして3つ目はストリートライブの開催です。ストリートライブといっても、ステージを設けるしっかりとした演奏会というよりも、飛び入り参加ができ、初めての人も楽しめるようなストリートライブにすることが第一前提です。私たちがもがっきに初めて触れて合わせた時の楽しさをたくさんの人に知ってもらいたいです。

この体験を通して、たくさんの方に気づき、素敵な考えがたくさん生まれました。音楽に性別、年齢、国籍など何も関係ないということ。音楽は自由で多彩であるということ。たくさんの方と繋がることができるということ。指導だけでは生まれない世界があるということ。この活動を通して生まれた考えを実現できれば、さらに良いものになると思います。この4日間お世話になった泉谷先生をはじめとした、たくさんの方に感謝したいです。

医学部 Sさん

今回の最上町でのフィールドラウンジでは、地元のおもいでを使って作られた楽器を世界に広めるために何をすればいいのかを、楽器を触って演奏してみたり、観光スポットに足を運んでみたりしながら、班のみんなと話し合いました。実際に体験したことで、「百聞は一見に如かず」とあるように、ただ話を聞くよりも断然魅力や課題が伝わってきました。最上町の楽器は「子どもでも作れる」をコンセプトに考えられており、太鼓やハープなど、シンプルなつくりのものが多かったのですが、その音色はあたたかさや親しみやすさがあり、地域で手作りだからこそその魅力を感じました。これらの素晴らしい楽器がなぜ広まっていないのかを私たちに考え、課題として、SNSでの発信がほとんどないことが一番に挙げられました。

これらの楽器をより親しみやすくするために、私たちは楽器を「もがっき」と名付け、様々な解決案を考えました。まずは、ストリートライブを開催するという事です。講師の泉谷先生の講義から、音楽を「楽しむ」ことが大切であるということ学びました。子どもや音楽が得意でない人でも参加できるように、音楽そのもののハードルを下げ、誰でも楽しめるようにするという事です。私たちが考えたストリートライブでは、飛び入り参加のようなかたちで、簡単なパートを演奏してもらったり、太鼓やダンスや歌で自由に楽しんでもらったりして、その場で一緒に音楽を楽しむことを目指します。このストリートライブを最上町の前森高原で開催し、地元の人たちにももがっきについて興味を持ってほしいと思っています。また、ストリートライブの様子をYouTubeなどにあげ、楽しく交流している様子を全世界にアピールできたら良いと考えました。

もがっきの知名度を上げるために、楽器紹介のホームページをつくることや、ゆるキャラをつくることが挙げられました。最初に私たちが最上町の楽器について調べたとき、ホームページや紹介動画といったものがなく、ほとんど情報を得ることができませんでした。そのため、もがっきを紹介するホームページや動画があった方がより知名度を上げられると感じました。現在、樹齢600年のアカマツから楽器を制作している最中であり、それらが完成して使うことができれば大きな話題になると思うので、アカマツの楽器の制作の様子や進捗状況も紹介するのが良いと思います。ゆるキャラをつくることも、もがっきの印象をやわらかくし、もがっきを親しみやすくできると思います。

今回の学習を通して、課題の切り口となるものは多種多様があり、実際に体験することでわかることがたくさんあることを学びました。特に、音楽は堅苦しいものではなくその人のレベルにも関係なく全員で楽しめるものであること、音楽で世代・国籍関係なく交流できることを学びました。この実りある経験を、今後に生かしていきたいです。



医学部 Kさん

私は今回の最上町へのフィールドラーニングで、音楽を用いた人との交流の仕方を学びました。泉谷先生から音楽の楽しみ方を学んだ後に、班員のみんなや地域の方々の奏でる音楽を聴いたり、一緒にセッションをしたりする中で、心の距離が近くなっていく様を感じることができました。同じ音楽を奏で、同じ時間を共有することによって人々は打ち解けあい、素敵な時を過ごすことができると思います。

そこで私たちは、最上町の木で作られた楽器である「もがっき」によって生まれた音楽で人と交流することで、地域の活性化につなげることができると考えました。具体的には、町の外から人々を呼び込み、多くの人に最上で生まれたこの音楽を知ってもらい、体験してもらうことによって、少しでも最上を知ってもらうことができるのではないかと考えました。それを実現するために、老若男女誰でも参加でき、楽しめる音楽を参加者みんなで作って、より多くの人に音楽によって楽しみながら交流してもらうことを課題としました。その案として、ジブリや童謡、古くからあるアニメの歌など誰でも知っているような音楽を楽譜にとらわれず、自由に演奏することです。楽譜が読むことができない人や、リズムをとることが苦手な人でも気軽に参加できるように、みんなが思うままに演奏でき、心温まるような場を提供することが必要であると考えます。実際、私自身はあまり音楽が得意な方ではありませんが、この最上で音楽を演奏した時は、それを後ろめたがらせるものではなく、他の人への気おくれも感じないような雰囲気のある心休まる場でした。

また、人を集めるには広報的な人を呼び込むための活動も必要であると感じました。まだまだ知名度のない最上の楽器を「最上町」や「樹齢600年の巨大アカマツ」などと繋げより多くのものを巻き込み、さらに、SNSの活用、HPの作成、ゆるキャラなどでの話題性作りをすることで若い世代からその親世代までの多くの人に興味関心を持ってもらえるようにすることが重要であると思いました。

この活動を通して音楽を用いて人と交流するという普段はできない、とても貴重な体験をさせていただくことができました。この最上で生まれた「もがっき」を広めることで最上町の魅力を知ってもらい、地域の活性化に繋がればと思います。

医学部 Sさん

私は今回のフィールドラーニングで最上町を訪れ、最上町の楽器を世界に広め地域の活性化を図ろうと班で思考錯誤を行いました。このフィールドラーニングの中で気づいたことは、人々が惹きつけられるのは最上町の楽器やその観光地だけではなく、特に大事なことは最上町で人々がどのように楽しい時間を共有するかであるということです。最上町の特徴や魅力として最上町の木材で作られた楽器である「もがっき」があり、森の匂いが漂う誰でもどのように演奏することができる楽器です。そして、瀬見温泉や前森高原など人々が楽しむ間も観光施設も数多くある魅力的な町です。

私たちはこの最上町で人々が音楽を通して分け隔てなく自由に楽しく演奏するという方法を突き詰めることが大切なことであるとわかり、そのためにはどうやったら音楽の才能に関わらず全員が楽しむことができるかを考えました。例えば、誰もが知っている曲を使うことや音楽の腕によって楽譜や演奏するパートを変えることです。つまり、音楽への心のハードルを下げた失敗や間違いをしても許されるような雰囲気を作りそして演奏できた部分に重きを置くということです。また泉谷先生による音楽についての講義によって、「練習なしでできる音楽」「短い時間でできる音楽」「長い時間をかけてできる音楽」と三種類に分けて地域住民や老若男女が和気藹々と自分の演奏ができることに焦点を当てるといった考え方を教わり、私たち自らが楽器を演奏することでそれを実感し最上町の活性化につなげられると気づきました。

次に、世界へもがっきをどのように発信するかについて班で考えました。私たちは、最上町のホームページやSNS、そして観光施設のパンフレットでの情報発信を行うことでより多くの人が最上町も魅力とともに認知してくれると考えました。また、山形大学の最上町周辺の学生にもがっきについて尋ねたところ多くの学生がもがっきを知っていなかったので地域への情報共有を行うことで地域コミュニティ全体にもがっきが広まり、地域一体となってもがっきの発信に努力できると考えました。情報発信の内容としては全ての人々が楽しくみんなが知っている曲を演奏している風景を伝えることでその雰囲気や楽しさが国籍や言語を超えて見ている人へと伝播していくのだと考えました。

これから私たちは、人々が音楽を通してどのように交流していくことができるかということを考えるために楽しむ側の視点に立った音楽づくりや新たな楽器の制作、イベント作りを行い多くの人々に楽しさとそれによる人との繋がりを感じてほしいと思います。



工学部 Oさん

今回のフィールドワークでは貴重な体験をすることができました。具体的には、実際に現地に行って課題を見つけ解決策を提案するということです。「どのようにもがっきを広めていくか」というのが今回の主な課題になりましたが、メンバーや講師の先生、地元の教育委員会の方々と交流を深めていくうちに様々なアイデアが浮かびました。一つ目は楽器に名前やキャラクターを作るということです。はじめは「最上の楽器」と呼んでいましたが、「もがっき」と名前を付けることで愛着もわくし、耳にも残りました。キャラクターもただ作ると提案するだけでなく絵にかいて、見てもらいました。二つ目は観光地などでのライブを行うことです。これは演奏する側とお客さんと分けたライブではなくて一体になって演奏するライブです。目的は国境や年齢、音楽の経験値というのを取っ払った交流です。どういった曲ならとっつきやすく楽しめるかを話し合いました。二回目のフィールドワークではジブリやディズニー、最近はやりの曲をみんなで演奏してみました。知らない曲や難しい曲は太鼓を使ってリズムをとってみたり、知っている曲や簡単な曲は歌ったりメロディーをとってみたり自由自在に音楽を作りました。練習なしのセッションは初めてでしたがとても楽しく、この雰囲気を最上町でも作れたらいいなと思いました。また、具体的にどの場所で演奏できたらいいかというのも話し合いました。一回目のフィールドワークで、前森高原に連れて行って頂きました。実際に見に行くことで「親子が多いな」とか年齢層がわかったり、「あの木の下で演奏するのがいいんじゃない？」と演奏会の構想を広げられたり、アイデアがより現実的になった気がしました。3つ目はインターネットを利用することです。最近ではコロナのこともありインターネットを使う機会が増えました。若い世代だとInstagramやTwitter、Youtubeを使う人が多いのでこれらをうまく利用できたら多くの人の目にとまると思います。また、フィールドワークの前に最上の楽器がどんなものか気になったのでネットで検索しましたが出てこなかったので、ちょっと知りたいときに見られるようにホームページを作っておくのもいいと思いました。

最後に、4日間楽しく充実した時間を過ごさせて頂きありがとうございました。音楽を通して最上町を中心に人と人のつながりができていったらいいなと思います。



工学部 Mさん

今回、初めて最上町の楽器に触れて今まで体験したことのないことばかりでとても貴重な体験をさせていただきました。子供たちでも作れるような楽器は何か不思議なものを感じました。この体験をもっとたくさんの人たちに体験してもらい、最上町の楽器を世界に広めたいと感じました。

そこで私たちが考えたのは、まずストリートライブを開くことです。最上町の楽器の音色を聞いていただき、興味を持った方々に体験していただければと思いました。今回の講義で練習しない音楽というものを学びました。音楽とは構えてやるものでなく楽しみながらやることだということをもっと最上町の楽器を通して学んだのでぜひたくさんの人に知ってほしいと思いました。ストリートライブのために曲を練習していて、結構練習しないとできない状態でした。そこで、これでは違うのではないかと悩みました。もっと音楽に触れるハードルを下げようと、別の方法を考えました。メロディーは音源で流し好きなように楽しく自分達で楽器を演奏したらいいんじゃないか、逆にベースだけ音源で流しメロディーなどを自分たちで演奏をするのもありなんじゃないかという意見が出ました。自分達でたくさんの方に触れいろいろなアイデアが出てとてもいい経験ができました。

次に、SNS等での情報の発信です。最初自分たちで最上の楽器について調べたときにホームページなどわかりやすく調べられるものがなかったので用意したほうがいいんじゃないかという意見が出ました。そして、現代では動画などでたくさん新しいことについて触れやすい環境にあるので少しでもたくさんの方の目につくようにSNSで発信することが必要だと感じました。また、観光地などでパンフレットを配ったりすることも効果

的ではないかという意見も出ました。このとても貴重な体験をたくさんの方々にしていただくにはまず存在を知っていただかないと始まらないのでたくさん情報を発信していくことが重要だと感じました。

今回学んだことを活かして、次は私たちがたくさんの方々に広めていければと思いました。個人のレベル差や国籍の違いなどを飛び越え誰もが楽しく気負わずに過ごせる音楽に触れることへのハードルが下がっている環境を作りたいです。そのためには、上記の意見を具体化し、現実に起こし実際に活動できるように頑張りたいです。今回の授業は紙の上だけでは得られることのできない実際に体験することで得られるものでした。この体験を無駄にしないためにも向上心を持ち行動していきたいです。



里地里山の再生 I

活動状況

○実施市町村：舟形町

○講師：堀内ファーム 大山 邦博

○訪問日：令和4年5月21日(土)～22日(日)，5月28日(土)～29日(日)

○受講者：人文社会科学部1名，医学部4名，工学部2名，農学部2名 以上9名

○スケジュール：

| 1回目 | 2回目 |
|---|---|
| 【1日目】5月21日(土) 8:00 山形大学発 9:15 舟形町役場着 9:30～ 開講式(農村環境改善センター) 活動説明 10:00～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼食 13:30～ 野菜の定植体験活動 18:00～ 夕食 | 【1日目】5月28日(土) 8:00 山形大学発 9:15 舟形町役場着 9:30～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼食 13:00～ 野菜の播種体験活動 18:00～ 夕食 |
| 【2日目】5月22日(日) 8:00 体験実習館 出発 8:30 朝食 9:00～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼食 13:30～ 野菜の定植体験活動 16:20 農村環境改善センター発 16:45 舟形町役場発 18:00 山形駅着 | 【2日目】5月29日(日) 8:00 体験実習館 出発 8:30 朝食 9:00～ 野菜の定植体験活動 12:00～ 昼食 13:30～ 野菜の定植体験活動 16:20 農村環境改善センター発 16:45 舟形町役場発 18:00 山形駅着 |

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Mさん

私たちが訪れた舟形町は、昭和29年に堀内村と舟形村が合併してできた町で、周りが緑に囲まれたのどかな場所だ。定植活動を通して、身をもって農業の大変さを学んだ。これは定植が大変だったという安直な意味ではない。「作業の進捗や作物の出来が天候に左右されること」や「現場はやりたいことと収益問題の板挟みになっており、ジレンマを抱えていること」が大変という意味だ。「機械やハウスを導入したいが、収益が飛躍的には上がらず結局赤字になってしまう」というのがジレンマの例として挙げられる。確実に収益を上げるためには何が必要で、低コストでは何が出来るのかを考えてみたいと思った。

次に、現在直面している課題についてだ。少子高齢化と人口減少による後継者不足で、舟形町の農業が絶たれてしまうことが懸念されている。そのため、堀内ファームでは「持続可能」をキーワードに様々なことに取り組んでいる。まずは、県内の農業学校と連携だ。農業離れ対策や伝統的な栽培方法の引継ぎは行っているが、現状あまり成果は出ていない。そこで、山形県内に限らず、隣県である宮城などの農業学校との連携に目を向けるのはどうかと考えた。今後は、「他の農家・農産で実際に隣県と連携した事例とその効果」について調べたい。また、若者の目を舟形町の農業に向けさせたいという気持ちを受け、実際に若者と繋ぐにはどのような方法があるかを考えた結果、SNSを用いた宣伝や情報発信を思いついた。そこで、「SNSを使った宣伝はしないのか？」と尋ねたところ、「電子機器に馴染みのある若い世代が少ないため、誰が動画の撮影・編集を行い、アカウントを運用するのかといった課題がある。また、ただでさえ人数が足りていないから、そこに割く人員がいない。」とおっしゃっていた。この課題への対策として、我々学生がアカウントを運営することも手段の1つとして考えたが、持続可能という観点から見ると最善の手ではないと感じた。何か良い方法がないか模索したいと思う。

最後に今後の展望だ。舟形町の農業・野菜を広めるために、まずは大学内での認知度上昇を目標に掲げる。そこで、昨年先輩方が行い好評だった学食での提供を今年も行い、恒例化を図りたい。そこで上手いけば、再度やる機会が生まれ、規模を拡大することが出来るかもしれない。県内で大きな影響力を持つ山形大学だからこそ可能なことだと考えている。

4日間貴重な体験をすることが出来て良かった。今回見つけた課題を改善するために、学んだことや感じたことを活かしながら行動していきたい。



医学部 Oさん

舟形町は現在高齢化が進み、農業に従事する世代も高齢化している。そのため、耕作放棄地が増加し、昔の風景とは変わってしまった地域も存在する。今回のフィールドラニングを通して、耕作放棄地の増加を防ぐため、農業法人を立ち上げ、農業を続けられなくなった人から土地を借り、代わりに農業をする政策を行っているが、後継者がいないため将来この法人が続けられるかはわからない状況になっているということも学んだ。

また農業は非常に大変な産業だということも学んだ。農業は天候に左右されるため、計画通りに定植や他の作業ができなかったり、人手が足りないため広い土地を活かして多くの作物を作ろうとしても管理ができなかったりといった問題が発生している。実際私たちがフィールドラニングに行った際も雨の影響で活動できない時もあった。これらの問題を解消するためにITの導入や、農業大学との連携を行っているが、完全な問題解決にはなっていない。またITの導入や人手不足解消にはコストがかかるため、すぐには解決できない問題である。

舟形町の抱える問題を解決するためには、若者に舟形町に来てもらい農業に従事してもらう必要があると考えられる。若者に舟形町に来てもらうためにはまず舟形町の名前を有名にするべきだと考える。現代はSNSの発信力が大きいので若者に情報を伝えるためには、いかにSNSを上手に活用できるかがポイントになってくると考えられる。また、他の地域との差別化を図る必要もある。現在日本には舟形町と同じように高齢化が進み、若者を呼び込もうとしている地域が多く存在する。そのため、インパクトのある事業を行っていない場合、若者を呼び込むのは難しくなると考えられる。これらの考察から、私は舟形町で育てられた作物を使ったマルシェを山形市内や、他の県などで行うべきだと考える。舟形町で作られた作物を使ったマルシェは過去に山形大学の文化祭で行われたため、そのノウハウを活かして、大学生だけでなく一般の人にも気軽に参加できるマルシェを行い、

SNSを通して発信すれば参加してくれた人よりさらに多くの人に舟形町について知ってもらうことができると考えられる。そこでは、若者が興味を持ちそうな料理を提供したり、舟形町の人と一緒に地元の料理を作ったりするなどSNSで広まりやすいような活動を行い、多くの人に興味をもってもらうイベントにするべきだと考える。

舟形町の方々は皆さん温かく、様々な経験をさせていただくことができたため、美しい舟形町がこれから先も残るようさらに活動を続けていきたいと思った。

医学部 Aさん

私はこのプログラムに参加して、自然の豊かさ等、舟形町の魅力を感じることができたと同時に、農業の難しさや町が直面している課題について学んだ。

まずは、少子高齢化、人口減少に伴う農業の担い手不足や耕作放棄地の増加である。実際、現地での活動の際に、人口が減少した集落や、耕作放棄地となってしまった場所を見せていただいた。現在は耕作放棄地の増加を食い止め舟形の土地を守るため、農業法人を設立し農業ができなくなった人に代わって栽培を行っていることを教わった。しかしながら、法人の後継者不足により、これからも存続できるかは不透明な状況であることも学んだ。

また、農業の難しさについても学んだ。2回目の現地活動で、1日目は前日までの雨の影響で防草シートを敷く活動ができなかった。また、2日目も風が強く、シートを敷くのに工夫が必要だった。講師の方が農業はタイミングが大事だとおっしゃっていて、人為の及ばない天候に左右されるのは本当に大変であると感じた。さらに、農作業従事者不足を補うため、積極的にIT化を進めたい一方で、収益の確保の観点から導入が難しいという状況を教わった。他方で、私たちが普段食べている農作物は、生産者の方々のたくさんの苦勞があって作られているということを学び、改めてありがたみを感じた。

舟形町の農業課題を改善するためには、若い農業の担い手を増やすことが必要であると考えられる。具体的なターゲットについては、新しく農業を始めたい都市部からの移住者（農業に魅力を感じて早期退職した若年層、中年層、自然豊かな環境で子育てをしたい家族等）が挙げられる。まずは、舟形町の魅力を広く知ってもらうことが必要である。具体的施策として、舟形町の農作物（米やキュウリ、特産の西又かぶ等）を、マルシェを各地で開催することでPRすることが挙げられる。さらに、舟形町が新規農業従事者の移住を受け入れている旨を、全国に広く発信することが必要と思われる。マルシェでの農作物のアピールに加えて、自然豊かで、地域住民の人情が温かく、住環境としてよい場所であることを発信することも有効と思われる。ただし、移住促進に先立っては、地域住民のコンセンサスが必要であると考えられる。また、

定住ではなくとも、冬季以外の農業期間にのみ移り住む形も一案であると思われる。これらの施策により、農業従事者の確保、耕作放棄地や空き家の活用と保全につなげることができると考える。



医学部 Iさん

私は舟形町での農業体験を通して、地方で農業を営む難しさを学んだ。計4日間堀内ファームさんのもとできゅうりとなすの定植を体験させていただき、舟形町で農業をする上での問題点を見つけた。それは人手不足のために農作業を効率よく進めることができない上に、後継者がいないため舟形町の農業がなくなってしまうのではないかと不安を抱えているという点だ。堀内ファームの大山さんの話によると、舟形町の人口は50年前は700~800人であったが、今現在の人口は300人以下で町の高齢者が50%を超える少子高齢化の問題を抱えている。農業体験をさせていただいた時も普段は2人で作業しており天候が優れていても風が強く吹いているだけで作業ができなくなることもあったとおっしゃっていた。

私はこの課題を解決するために、私たちが行ったフィールドワークのような農業体験を山形県内・県外の小中高大の学生に体験してもらい、若者に農業の大変さと大切さを理解してもらうという活動を増やすことが舟形町の農業を守っていくために必要だと考えた。都心に住んでいる人は農業に触れることなく野菜やお米は当たり前前に共有されるものだと考えている人も多いと思う。学生のうちに農業体験として舟形町に出向き農業を体験することで、農家の方は人手が増えることで作業効率が上がり、学生は非日常を体験することで農業に興味を持ち、将来舟形町で農業をしたいと考える学生も出てくるのではないかと考えた。

また、一部の作業を機械化することで農業の効率を上げ、農家さんの体への負担も軽減することができる。堀内ファームさんも土に埋め込んだ配管に水を流しきゅうりに水をやる装置を今年から導入し、作業効率を上げる工夫をされていた。きゅうりを育てる上で大変な作業

は消毒の作業だとおっしゃっていたので、私はドローンを用い空中からミストで散布するとよいと考えた。ITの機械は初期投資や維持費が莫大にかかってしまうが、ドローンなら維持費がかからず操作も比較的覚えやすいので、すぐに取り入れられる機械化だと思う。

舟形町のフィールドワークを通して少子高齢化の実態や農家数が減少しているという現状を身をもって体験することができた。舟形町は自然・田園風景がとても綺麗だ。この舟形町の景色がなくなってしまうことは絶対にあってはならないと思う。私のレポートを読んでもくれた人が少しでも舟形町について興味を持ち、地方の農業についての理解を深めてくれたら本望だ。今後も舟形町との交流を続けていきたい。

医学部 Hさん

私が4日間のフィールドワークで訪れた舟形町は、山形県の最上地域に位置し、1954年（昭和29年）に舟形村と堀内村が合併したことで誕生した。

今回のフィールドワークで農作業の大変さはもちろんのことだが、舟形町では人手不足、特に若者の力が不足していることがわかった。きゅうり栽培においては、収穫量に見合った人手を確保できないために、今年から品種を収穫量の多い蒼夏（そうか）からなつめくへ変更し栽培を行なっている。また、出荷の際には、梱包などの諸作業を農協に委託しているため、余分な経費がかかってしまっているそうだ。

しかし、このような状況下でありながらも、舟形町の方々は多くのことに挑戦していた。私たちが主にお世話になった、堀内ファームでは『持続可能な「農村集落」を目指して』をテーマに活動をしている。主な活動は、1、農業生産サービス 2、都市交流サービス 3、農作業、農地整備サービスである。しかし、これらの活動の成果があまり出ていないのが現状だそうだ。特に、2、都市交流サービスにおいては、町外、県外の学生を受け入れているため、世界中で猛威をふるっている新型コロナウイルスによりほとんどのプログラムが実行されていない。新型コロナウイルスの影響を無視したとしてもこれらの活動が円滑に進まないのはなぜだろうか。私は、情報の発信力が不足しているからであると考えた。

したがって、私が考える解決策は、現代の若者の多くが利用しているTwitterやInstagramをはじめとしたSNSを活用していくことだ。しかし、町の方々のみでこのようなSNSを運営していくことは困難である。そのため、私たち学生がSNSの管理をさせていただけないかと考える。しかし、ここで1つ問題が発生する。それは、誰がSNS運営の責任を持つのかということだ。町の方なのか、私たち学生なのか、それとも山形大学なのか。情報化が進む中ネット上のトラブルに巻き込まれてしまうことは避けられない。そのような際に、きちんと対処できるような構図を構築する必要があるため、SNSの活用をす

ぐに実行に移すことは困難かもしれない。

最後になるが、舟形町の未来のために私が確実に行いたいことがある。それは、舟形町の認知度を高めることだ。私は、4日間を通して、舟形町の方々の優しさ、故郷を思う強い気持ち、さらには多くの自然を感じることができた。このような素晴らしい、舟形町の魅力を伝えることは私の義務だと思う。そこで、今年のフィールドワークの参加者が行ったことと同様に、舟形町で生産された食品を使用した料理を山形大学の学食で提供して、毎年の恒例事業にしていけたらと考える。また、その他にも、舟形町で生産されるもののブランド化を計画したい。このフィールドワークをただの4日間で終わらせないためにこれから活動していきたい。



工学部 Iさん

今回の堀内ファームでの4日間の様々な活動を通して、舟形町の農業の課題を知ることができた。舟形町の農業の課題はいくつかあるが、それらの課題の多くは人手不足が要因である。堀内ファームは数年前までは4人で活動していたが現在は2人で活動をしている。昨年は、1200個のきゅうりの苗の定植をフィールドラニングの時に山形大学の学生としたそうだが、収穫時期に人手が足りず例年行っていたきゅうりの選別作業まで手が回らなくなってしまい、きゅうりを卸している農協さんに選別作業を委託したそうだ。もちろん委託したので作業料金も発生してしまい結果的に収益が下がってしまった。その結果、今年はきゅうりの苗を750個に減らすことにしたそうだ。このように人手不足によって生じる課題が顕著に表れている。良い経営戦略を生みだしたとしても農作業が忙しくて実行できないというのが今の堀内ファームの現状だ。そのため舟形町の農業の課題解決のために人手を増やすことが最重要であると考えた。また、後継者がいないと仰っていたので後継者を募集する必要もある。

しかし、すぐに後継者が見つかるとは考えにくい。そのため長期スパンで解決する策を講じる必要がある。ま

ず後継者は、小中学生を対象にした企画を行い農業に興味をもってもらい、後継者になってもらうのはどうだろうか。舟形町にはもともと畑であったが現在は使われていない場所があるそうだ。その場所を使わせていただき、定植から収穫までの一連の流れを体験する企画をする。そうすることで農作業の大変さを理解したうえで農業が面白いと感じてくれた子が後継者となってくれるのではないかと。次に、現在の人員不足を解決するために農業高校の生徒、もしくは大学生に短期のアルバイトを募集するのはどうだろうか。農業高校の生徒は実際に農家さんと作業することでよい経験が得られるだろうし卒業後に後継者となる可能性もある。大学生は短期のバイトをしたい人が一定数いるはずである。しかし、送迎や金銭面の問題が発生するのでもっと具体的に考える必要がある。

今回の活動で農業の楽しさと辛さを知ることが出来た。現在、農作業をしたことのない若者が多い。今回のような活動を行うことで農業の人手不足は解消されるのではないかと考える。舟形町の農業が長く続いていくように、舟形町ならではの地形や気候を活かした農業や積雪により農業が出来ない冬などに出来ることはないかをこれから考えていきたい。



工学部 Kさん

四日間にわたるフィールドワークが終了し、舟形町の農業の現状について確認した。現在の舟形町の農業が抱える問題への改善策を考えていく。

この四日間で主に4つの活動を行った。胡瓜と茄子の定植活動、防草シートの設置、舟形町の現状確認、大蒜の収穫である。定植活動については土を耕すところから始めた。土の耕作、肥料やり、苗植えと段階に分けて行った。これらの活動は機械化ができておらず非常に時間も手間もかかる作業だった。今回活動させていただいた方々は舟形町の農業ができなくなった人から土地を借りて栽培を行っていた。現在、活動人数は二人であり、今回行った定植から収穫までを行っているとのことだ。

人員不足であるため、周囲の高齢者の方によるヘルプ、選別作業の外部委託などかろうじて活動できている状態だった。舟形町の現状を確認した際に現状の耕作放棄地はおおよそ3%ほどで今すぐ対策を立てる必要はないとおっしゃっていた。しかし、現在活動できている農家は多くのが高齢者であり、10年、20年後には跡継ぎのいない場所が耕作放棄地になってしまう可能性が高く、楽観視できる状況ではないそうだ。防草シートの設置は定植活動と同じように機械化はできていなかった。定植活動に比べて天候に左右されやすく風の強い日には活動ができないため作業が著しく停滞してしまう恐れがあるそうだ。

今回の活動で舟形町の農業が抱える問題は人材不足と知名度不足である。そのため、若年層を増やすことが必要だ。舟形町の周囲には山形県立農林大学校が存在する。学生に舟形町の存在を知ってもらう。そして、有期契約労働者として起用する。労働力として期待できると考えられる。舟形町の存在を知ってもらう案は複数存在する。1つは近年急速に発達しているSNSを利用することである。Twitterやインスタグラム、Facebookなどで広報することで、舟形町の特産品や現在抱えている問題について広く認知してもらうことができる。これを下記の方法と同時に行う。その方法はオンラインストアによる直売である。産地直送という形で発信し、西又カブという他地域では取り扱っていない独自性のある作物があるため広報はこれを起点に行っていく。これらの案により、人員不足、知名度不足は改善されると考えられる。

農学部 Nさん

今回の舟形町のフィールドラーニングでは、主にキュウリやナスの定植など農作業を体験した。そこで、農業の大変さを改めて感じた。1つ目は、農業はとても天候に左右されるということだ。雨が降ると、雨が降る前にまいた農薬が雨に流されてしまったり、屋外で作業をすることができなくなってしまう。1週間の遅れが収穫の頃には1か月の遅れになることもあるそうだ。ほかにも、風が強いと防草シートを敷くことが難しくなる。ビニールハウスでは、窓を閉めた状態の場合、夏には室温が70度近くまで達することがあり、窓を開け閉めする必要がある。このように、農業は天候と深くかかわっていることが分かる。2つ目は、多くの労力が必要であるということだ。班のみんなで定植をしたため、はやく終わらせることができたが、活動をした農地を管理している二人で何百本のキュウリやナスの定植をするのは、とても時間がかかると思った。人手不足が大きな問題だと思った。

舟形町の堀内地域の人口は平成27年の時点で724人。そのうち、0~14歳は79人、15~64歳は605人、65歳以上は398人となり、少子高齢化により他地域より減少が著しく、集落が消滅する危機となっている。そのため、農業の後継者が不足し、耕作放棄地が増えている。任意団

体から法人化することで、農地の買い取り、農地を売るなどのことができるようになる。そのため、法人化し、耕作放棄地を減らすためにも農地を管理することが大切であると思った。

また、農作業にかかる時間や労力を少しでも減らし、効率よく農業をするためにITを使った農業をしたいとのことだった。しかし、ITを利用するには設備に多くの資金が必要となり、実行することが難しい。そこで、いかに利益を上げるかが大切となる。

農村環境改善センターの横にあるグラウンドで試合がある日は、人がたくさん集まるとのことだったので、その日に合わせた「小さな市場」を開催し、農産物を販売すればいいのではないかと思った。「産直まんさく」という地域のものが販売されているお店があるが、人が集まるより近くで販売することで、より売れやすくなると思った。そして、地域で収穫されたものを地域で売ると、輸送にかかる費用などが省け、利益が増えるのではないかと思った。

舟形町の農業を守るためには、地域の野菜を広め、より多くの人に食べてもらうことも大切だと思った。例えば、「西又かぶ」だと表面の皮だけでなく、全体が赤紫色となっている。このような野菜があると情報があれば、特徴を生かして、見た目を大事にしているお店で、料理に彩を与える野菜として利用されるようになることもあるのではないかと思った。ネットを使って、発信できる人がいないという問題があるが、広め、まず知ってもらうことが大切だと思った。

農学部 Kさん

私はこのフィールドワーカー共生の森もがみで、農業の大変さ、農村地域の現状。またその現状を打破することの難しさを学んだ。

舟形町は昭和29年に舟形村と堀内村が合併し、生まれた町だ。私がお世話になった舟形町の堀内地域は、住民の約80%が農家をしている農村地域だった。舟形駅周辺は商店街になっていたが人通りがなく、少し寂しげであった。そこから少し移動すると建物が徐々に少なくなり、木々の緑が増えていく。道のそばには最上川が力強く流れていた。舟形町は自然が豊かで、時間の流れが緩やかに感じるのんびりとした穏やかな町だ。

今回、私たちは実際にキュウリとナスの定植を手伝わせてもらったが、それはとても大変な作業だった。苗を植えるための穴をあけ、農薬を土に混ぜ、苗を植える過程のすべてを手作業で行っているのだ。また、定植後も一週間に1,2回農薬を撒く作業もある。機械化が整っていないことがまず一つの課題だと思った。しかしそれ以上に重要なのが大量の作物の管理だった。昨年はまさにキュウリの管理が間に合わず、出荷本数が減少してしまったそうだ。私はITを取り入れることが必要だと考えた。ITの導入で、作物の状態を情報として管理し、時間と費

用を大幅に削減できるだろうということだ。

また、農業は天候に左右される。雨が降るか降らないかによって水やりを調整したり、先ほど述べた農薬を撒く作業も雨が降った分だけ回数を増やさなければならぬ。天気によっては作業ができなくなる日もある。このような農家の負担も情報化によって軽減されることが理想である。しかし、これには膨大な費用がかかることが予想されます。そのため、国のIT導入補助金が適用されるのか、クラウドファンディングを活用できないか、といったことを調べる必要があると思った。

舟形町が抱えているもう一つの問題が後継者不足である。若者は町を出ていくため少子高齢化が進み、人口自体も徐々に減少している。今のところ耕作放棄地は増えていないが、これから増えていくことが予想できる。どうにかして後継者をつくらなければ、農村としての舟形町はなくなってしまうのだ。私はこの課題を解決するためには、舟形町の知名度を上げることが必要だと考えた。なぜかという、人を呼び込むために知名度がまず必要だと考えたからだ。農林水産省のデータによると近年、新たに農業へ参入する若者が増加しているという。そのような人たちを舟形町が運営している農事組合法人に呼び込むことで、後継者の育成につなげられることが考えられる。

私は舟形町の知名度を上げるための具体的な作戦として、地域ブランドを作ることを提案する。たとえば舟形町には薬師の森と呼ばれるブナの森がある。そこで舟形の米を「舟形-薬師の森で育った米」として売り出すことで、米に付加価値をつけながら名前を宣伝することができる。ほかの地域との差別化をすることで、新規農業参入者にアピールをするのだ。地域ブランドはその地域の風土や文化、気候や自然をよく知っていないと作ることができない。そのため、この作戦には舟形町に住む人の知識が重要となるだろう。

このフィールドワークで舟形町の穏やかさと町の人々の温かさに触れた。農村地域のこれからについて考えるいい機会だった。そしてなにより、楽しく充実した四日間だった。



子どもの自然体験活動支援講座

活動状況

○実施市町村：真室川町

○講師：山形県神室少年自然の家職員

○訪問日：令和4年6月11日(土)～12日(日)、7月2日(土)～3日(日)

○受講者：人文社会科学部1名、地域教育文化学部6名、医学部3名、工学部4名、農学部1名
以上15名

○スケジュール：

| 1回目 | 2回目 |
|--|--|
| 【1日目】6月11日(土) 8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 9:50 新庄駅発 10:30 自然の家着 10:50 オリエンテーションで真室川町について学ぶ 12:00 昼食(館内食) 13:00 自然体験活動実習 17:30 夕食 18:30 体験活動の意義についてのワークショップ 19:30 ふりかえり | 【1日目】7月2日(土) 8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 企画事業「わんぱく探検隊」活動支援 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 17:30 夕食 自然体験活動支援 |
| 【2日目】6月12日(日) 6:00 起床、朝の集い 7:30 朝食 9:00 打合せ(指導員・ボランティア・学生) 10:00 企画事業「めんごキャンプ①」活動支援 自然体験活動支援 12:00 昼食 自然体験活動支援 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:20 自然の家バス発 16:30 新庄駅発 18:00 山形大学着 | 【2日目】7月3日(日) 6:00 起床、朝の集い 7:30 朝食 9:00 自然体験活動支援 12:00 昼食 13:00 ふりかえり(参加者) 14:00 わかれのつどい 14:30 後片付け・FLミーティング 15:20 自然の家バス発(真室川町のバス) 16:30 新庄駅発 18:00 山形大学着 |

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Sさん

私は今回、もがみの集中講義で真室川町に訪れた。真室川町は山形県の北部に位置する町で自然にあふれた町だ。私たちはその真室川で1泊2日の活動を2回行った。1回目の活動は6月11日、12日に行われた。1回目の大きな目的は、2日目、12日に4歳～7歳の子供を対象に行われる「めんごキャンプ」の活動支援だ。この活動は親子での参加だが、活動開始早々に子供と親はお別れをし、それぞれ別の活動をする。めんごキャンプのねらいは「集団活動や自然体験活動を通じて、幼児が自立する力や仲間とかかわる力を育む。また、親が自然体験活動や子育てについて考えるきっかけにする。」とされており、これを達成するために我々も行動した。めんごキャンプを次の日に控えた11日は、当日活動する場所を事前に訪れ危険な場所や注意が必要な場所を確認した。また打ち合わせの際、自然の家の職員の方に、当日は「子供を見守る」という立場でサポートしてほしいというお話をされた。先述した通りこの事業のねらいは子供の自立する力や仲間とかかわる力を育むことであるため、多少の困難も彼ら自身の力で乗り越えさせてほしいという意図があつてのことだった。当日は、それぞれ担当の子供につき活動を見守った。私の担当の子供は小学1年生の女の子だった。はじめは人見知りなのか全く話しかけてくれなかったが、終わる頃には打ち解けることができた。山の探検や川遊びを通して私は子供の成長を感じた。一概に子供といっても性格は十人十色で、自己中心的な子もいれば、意思表示ができずに固まってしまう子もいた。しかし、自己中心的だった子が、虫が取れない子のために自分がとった虫をあげたり、さっきまで一人でいた子が友達と手をつないでいたりなど、活動を通して、協調性を学んでいた。私は「めんごキャンプ」で自然の力は子供を大きく成長させてくれるということを学べた。

2回目の活動の内容は7月2日、3日に行われた、「わんぱく探検隊~夏~」の活動支援だった。こちらは小学3・4年生が対象で1泊2日の活動である。1日目には浅い川での川遊びやナイトハイク、星空の下でシュラフを使って寝るビバーク泊、2日目は前日より深い川で遊んだ。この活動では1泊2日であり年齢も少し上がったために、単に楽しいだけでなく、準備や片付けなども子供がやった。この活動を通して感じたことは、子供の成長はもちろん、子供と過ごすことで私たちも成長させられるということだ。楽しませようと思っていたら楽しんでいるのは自分だったり、心配してくれたり、遊ぼうと言ってくれたり、自分が大人に近づくにつれ忘れてしまった何かを思い出させてくれた。今回の集中講義で私は子供と自然が好きなのだ気づくことができた。これからボランティア

活動にも参加しようと思う。真室川町に行くことができて、本当に良かったと心から思う。



地域教育文化学部 Fさん

私たちは6/11-12, 7/2-3に、真室川町の神室少年自然の家で子どもの自然体験支援活動を行ってきた。

活動が始まった当初私は、「自然の中では貴重な経験と同時に多くの危険とも隣り合わせとなるため、大学生である自分が子どもを守らなければ」と高慢な考えを持っていた。しかし、いざ活動を終えてみると、子どもたちからたくさんのことを学ばせてもらったのは私の方だった。

私が子どもから学んだことは主に2つある。

1つ目は、ひたむきに努力する姿勢だ。これは1回目のフィールドラーニングであるめんごキャンプで学んだ。私が担当した小学1年生の男の子は虫取りを開始してからしばらくの間、虫を1匹も捕まえることができなかった。しかし彼は1時間ほどの間、1度も諦めたり自棄になつたりすることなく黙々と虫を捕まえるための工夫を考えていた。網で波を作って生き物を誘導し、他の友達を参考に場所を何度も移動し、動きの速いアメンボに気付かれないようにそつとアメンボの進行方向に網を仕掛けるなど、浮かんだアイデアを次々と行動に移していた。前日に大学生だけで虫取りをした際は私は開始10分でほぼ諦めてしまったため、その子の意欲と集中力を見て背筋が伸びる思いがした。

2つ目は、思ったことはすぐに伝えるべきだということだ。これは2回目のフィールドラーニングであるわんぱく探検隊~夏~で学んだ。前回よりも参加した子どもの学年が上であることに加え一泊二日間寝食を共にしたことで、子どもたちとはよりたくさん話をすることができた。その中で子どもたちは感謝の気持ち、自分が良いと思ったもの、人とは異なる自分の意見を、誰に構うわけでもなくはっきりと発言していた。私は普段から人の反応に一喜一憂したり、少数派の意見なら自分の考えを曲げてしたりしてしまうこともあるため、そのような子どもたちは本当に輝いて見えた。大きな声で「ありがとう!」、満面の笑みで「お姉ちゃんのそれ可愛いね!」と言われたら言われた方も幸せな気分になれたし、自分

の意見を強く主張してくれたおかげで全員の満足いく方法をみんなで模索することもできた。

今回自然体験を通した子どもの成長を間近で見る過程で、自分がいつの間にか失ってしまったものの重さを改めて感じる事ができた。今後将来のために大学で学ぶ際には、言い訳ばかりせず一直線に努力し、他人の顔を窺いすぎずに自分の思いや考えを真正面から伝えることを大切にしたいと思った。そしてまたいつか、子どもに胸を張って語れるような人生を歩んでいきたいと思った。

地域教育文化学部 0さん

まず始めに、私は幼少期・少年期にたくさんの自然体験をすることを提唱する。

その理由として、私は二回にわたるフィールドワークで子どもと共に自然に触れ、子どもたちの成長を目の当たりにした。

一回目6月の年中～小学2年生の子どもたちと例年とは違い、二人一組になって活動した。この時私が担当した子は家族との別れに泣いてしまっていた。ここには信頼できる人と離れることによる不安、いきなり見知らぬ人と活動することによる不安があったからではないかと思われる。しかし自然に触れ、活動していく中で楽しさや面白さ、不思議さを覚え自ら楽しんでいく様子が見られた。この時、「山登り」と「生き物探検」の二つのコースに分かれて活動したが私と担当した子は「山登り」を選んだが、同じコースを選んだ他の子たちが楽しむ様子を見て不安が和らいだこと、その様子を見て自身も興味がわいて楽しもうとする気持ちが芽生えたこと

(探求心の芽生え)があったのではないだろうか。一回目の活動を通して私は、子どもたちは親から離れ自分の興味に従って遊ぶ(活動する)ことで自主性や探究心が養われる、他の子たちとともに活動することで協調性やコミュニケーション能力が養われるのではないかと感じた。活動後、調べたところ自然体験が子どもに及ぼす良い影響は多いことが分かり、自主性や探究心、協調性などが養われることが分かった。

二回目7月の活動では小学3、4年生の子どもたちと活動した。内容としては前回とは違い、川遊びとナイトハイク、ビバーク泊を含む一泊二日の活動であった。私はこの活動で、一回目の活動を通して見つけた課題や発見を違う学年の子どもたちに当てはめ違いを知ること、こちらの学年にだけ見受けられる課題などは何か知ること目標として活動した。二回目は学年が3、4年生であったこともあり、前回の子どもたちよりも自主性や協調性が顕著に見られた。自ら遊びに人を集めたりする子もいた。同時に自己主張しようとする気持ちが強くなっていることも分かった。そこで起きた問題として“意見がまとまりにくい”ことや“自身の思い通りにいかない子”もいたことが挙げられる。これがなぜ問題になる

かという、先ほど協調性がより顕著に見られたと述べたが、自己主張が強すぎると協調性が働かなくなってしまふ。自分の意見を通そうとするあまり、他人の意見を聞くことを忘れ、合意形成が難航する可能性がある。

二回の活動を通して、私は子どもの年齢における発達段階について学び、成長の中で起こる問題への対処についても考えた。子供の成長に関しては、成長するにつれて顕著に見えてくるものや、早い段階から身につけているものもあった。また、現代の子どもには身に付けるべき能力が備わっていない事例も増えてきていると私は考える。自然体験(自然の中で活動することは我々の心身に多くの良い影響を与えてくれる。幼少期・少年期に自然体験した子とそうでない子とでは、協調性や豊かな心が育まれることなど多くの面で差ができることが分かっている。したがって私は豊かな心を持ち、自信や自主性を養うために、幼少期・少年期に自然体験をたくさんすることを提唱する。



地域教育文化学部 Mさん

私が真室川町での子供の自然体験支援に参加して学んだことは大きく分けて3つある。

1つ目は子供との関わり方と自然体験を通して子供が得るものについてだ。まず、私はこの自然体験学習支援で年齢別の子供たちへの関わり方への違いを学んだ。私は今まで子供なら年齢が違っても大抵は同じような関わり方をすればいいと考えていた。しかし幼児や小学校2年生までの子供と小学校3、4年生の子供では考え方や行動、自分の意見を主張するかしないかなど、こちらへ対する態度も全く異なり、異なる対応が必要なのだと分かった。関わり方も幼児と接するときは「見守り」がメインで、逆に3、4年生に対しては一緒に何かをしたり話を聞いたりすることをメインに活動支援を行った。次に、今回のフィールドラーニングを通して自然体験が子供たちに大きな影響をもたらしていることを実感した。事前学習で自然体験がこどもにもたらすものについて学び、自然体験は主体性や自主性を育み子供の興味関心を促すということは知っていたが、今回実際に子供たちが自然体験を通して成長する姿をたくさん見ることができた。例えば、自分の担当していた子が自然体験を通し

て自分のしたいことを主張したり実際に山登りをしたりしてどんどん主体的になっていることが見て取れた。また、グループで活動していた子供たちは、はじめはお互いに緊張している様子だったが、自然体験を一緒にしていくうちに打ち解けあい、上級生が下級生の面倒を見たりお互いに助け合ったりして自主性や主体性が芽生えているのが見ていて分かった。

2つ目は自分自身がたくさんの貴重な体験をすることができたと感じていることだ。今回私は星空を眺めながら外で寝たり、川遊びをしたりなど、たくさんの初めての体験ができた。ほかにも、大勢の子供たちと関わり一緒に活動できたこともとてもいい経験になった。このことは、これから自分が大人になったり教師を目指したりしていくうえで自分の引き出しとして話せたり学んだことを生かしたりできると思う。

3つ目は真室川町の地域活性化のための解決策を考えたことだ。解決策として、この自然体験の内容を少し変えてパッケージツアーなどを作り県内外の人が気軽に自然体験ができるようにすればよいのではないかと考えた。また、キャンプのボランティアとして中学生や高校生にも参加してもらえれば、若い力で町にも活性化がもたらされるのではないかと思った。

今回の活動でこのようにたくさんのことを学ぶことができ地域の問題についても考えることができた。これからは今回学んだことを生かして自分の糧にしていきたい。

地域教育文化学部 Iさん

1回目の1日目は、2日目に来る子どもたち（年中、年長、小学1、2年生）と活動する場所を私たちだけで回り、危険な箇所を見つけました。最初に、広場を回り、用水路などの溝を見つけました。私たちは問題なく通れる箇所でも、子どもたちにとっては、大きな溝であり、怪我をしてしまう可能性もあることに気付きました。また、川と山にも行きました。川では、簡単に魚や生き物が取れないことを学び、子どもたちにも粘り強く、諦めない心を学んでもらうことが出来る、と思いました。山では、自分だけでさえ、登ることが難しかったので、次の日、子どもたちを見ながら自分も登ることが不安でした。しかし、この1日を通して、みんなと距離を縮めることが出来ました。

1回目の2日目は、実際に子どもたちが来て、1日目にした活動をもう一度行いました。まず、1日目に確認した危険箇所に注意しながら、子どもたちと広場で遊びました。私が担当した子は、とても活発な男の子だったので、私から話しかけなくても、自分からたくさん話しかけてくれました。そのおかげもあり、子どもたちときちんと関わりながら、近づきすぎず、見守らなければならない、という緊張もほぐれ、子どもたちと一気に距離を縮めることが出来ました。実際に子どもたちと関わる中

で、子どもたちを楽しませようと思うより、自分自身が本当に楽しむことで、子どもたちも本当の笑顔を見せてくれると感じました。子どもたちは、大人よりも、表情を見て感じるものが直感的で、本当に心からの笑顔や言葉を感じ取ってくれる、と思いました。

2回目は、1日目から子どもたち（小学3、4年生）がいて、大学生も共に外泊をしました。1日目は、浅めの川に入りました。担当していたグループの子どもたちが、子どもたち同士で仲良くなっていて、1回目とは違い、子どもたち同士の繋がりが強いと感じました。1回目は、子どもたちがそれぞれやりたいことを個人個人で行っている様子が多く見られました。しかし、2回目は、子どもたちがお互いに「なになにしよう」と声を掛け合って、何人かのグループで遊んでいる様子が多く見られました。学年が上がるごとに、遊び方も変わっていくのだと知り、驚きました。

2回目の2日目は、1日目よりも深い川に行きました。1日目も夜遅くまで活動していたにも関わらず、ほとんどの子どもたちが朝早くから起きて、元気に遊んでいる姿を見て、こちらまで元気をもらえました。暑い中の川遊びだったけれど、川の水はとても冷たく、一度川に入ったら、凍えるほどの寒さでした。しかし、子どもたちの無邪気な表情を見ていたら、自然と元気になり、子どもたちの人々に与える力を、改めて感じる事が出来ました。

この4日間を通して、子どもたちの成長の早さと、子どもたちの持つ無限の体力はもちろんのこと、子どもたちの「こうしたい!」、「自分の力でやりたい!」という主体性の強さにも驚かされました。私が、ある子に手を貸そうとしたとき、その子に「自分でやる!手いらない!」と言われてハッとしました。子どもは、「自分でやりたい」、そして、実際に「自分だけで出来ること」が、私が思っているよりも、はるかにたくさんあり、ただ守ってあげるだけの存在ではないのだ、と感じました。子どもたちには、周りを見る協調性があり、自分がこうしたい、という主体性もあることに驚き、感動しました。私も、子どもたちのように、なんでもチャレンジしていきたいと思いました。普段味わえないような体験が出来て、本当に参加してよかったな、と思います。



地域教育文化学部 Hさん

私たちは、6/11~12、7/2~3に真室川町の少年自然の家で行われた自然体験活動の支援を行ってきた。私はこの2回の活動を通して、子どもたちが自然の中で発揮する力や、子どもたちの発想力、興味を持ったことにまっすぐ向き合い、最後まであきらめない姿に何度も感服した。

1回目に行われた「めんごキャンプ」では、子どもたちと生き物探しに出かけた。その時に私が担当した女の子は、少年自然の家の職員さんに教えてもらいながら見事にザリガニを捕まえることができた。すると次はそれを羨ましそうに見ていた初対面の子に、「私が石を動かすから、ここで網おさえておいて！」と声をかけ、協力してザリガニを捕まえていた。一度ザリガニを捕まえた喜びによる「また捕まえない！」「次は自分の力で！」という意欲と向上心、ザリガニを捕まえた瞬間を羨ましそうに見ていた友達に対する優しさと協調性から、主体的にのびのびと自然を楽しんでいた。さらにその後女の子は、「イモリを捕まえない！」と時間ギリギリまで探し続けた。結果的に捕まえることはできなかったが、一度も諦めるようなネガティブな発言をせずに探し続けていて、その集中力と諦めない姿勢に感銘を受けた。

2回目に行われた「わんぱく探検隊-夏-」では、子どもたちと川遊びに行った。魚を捕まえる子もいれば、水の流れに乗って遊ぶ子、みんなが思い思いに楽しんでいた。二日目に行った川では、大人たちが凍えてしまうほど水温が低かった。そんな中ある女の子たちが、日の当たる岩場のくぼみに川の水を集めることで冷たかった水を温め、「見てー！温泉作ったの！あったかいよ！」と声をかけてくれた。私は子供たちの発想の豊かさと自然を最大限に活用してどんな状況においても精一杯楽しんでいる姿に感心させられた。

この2回の自然体験活動を通して、自然には人の数だけ遊び方や楽しみ方があり、ネット社会が進む現代において室内では伸ばすことができない生きる力を自然の中で身につけることができるのだと感じた。子どもたちは自然という遊び方が無限にある環境で「あれやりたい！」「あっちに行ってみよう！」などと、周りの友だちに流されることなく自分のやりたいことへ意欲をもって興味が向くままに行動していた。さらに、さまざまな発想を膨らませ、ときには友達と協力して主体的に活動していた。子どもたちにはたくさんの好奇心や発想の引き出しがあり、たくさんの可能性を秘めているのだなと感じた。そして、その可能性を引き出す力が自然にはあるのだと感じた。このフィールドラニングで自然や子どもたちの偉大な力を発見することができ、とても貴重な体験となった。

地域教育文化学部 Tさん

私は今回のFLで子供たちの自然体験と普段の授業の違いについて考えていきたいと思う。合計2回真室川町に出向いて、1回目は年中さんから小学2年生対象の「めんごキャンプ」2回目は小学3、4年生対象の「わんぱくキャンプ」のお手伝いとして参加させていただいた。

1回目のめんごキャンプは個人的に凄く貴重な機会だった。私は年中さんの男の子を担当した。その子は特に両親と別れることに抵抗はなく、スマホもとても楽しそうに食べていた。しかし、いざ両親と離れたことに実感が湧いてくるとその子は泣き出してしまった。そこに救世主のその男の子のお姉ちゃんが迎えに来てくれて、その後も活動を続けることができた。

2回目のわんぱくキャンプでは小学3、4年生の班活動で4つ班があるのに対し、1班4人程度大学生がつく形となった。ほぼ川遊びメインで2日間過ごしていたが、個人的に忘れられないでき事が2つほどあった。1つ目は班になじめずに孤独な思いをして泣いている子供がいたこと。もう1つは夜大好きな父親を思い出して泣きながら疲れて眠っていた子どもがいたことだ。私はどちらかというと楽しかった思い出より、マイナスな感情があった子どものことをよく覚えているみたいだ。

まず、私自体今まで学ぶ側だったため、いざサポートする側に入ってみると苦戦することが多々あった。何より難しいのが「待つ」という動作である。簡単なようだが、小さくまだ何もわからないで行動している子供を目の当たりにすると、とても難しく感じた。ですが、私たちが思っている以上に子供の成長は早く小さくてもとても賢いことが分かった。

次に思ったのは、自然体験は自分たちにとっても小さい子供たちにとっても「非日常的な体験」であるという事だ。子供たちは普段学校に行けば、いつものクラスメートに会って遊んだり喋ったり、国語や算数を勉強している。そこに確かな感情があるかはわからないが、私は幼少期の頃特に意識したことはなかった。でも自然体験は自分の感情に真正面からぶつかることになる。いつも傍あるSNS・ゲームや、何でもしてくれる親はいない。自分のやりたいことをどうにかして成し遂げなければいけない。わからないことに直面した時、投げ出して全部大学生に任せようとする子供たちもいた。でもそこで私たちがやっては意味がない。何とかヒントを出して答えにたどり着けたあの子供たちの表情を、私は忘れたいと思った。もちろん大学生にとっても、大学では体験できない子供たちとの共同授業になったわけで、とてもいい経験になった。

考察として、自然体験は自分との感情に素直にぶつかる場所であり、普段の生活から離れることは人の成長に大きくつながると思う。

医学部 Hさん

1. F. L1回目

- 1) 1日目では、大学生だけで翌日の活動の予行演習をした。まずは自由時間。子どもの気持ちになって、目に入ったものを手当たり次第に触ってみることを心掛けた。次は山登り。山道が思ったよりも陰しく、とても大変だった。明日は子どもたちに意識を向けつつ、自らの身の安全も確保しなければいけないのが大変だなと思った。またネガティブ発言が多かったので、みんなの士気を下げないためにも明日はポジティブな発言をしようと思った。それから池へ行き、生物探しをした。池には柵がなかったため、転落には十分気を付けないと感じた。1日目を振り返って、事前にリスクを知ることができてよかった。
- 2) 2日目は年中から小2までの子どもたちと交流をした。子ども1人に大学生1人が担当するような形で、子どもたちの活動を見守った。私の担当した子は生き物が好きだったため、生物探しをした。生物がいそうな場所を自らで探索したり、捕まえた生物の種類をほかの子に教えてあげていたり、とても自発的に活動できていたと思う。2日目を振り返って、少し子どもたちに干渉しすぎた気がした。もう少し「見守る」ということに重きを置くべきだったと思う。

2. F. L2回目

- 1) F. L1回目とは違い、F. L2回目では初日から子どもたちと触れ合うことができた。学年は小3～小4で、活動は主に川遊びとナイトハイクの2つの班活動を行った。まず川遊び。川を下ったり、生物探したり、川に逆らったり、様々なことをしていた。次にナイトハイク。夜道を散歩して、特定のスポットでなぞ解きをした。それぞれが積極的に問題に取り組んでいて、とても素敵だと思った。1日目を振り返って、前回よりもいい意味で自己主張をして遊んでいる子が多かった印象を受けた。
- 2) 2日目も1日目同様に川遊びをした。2日目の川は1日目の川と比べると、流れも急で、川幅も広く、川底も深い川だったため、1日目ではできなかった遊びをしていた。例えば川に飛び込んだり、ビート板の上に乗って流されたりしていた。2日目を振り返って、いろいろな遊びに挑戦する子どもたちの自由な発想力や積極性、そして自発性にはとても驚かされた。

3. まとめ

今回のF.Lで子どもたちの無邪気な姿を目にすることによって、私は成長の過程においていつの間にか自己主張力を失っていたのだということに気づかされた。「空気を読むこと」は社会生活を営む上でとても重要なことではあるが、だからと言って「個性を殺す」まで空気を読む必要はないということを考えさせられた。自分らしくいることの大切さを教えてくれたこの活動は私にとって、とても有意義なものであったと思う。



医学部 Oさん

1. FL1回目

6月11日、12日に行われたフィールドラーニング第1回では、めんごキャンプのスタッフとして様々な活動に取り組んだ。年中さんから小学2年生の子どもたちと共に、自然の中で化石掘りや生き物探しを行った。大学生は一人ずつ担当の子どもが割り当てられていたが、遊びを先導するのではなく、あくまで見守るという姿勢を貫いた。私の担当の男の子は、はじめ極度に緊張していた。呼びかけに反応しないだけでなく、身体も硬直してしまっていた。私は対応に困って、職員の方と話し合っていた。男の子から目を離している間にその子の友達が近づいて話しかけると、男の子の緊張は途端に解けたようで、生き物探しにも一緒に参加し生き生きと活動していた。私にも話しかけてくれた。この様子を見て、一部の子どもたちは大人の視線があるとプレッシャーになるのかもしれないと思った。同じ年齢の子どもたちと自由に遊べる環境を作ることが必要なのではないかと考えた。

2. FL2回目

7月2日、3日に行われたフィールドラーニング第2回では、わんぱく探検隊～夏～のスタッフとして、川遊びや野外泊を体験した。今回は小学3、4年生の子どもたちが参加し、班ごとに活動した。子どもたちは元気いっぱい、私たちと対等に話してくれ一緒に遊んだ。遠くで見守っていることが多かった1日目より、2日目に深い川と一緒に飛び込んだ時は子供たちの本当の笑顔を見ることができた。私の楽しいという気持ちは、子どもたちに伝わっているのだろうと感じた。夜なかなか眠れない子や、初めて親元を離れて寝るため寂しくなって泣いてしまう子もいたが、それを乗り越えて2日目も全力で楽しむことができた。子どもたちはあっという間に成長するのだなと感じた瞬間だった。

3. 2回のFLを通して考えたこと

1回目と2回目ではどちらも自然体験活動を行ったが、子どもたちの遊び方は大きく違っていた。年齢が上がるにつれ、同じ年齢の人だけではなく年の離れた人ともう

まく関わられるようになるのではないかと思った。また友人の感想にあったように、小学校中学年ともなると自主性が高まり個性も出てくるのであろう。

最後に幼児・児童期の自然体験活動の意義について考える。今回一緒に活動して、子どもたちの力、パワーを目の当たりにした。室内にこもっているよりも、外で自然に触れているときのほうが、生き生きと色々なことに挑戦しているように感じた。よって小さいころから自然に親しみ、思い切り体を動かすことは、これから生きていくうえで大切なことであり、豊かな人生につながるのだと私は考える。

医学部 Kさん

私は二回の真室川町でのフィールドワークでそれぞれ違ったことを感じた。

初回のフィールドワークは年少から小学校二年生までの子供を大学生がそれぞれ一人ずつ担当して、その子を遠くから見守るということが主な活動だった。私が担当した子は小学1年生の女の子で、友達が同じ山登りのグループにいたため親と離れて一日活動することに抵抗はない様子だった。しかし山登りグループの中に一人幼稚園児の子がいて、山登りの往路ではその子がなかなかグループの他の子についていけなかった。そんな中で、その子が復路の時には自分から前に進んで行く様子や、グループの子たちが自然と隊列を作ってみんなで歩いていく姿をみて、私が想像していたよりも子どもたちが自主的に動いたり力強かったりしたことにとっても驚いた。

二回目のフィールドワークは小学校中学年の子たちが参加していて、また、大学生がそれぞれのグループに三、四人つくという体制だったため初回とはかなり雰囲気の違いがあった。この時は子供の年齢層が初回より高いこともあってか自己主張が強かったり、積極的に活動しようとする子の割合が高いように感じたり、年齢を増すにつれて変化する子供の行動や考え方を知らない機会だった。

私はこの二回の毛色の異なるフィールドワークで共通して、子供が普段することのない自然体験をするという大きな達成目標があるように感じた。私自身もここ二年ほど今回したような山や川での遊びをしていなかった。久しぶりに自然の中で遊んでみると、普段のインターネットやそのほか多くのテクノロジーに囲まれた生活が少し恋しくなることがあったが、それ以上に自分が精神的な部分でどこか洗われるような感覚があった。子どもたちがこんなことを考えながら自然体験をすることは難しいと思うし、きっと考えている子はほとんどいないと思うが、自然の中で短い間でも親と離れて生活することで、無意識のうちに心の豊かさが得られるのではないだろうかと思ふとぼんやりとではあるがフィールドワーク中に考えていた。

また、先にも書いたが私は子供たちの持つ力を見くびっていたと思い返している。小学校中学年の子たちが自主的に動くことは想像できたが、まさか幼稚園児の子の精神的な部分で一気に成長が見られるとは思わなかった。

全体を通しての考察として、普段はあまりすることのない経験を少しでもすることで新たな考え方を発見できることに気づけたことがとても大きな収穫だった。子供を危険からただ遠ざけようという流れがいろいろなところで最近見られるが、実際に遠くから見守って子供たちに考えさせ、行動させてみることも彼らの成長にとっても有効ではないかと感じた。

工学部 Sさん

1回目1日目。「めんごキャンプ」という活動のボランティアをする私たちは、2日目に子供達が活動することを実際にやってみて、子供達が活動するにあたって危険な箇所を探索しました。私たちには危険と思えない側溝も子供達にとっては大きく見えるので危険な場所でした。子供達目線で危険を考えることは難しかったです。そして、この探索にはもう一つ大事な役割がありました。それは、私たちはどのように感じるかということです。2日目に活動する子供達はどのように感じるかということと対比させることで、私たちとの感受性や思考の違いを明確にすることが可能となります。

1回目2日目。私たちは子供達とペアを組み、実際にめんごキャンプの活動のボランティアをしました。私は、年中学年で大人しく礼儀の正しい子とペアを組みました。彼の自然体験活動を見て、1つ驚いたことがあります。それは好きなものに対する姿勢の強さです。私の担当した子は生き物が好きで、ある木の根元を掘っては、次の木の根元を掘り、ということを繰り返していました。また、水辺の生き物探しでは、私には目もくれず、泥まみれになりながら、一心不乱に小川の生き物を探していました。汚れたり、周りの目を気にすることなく、好きなものを追い続ける姿勢には考えさせられるものがありました。

2回目。私たちは「わんぱく探検隊」という活動に参加しました。主な活動は、川遊びとナイトハイクでした。川遊びでは、それぞれの子供達が、泳いだり、川に流されたり、生き物を探したり、水切りをしたりなど、やりたいことが一緒の人たちと楽しんで遊んでいる姿が印象的でした。ナイトハイクでは、子供達が謎解きをする場面がありました。それぞれの考えが衝突し、解決の手がかりを奪い合うようになっていた様子から、大人との違いを感じさせました。しかし、それは未熟という意味ではなく、自分の意思を表現できているという違いです。

私は今回の2回の活動を通して、「大人の自己主張の低下」を痛感しました。私たち大人は成長するに従って、

空気を読むことを学んでいきます。そうすることで自己主張が弱くなり、他人に合わせるが多くなります。しかし、今回の子供達は皆がそれぞれの個性とやりたいことを発揮して、それぞれが周りを気にすることなく、のびのびと活動していました。これは大人たちとの大きな違いです。私は、これが良いか悪いかは分かりませんが、このことについて、今後の人生で深く考えていきたいと思いました。

工学部 Mさん

私は、2回のフィールドラーニングの活動を通して、子供がものすごいスピードで成長していく姿を見ることができた。

特に、1回目の活動の中心である「めんごキャンプ」の活動の中で子供の成長を感じた。めんごキャンプとは幼稚園年中から小学2年生までを対象とした活動だ。この活動の狙いは、家族と離れて様々な自然体験活動に挑戦し、多少の辛いことでも頑張ろうとする気持ちや自分のことは自分でやろうとする気持ちを持つことだ。

この活動の中で、指導スタッフがやらなければならないことは、「見守る」ということだ。見守るとは、私たちは子供たちが転んでしまったり、困っていたとしても、手助けをしてはいけないことである。このことは、子供たちの自分でしたいことを決め、自分でできることは自分でする力を育むためである。

私は5歳の女の子を担当した。その子はとても内気で、あまり自分から話すタイプの子ではなかった。もしかしたら、両親も友だちもいない中、活動しなければならないため、緊張をしていたのかもしれない。最初の自由遊びでも何で遊べばいいのか分からず、ボーッとしているだけだった。選択活動では、彼女は「山登りコース」を選択した。登る山はとても険しく、とても大変な活動なので、彼女が1人で登り切れるかどうかとても不安だった。彼女自身も、初めての登山で、緊張した様子を見せながら山を登っていった。

山登りの序盤、彼女に最大のピンチが訪れた。なんと、登っている最中に転んでしまったのである。一瞬、手を差し伸ばそうとしたが、私は見守ることに徹した。彼女のことをじっと見てみると、彼女は最初何も出来ず、硬直してしまっていたが、そのあと、自分の力で立ち上がり、力強い足取りで、山登りを再開したのである。この時、私はとても感動した。この一瞬の中に、彼女の成長を感じることができたからだ。いつもなら、両親などの誰かが助けてくれるだろう。しかし、誰も助けてくれない状況において、泣かず、自分の力で立ち上がったことは、彼女が困難がたくさんある世界で生きていくために必要な力だと感じた。

その後、彼女の行動は最初の頃と全く異なった。怖いもの知らずで、どんどん前に進んでいく時折笑顔を見せるようになっていった。山登りを終え、家族と再開する

時には、最初の緊張した様子はなく、自信に溢れた姿になっていた。

私は、この活動を通して、子供は自然体験活動の中で大きく成長することが分かった。そして、今までできなかったことができるようになった時に見せる子供たちの笑顔は、世界を救うことができるくらいの大きなパワーを持っていることに気付けた。



工学部 Iさん

1. 1回目

私たちは、年中、年長児、小学1、2年生を対象とした「めんごキャンプ」にスタッフとして参加した。1日目は、実際に2日目に子供たちが活動することを大学生だけでやって、大学生にとっては危険ではないが、子供たちにとっては危険である所を確認した。2日目は、年中さんの男の子を担当して、活動を「見守る」ということをした。その男の子は、最初の自由遊びの時間でブランコの順番が守れない子がいて、喧嘩をしてしまった。私は、見守ることができず、仲裁に入った。そして、そのあとの活動でまた喧嘩をしてしまったが、その時男の子は自分たちで話をし、仲直りをしていた。このことから、子供たちの学ぶ力や解決する力が、自然体験によって身につけていて、子供たちの成長の速さを実感した。また、担当の子は、ザリガニなどの生き物を捕まえたいと言っていて、なかなか捕まえることができなかったが、諦めずに生き物を探し、捕まえている姿を見て、子供の諦めない気持ちは、今の自分にはもう無くなってしまった気持ちだなと思いました。

2. 2回目

私たちは、小学3、4年生を対象とした「わんぱく探検隊～夏～」のスタッフとして参加した。この活動では、班ごとに分かれて、川遊びやナイトハイクをした。2回目の活動は、1回目の活動と違って、「見守る」というよりは子供たちと一緒に遊ぶといった感じだった。1日目は浅めの川で遊び、2日目は深めの流れが速い川で遊んだ。川状況によって、子供たちは遊び方を変えていた。1回目と比べて、遊びたいことが一緒の子たちで集まって遊んだり、大学生も一緒に遊んでいたりして、集団になって遊んでいるように感じた。ナイトハイクでは、難

しい問題を最初は子供たちで話し合っ、それでも分からないときは大学生にヒントをもらったりして、みんなで協力している姿が見られた。

3. まとめ

子供たちが成長するためには、子供たちの年齢に応じた距離感が大事なのかなと思った。また、自然体験は、子供たちが普通の生活では経験できないことを経験でき、様々な力を身につけられる良い機会だなと思った。

工学部 Mさん

一回目一日目

【活動内容】二日目の「めんごキャンプ」という活動の子ども達の支援に向けて、二日目に子供たちがすることを実際にやってみて危険なところを探し、注意すべきところを確認することをしました。

【活動をしてみて】この活動を通して感じたことは二つあります。一つ目は、山を少し登ったのですが、こんなに急な道や滑りやすい道を登ったり、下ったりすることができるのかと不安に思ったことです。二つ目は、虫や爬虫類を見て、市街地では見られない動物や昆虫などを見ることができ、まだ自然が残っていて、さらにまだ天然のものを触ったりすることができることに感動したことです。

【感想】二日目に子供たちが体験することとして、本当に今日通った道を進むことができるのかなどと考えてしまい不安な気持ちになってしまいました。

一回目二日目

【活動内容】一日目の活動を振り返りながら年中～小学二年生の子供たちの自然体験を見守り、子供の安全と健康を保持することをしました。

【活動してみて】この活動を通して感じたことは、子供の成長が著しいことです。実際、山を登る班の子供たちが登るときは各個人で登っていましたが、下るときは隊列を作って下りてきました。これを見て、自分は子供の成長スピードは自分が思っているよりも早く、自然体験を通して、協調性や行動力を身に付けることができるのだと思いました。

【感想】一日目に心配していたことは、あまり心配する必要がなく、子供たちが自分たちで乗り越えられていました。他人事のようににはなってしまうですが、自分にも今回接した子供たちのようにものすごいスピードで成長していた時期があったと思うと、人間ってすごいなと思いました。また、ほとんど何もしないで見守ることの難しさを知りました。なぜなら、今回の対象が年中～小学二年生のため、自分から危険だと思っても我慢していると、危険だと思っているところでも少し大変そうに行動はしますが、乗り越えられていたからです。そのため、本当に危険なところと子供たちが自分たちだけで解決することができる境目の判断が難しかったからで

す。

二回目一日目

【活動内容】小学3年生～4年生までの子供の自然体験の補助をすることをしました。特に、今回は見守るではなく一緒に活動しながら、安全と健康を守ることをしました。

【活動をしてみて】この活動をしてみて感じたことは、前回の年中～小学2年生に比べて、誰かと一緒に遊ぶことや行動をすることが多くなっていて感じました。個人的には、小学校の生活を通していく中で協調性が備わっていくのだと思いました。

【感想】今回は、児童と一緒に活動をするが多かったので、小学生に戻った気分になりました。また、初めて川遊びをして、海だけじゃなく川で遊ぶことも良いと思いました。

二回目二日目

【活動内容】一日目と内容は同じだが、川遊びの場所が違いました。また、就寝の前に大学生同士で確認し合った注意点を意識しながら子供たちと活動をしました。

【活動をしてみて】この活動を通して感じたことは、子供たちのほうが川での遊び方や物を使わなくても楽しい遊びをたくさん知っていると感じました

【感想】大学生はへとへとなのに隣で小学生が元気に遊んでいるのを見て、小学生の体力はすさまじいと思いました。



農学部 Kさん

はじめに

二回の活動を通して私は多くの体験をし、また、多くの経験をした。ここでは、その体験を通して学んだこと、経験したことで何を見出せたのかを記したいと思う。

一回目

1) 一日目

一日目では、大学生だけで自然の中での自由遊び、山登り、生き物探しをした。

ここでの目的は、これらの活動を通して、子供たちにはどのような場所が危険なのか、また、私たち大学生が自

然の中で起こした行動と、子供たちが起こす行動にはどのような違いがあるのか、を知るためだった。

それらの活動が終わった後は、キャンプファイヤーを焚き、グループのメンバーと親睦をさらに深めあった。

2) 二日目

二日目では、年中～小2までの子供たちの活動を「見守る」ということをした。ここでは、子供たちが主体的、積極的に活動を行わせるため、私たちは、あまり子供の活動に干渉しないようにした。最初は「見守る」ということを続けるのは難しかった。しかし、活動を通していくうちに、子供たちは自分たちで力を合わせて、目の前の課題を解決していた。私たちが思っているより子供たちには、力があるのだなとつくづく実感した。

そして全ての活動を終えた後、保護者と再会し、子供の成長を伝えるということをした。保護者も、自分の子供がそんなことするなんて、など知らない一面を知れているようだった。

二回目

1) 一日目

今回は一日目から小3～小4までの子供たちと活動した。

今回は、川遊びメインだった。子供たちと一緒に、川遊び活動した。

比較的、浅い川で遊んだ。川の流れに乗って流されたりした。また、生き物を探したりもした。

夜には、子供たちと班でなぞ解きをした。

2) 二日目

二日目も川遊びをした。一日目と比べ、深い川で遊んだ。私は体が冷えてしまっていたので、日向で休んでいたが、子供たちは一緒に遊ぼうとたくさん誘ってくれて、とても嬉しかった。

さいごに

二回の活動を通して私は、子供たちのポテンシャルの高さを知った。子供たちからしたら大人が存在である私たちが、手を貸したり、手伝ってあげなくても、一人、または仲間と解決できる力は十二分にあるんだなと思った。大人は見守りながら、共に楽しむ。これが子供たちにとっては最高のものであり、また私たちにとっては、新たな発見につながっていくのではないかと思った。



知られざる大蔵村の歴史と文化，郷土の食を求めて

活動状況

○実施市町村：大蔵村

○講師：地域住民の方々

○訪問日：令和4年5月28日(土)～29日(日)，6月4日(土)～5日(日)

○受講者：人文社会科学部1名，地域教育文化学部2名，医学部1名，工学部4名，農学部1名
以上9名

○スケジュール：

| 1回目 | 2回目 |
|---|--|
| 【1日目】5月28日(土) 8:00 山形大学発 9:15 舟形駅着 9:20 舟形駅発 10:00 肘折着 10:10～11:00 オリエンテーション 11:00～12:20 昼食 12:30～12:40 移動(つたや肘折ホテル) 12:40～13:00 荷物整理・準備 13:00～15:15 村の歴史と文化を伝え残す活動 「歴史・湯治文化・山岳信仰」 15:15～15:30 伝統工芸「肘折のこけし」見学 15:30～17:00 こけし絵付け体験 17:00～17:10 移動(つたや肘折ホテル) 17:10～18:00 肘折温泉の効能・湯治の仕方 19:00～ 夕食 | 【1日目】6月4日(土) 8:00 山形大学発 9:15 舟形駅着 9:20 舟形駅発 9:45 赤松生涯学習センター着 9:50～10:20 オリエンテーション 10:30～11:30 笹の葉採り・下処理 11:30～12:45 昼食 12:45～14:00 笹巻作り「食文化の保存活動」 14:00～14:20 移動(中央公民館) 14:30～17:00 大蔵トマト見学・農業体験 「若者グループの産業・地域活性化」 17:00～17:30 移動(赤松生涯学習センター) 17:30～18:00 休憩 18:00～19:00 夕食 |
| 【2日目】5月29日(日) 6:30 起床・肘折朝市見学 9:00 朝食・荷物準備・集合 9:00～9:30 移動(四ヶ村地区の棚田) 9:30～11:00 田植え体験 11:00～11:45 棚田保存活動について 11:45～13:00 昼食(ふるさと味来館) 13:00～13:30 移動(赤松生涯学習センター) 13:30～14:45 合海田植え踊り体験 「大蔵村伝統芸能について」 14:50～16:00 レポート記入・荷物整理 16:05 赤松生涯学習センター発 16:30 舟形駅着 16:45 舟形駅発 18:00 山形大学着 | 【2日目】6月5日(日) 6:30 起床 7:30～8:30 朝食 8:30～8:50 準備 9:00～9:30 移動(升玉地区) 9:30～11:30 大蔵わさび収穫・加工体験 11:30～12:00 移動(赤松生涯学習センター) 12:00～13:00 昼食 13:00～14:30 合海田植え踊り見学・参加 「大蔵村伝統芸能について」 14:30～16:00 レポート記入・感想発表 16:15 赤松生涯学習センター発 16:35 舟形駅着 16:45 舟形駅発 18:00 山形大学着 |

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Kさん

私は大蔵村の食文化に興味があったため、このフィールドラーニングに参加した。実際に現地へ足を運んでみると、大蔵村には食文化だけでなく、伝統工芸の文化や伝統芸能の文化、観光業に関連する温泉の文化など、古くから受け継がれる様々な文化が数多くあるということが分かった。今回のフィールドラーニングを通して発見した大蔵村の魅力をここでは述べたいと思う。

まず、大蔵村の伝統工芸品である肘折こけしについて紹介する。昔から肘折温泉のシンボルとして親しまれてきたこのこけしは、鳴子系と遠刈田系の様式が融合したデザインで個性的な表情が見る人を魅了する。肘折温泉でただ一人このこけしの伝統を守り続けている鈴木征一さんは2015年内閣総理大臣賞を受賞。ただ、肘折こけしの現状は厳しい。最近では一般家庭からの需要が少なく、こけし作りで生計を立てるのは難しくなっていると鈴木さんは言う。私自身も、そのような状況ではいずれこけしの伝統文化が廃れていってしまうのではないかと不安を感じた。地域でのイベントや県外への出張販売などを通して、肘折こけしをより多くの方に知ってもらい、興味を持ってもらうことができればこの課題の解決につながるのではないかと考える。

また、大蔵村の伝統芸能の例として合海田植踊りを紹介したい。清水城主が広めたという合海田植踊りには、約440年の歴史がある。東北でも有数の形式をとっているこの田植踊りは、例年村の住民宅を一軒一軒踊って回るという風習があり、現代でもそれが地元の有志団体によって受け継がれている。地元の小中学校でもこの踊りを体験する授業があり、若い世代へと世代交代を繰り返している。この伝統継承活動は、地元住民同志の絆の構築に非常に有効な手段であるため、このような文化を今後も絶やさぬように活動していくべきであると感じた。

次に、肘折温泉の湯治文化について紹介する。大蔵村では例年、田植えや収穫を終了した地元農家の方々がお客さんとして肘折温泉を訪れる。山形での農作業を終えた農業従事者は、この肘折温泉につかってその疲労を回復させることから、この文化は湯治文化と呼ばれている。湯治文化の存在も合海田植踊りと同様に、第一次産業である農業と、第三次産業であるサービス業の交流の場になっており、大蔵村ならではの濃い人間関係や絆の構築に役立っているのではないかと私は考える。

このように、大蔵村には古くから受け継がれる魅力的な伝統が数多くある。今回紹介した三つの文化のほかにも、さんげさんげと呼ばれる年越しの行事や、大蔵太鼓と呼ばれる太鼓の演奏の文化など興味深い文化がある

ので是非調べてみてほしい。長年地域で大切にされてきた文化を今後も継承していくために、若い世代へのアピールが必要だと感じた。SNSやワークショップなど、若者が手に取りやすい形で伝統を伝えていけたらよいと思う。



地域教育文化学部 Hさん

大蔵村は山形県最上郡にある、自然に囲まれた人口3千人余りの村である。世界からも注目を浴びる素晴らしい伝統や食文化が多数あり、人々は自分の仕事に誇りと情熱を持っている。しかし、大蔵村では近年少子高齢化が加速しており、伝統や文化の存続が危ぶまれている。私は4日間のフィールドラーニングを通して大蔵村について多く学んだが、知れば知るほど自分が村に魅かれていくのを感じた。もちろん多くの心ひかれる物事に触れたからという理由もあるが、それ以上に大蔵村の人々の、気さくさや優しさに魅力を感じたからかもしれない。そんな人々が一生懸命に守っている大蔵村の伝統・文化をどうしたら後世に伝えることができるのかを考えた。

まず、このレポートで焦点を当てたい伝統は「合海田植え踊り」だ。この田植え踊りは大蔵村の合海地区で行われている。400年以上の歴史があり、「田植え踊り」と「大黒舞い」の2つの踊りがある。毎年6月ごろに開催される祭りであり、一軒ずつ家をまわって舞いを披露する。踊り手は神様の化身であると考えられ、それぞれの家では彼らに酒などを振る舞う。振る舞われた食事に手をつけないと立腹する住人もいそう。食事を神様に振る舞うことで家庭の繁栄や幸福を願うのだろう。2つの踊りはどちらも体全体を使った振付であるため、踊り手は祭りが終わるころにはへとへとになってしまうそう。私も「大黒舞い」を体験したが、終始中腰で踊るために1時間ほどで腰や足が痛くなってしまった。何時間も舞いを舞いながら村の繁栄と幸福を願う踊り手の方々の苦労や情熱を目の当たりにして、彼らに尊敬の念を抱いた。しかし年々踊り手の数が減少していき、現在は踊りの存続が危ぶまれる状況下にある。大蔵村の青

年団の方々が毎年祭りを盛り上げているが、コロナウイルスの影響で2年ほど祭りが開催できずに心苦しい思いをしたようだ。

どうすれば沢山の人の思いが詰まる「合海田植え踊り」を後世に伝えることができるだろうか。SNSの活用を前提として、私は、子供の田植え踊りの体験と祭り参加を促すことが大切であると考えている。私は小学生のころ花笠音頭を踊った経験があるが、今も踊ることができる。実際、子供のころの経験は記憶に残りやすく、ふとした時に思い出し懐かしくなる。大勢の人々の前で披露した記憶ならなおさらだ。無料で田植え踊り体験会を開催し、祭りの場でそれを人々にお披露目する。その経験が楽しいと捉えられれば大蔵村の青年団に加盟、もしくは個人でのボランティアという形で田植え踊りが後世に伝えられるのではないだろうか。



地域教育文化学部 0さん

私は外に出て何か特別な経験をしてみたいと思い、このプログラムに参加した。

今回大蔵村で学習させていただいたものの中で、私は合海田植え踊りについてまとめていこうと思う。この踊りを実際に見て、体験して何故かは説明しがたいが私の琴線に触れたことがこの合海田植え踊りを選んだ理由である。

はじめに、合海田植え踊りは、約400年前清水城の5代目城主義高公が、領内百姓の労を慰め、五穀豊穡を祈るため、わざわざ上方から踊りの師匠を呼んで、人々に

見せたのが始まりと言われている。

また、田植え踊りとともに踊られているのが大黒舞である。合海地区では、昭和時代から踊られ始めたと言われている。左手に扇子、右手には小槌を持って舞う。小槌の中には、麦や米、豆と5円玉、河原の小石が入っており、それぞれ特別な思いが込められている。

フィールドラーニング1回目では踊りの体験をさせてもらった。見ている限りでは単純な踊りで簡単そうだと軽率に思ってしまったが、いざ実践してみると全く上手いかず、足取りや腕の振る位置、動きのタイミングに至るまで感覚を掴むには至らなかった。また、お話を聞くとところによると、合海集落“全戸”で「門づけ舞」や「合海大黒舞」を披露するらしく、昔は朝6時～夜24時まで家を回って踊り続けたということだった。体力や根性が凄いのはもちろんのこと、この伝統を本当に愛していないと出来ない芸当だと思った。

2回目では本番に向けた着付けや化粧といった準備の様子と本番の踊りを見学させていただいた。準備の段階では皆さん和気藹々としていて、ゆるい雰囲気が出ていた。しかし、夏山塚に着いていざ本番が始まると空気が変わり、皆真剣な表情で踊っていた。踊りは「門づけ舞」「合海大黒舞」それぞれ6分弱、3分弱であったが、安定感があり、踊りが崩れる様子も一切なかった。また、他のところで踊られていた際、村民の方々も多く来ていて、愛されている、大事にされている踊りなのだと思えて思った。

一回継承が途絶えかけたこの踊りを存続させるために、私はまず合海田植え踊りを気軽に体験出来る場が必要なのではないかと考えた。皆に披露することを前提とすると踊るハードルが高くなりがちである。なので、定期的に交流の場を作り、村内外構わず、今回私たちが体験させてもらったような場があることで、参加するハードルも下がる。存続するに当たって、安定して引き継ぎできる土壌を作ることができるのではないだろうか。伝統に触れた者として未永くこの踊りが続くことを切に願う。



医学部 Mさん

郷土の食文化はその地域の歴史と文化、また生活と結びつきながら、その地域の名産物や風土に沿って伝統が継承されている。私は食文化がその地域の特色や人々の生活と深く結びついているということに関して興味深く感じ、このプログラムに参加した。実際にこのプログラムを経験して、大蔵村ならではの食を知ることができて面白いと感じたので、本レポートにおいては大蔵村の食文化について三つの例を挙げて紹介しようと思う。

一つ目は棚田米だ。棚田とは、山の斜面や谷間の傾斜地に階段状に作られた水田のことをいう。平坦地の水田に比べて昼夜の寒暖差が大きいため、稲がゆっくりと熟すること、水源が近いため水中の栄養素を多く含み水の汚れが少ないこと、などの理由から美味しいお米が作られるという。実際に食べてみたところ、お米がもちもちしていてとても美味しかった。また、この棚田は日本の棚田百選に認定されていて、お米は賞を受賞したことがあるそうだ。実際に田植えをしたりお米を食べたりして、近年は米の消費量が減っているが、もっとお米を大切にしていきたいと感じた。

二つ目は笹巻きだ。笹の葉には防腐性や抗菌性があるため使用しているそうだ。地域によって笹巻きの形やゆで時間は様々だが、大蔵村では三角形でゆで時間は1時間ほどだそうだ。ゆで時間に関してはゆで時間が長ければ長いほど保存がきくという。笹巻きは端午の節句で食べられていたが、山形県では雪が多かったため、端午の節句をひと月遅れで祝うことが多かった。5月末から6月ごろになると、笹の葉が大きくなり、笹巻きを作るのにちょうどよい大きさになるそうだ。大蔵村流の笹巻きを知ることができて面白いと思うとともに、その村特有の笹巻きがあるということが食文化の魅力の一つだと感じた。

三つめはわさびだ。四季を通じて一定の水温を保つ「升玉の清水」と山々の澄み切った空気がワサビの栽培に適しているそうだ。大蔵わさびは農薬や肥料を使わず、綺麗な天然水のみで栽培されている。実際にわさび醬油を作り、いただいたところ、とても優しい、美味しいわさびだった。

このように、大蔵村には魅力的な食文化が多くあった。その地形や気候、歴史や人々の生活と深く結びついているということを身をもって感じる事ができた。この魅力的な食文化を継承していくために、SNSで情報発信したり、観光資源として活用していったりするべきだと考える。私もこのような食文化の伝統継承に貢献していきたい。



工学部 Aさん

今回、私が大蔵村に実際に訪れるまで知らなかった肘折温泉の歴史と効能と食文化について話をしたいと思う。約907年に地蔵倉にて源翁という人が肘を折った際に温泉を見つけ、その温泉に肘を浸けたら傷が癒えたという点から始まった。昔、肘折温泉は保養の湯治として訪れる人が多く冬は農家や漁師、私たちが今回訪れた5月は山菜取りした後の湯治に来る人がいたそうだ。当時は1~3週間宿泊して体を癒すということが多かったそうだ。今では中々時間を取れる人が少なく、4~5日泊り湯あたりしてしまい体を癒せない人がいるそうなので温泉の入りを説明しているそうだ。自分も説明を聞いて驚いたのはお風呂に入るときに行うかけ湯の回数の多さである。右下半身5回左下半身5回右上半身5回左上半身5回と計20回も行うのが正しい方法だそうだ。また肘折温泉はナトリウム塩化物・炭酸水素塩泉であり、血液促進、保温効果の高い温泉となっている。温泉の硫黄の匂いが苦手という方がいるかもしれないが肘折温泉は硫黄の匂いもなく無臭というのも魅力である。そんな様々な魅力が含まれている肘折温泉を訪れる観光客は県内が5割を占めているそうだ。

肘折温泉に入った後は食事である。部屋の中で朝市にて買った食材を調理できるそうだ。朝市ではお母さん方

がとってきた山菜や作った笹巻きなど様々な物を購入することが出来る。山菜に関しては季節によって豊富な種類を楽しむことができる。またその山菜も調理方法が豊富で飽きることなく食べることができる。個人的におすすめるのはわらびの一本漬け、ウワバミソウのお味噌汁である。

ここからは肘折温泉の魅力を知ってもらうためにどうするかとの考察となる。個人的には時間を忘れてゆっくりできる肘折温泉は現代の時間に追われ忙しくしている社会人にピッタリだと感じる。SNSを用いた広告は他県の方に対してはいいとは思のだが他の広告等によって情報が過多なので目に触れてもらえる機会というのが少ないと感じる。そこでまず山形駅にポスターを掲載したり、パンフレットを置かせてもらったり、アナログ的なやり方がいいのではないかと考える。SNSだと目に通して終わりになりやすいと感じるので手元に何か残る形にしたい。また、山菜やトマトなど大蔵村産の物を山形大学の食堂や山形の小中学校の給食にて「山形の食材を楽しもう」のような日を設け、食べる機会を増やして大蔵村に関心を持ってもらえるようにしたい。特に私は後者を勧めたい。



工学部 Sさん

大蔵村の生活と伝統の継承、について考える。大蔵村は、農業と観光産業を主産業としているそうで、有名な肘折温泉や、棚田米からもそれがうかがえる。このレポートでは、より村民の生活に近いであろう農業について学んだことをまとめ、考察していきたい。

一つ目は、棚田米について記述したい。まず、棚田とは、山の斜面や谷間の傾斜地に階段状に作られた水田のことである。当初、大蔵村の棚田は花笠の笠より大きい程度の田んぼがたくさん並んでいたというのにはとても驚いた。もちろん現在はその大きさではないが、棚田ということもあり通常の水田より小さく、大型の機械が入りにくいので生産効率は低くなってしまっているのだそう。ただ、その地形ゆえの、寒暖差・水質の関係で棚田のお米はおいしいといわれるそうだ。また、人の手による手間暇をかけられていることもおいしさにつながっている。しかし、多様な洋食の広がりや近年の新型コロナウ

イルスによる飲食店の営業短縮等によりお米の消費量は減少し、厳しい現状がある。自分もお米を食べなくなってきた若者の一人であることを自覚し、日本の恵みであるお米の重要性を再度実感するべきだと思った。また、稲作ということに関係して田植え踊りについても記述したいと思う。合海田植え踊りは、400年もの昔から豊作を願い、途絶えそうになりながらも現在まで継承されている。実際に体験し、踊りを行うのをみた。体験した踊りを何時間も行うと考えるとその疲れは想像しきれず、また、400年も、形に残しづらいう踊りを継承するのは容易いことではないと思う。ただ、踊りを行う際、子供から高齢の方まで本当に多くの方々が集まり、会話し、踊りを観て楽しんでいるのをみて、地域の人々のつながりがとても深いのだと感じ、それが踊りを続けられている要因の一つであると感じた。

二つ目に、トマト農業について記述したい。稲作でも述べた大蔵村の地形による寒暖差や、水資源の豊富さはおいしいトマトの生産にも活かしている。「メンズ農業」とし、地域の農業を活性化させるための取組が行われているそうだ。新規就農者への支援や、知識、技術の伝達、子供への魅力発信と食育など本当に多くの取組がなされていた。そのすべては地元のため、大蔵のため、と郷土を愛する気持ちから来るのだそう。地域との関連が希薄になっている現代でこのような気持ちはもっと多くの人々が持つべきだと思った。

今回のフィールドワークで学んだ課題は人口や観光客減少による地域の衰退であった。SNS等の活用が最も広く魅力を発信する方法だと思うが、方法の一つとして山形大学の学生に向けたものを推奨したい。恥ずかしながら私はこの活動に参加するまで大蔵村については知らなかったが、今回大蔵村のフィールドワークに参加し、またここに訪れたいと思われた。県外から山形大学に入学した人や、山形県内でも訪れたことのない人に友人や家族との休暇を過ごす選択肢として広めるとよいのではないだろうか。そうして訪れた人が自分の経験したことを楽しかったと伝える行為が、何よりも、魅力を発信する効果があると思う。山形大学を中心として、山形県内の魅力が周りに広がるというかたちが実現されればと思う。

工学部 Tさん

留学生として、地元の住民とグループのみんなとコミュニケーションを取りたいと思う、そして、日本の伝統文化に興味がある、この授業を通してコミュカを上がりながら地元の文化と歴史も知っているように頑張っている。

村外の山を登った、昔の肘折の歌とか、子造の地蔵があった。そして、800年前の地蔵の部屋も存在している、不思議だと思う。午後から肘折こけし見学、鈴木先生強

いすぎる、作成するため非常な技量が必要だと思われる。肘折系こけしの特徴は、目が三日月型で、くちびるに黒い輪郭が描かれていることである。一部、西洋人形のように目がぱっちりしたものや、黒いおかつぱのこけしもある。頭部は遠刈田系と同じく差し込み式である。頭頂部には、遠刈田系のように手絡てがらと呼ばれる赤い放射状の飾りが描かれており、胴はまっすぐで太く、肩に段が入っているものが多いである。胴の柄は遠刈田系の影響が強く、重ね菊や撫子などの草花が描かれることがしばしばあり、胴は黄色に塗られているものもある。日本の伝統的な工芸をやってみた、すごく楽しかった。

肘折温泉の開湯は平安時代の西暦807年である。豊後国出身の源翁がこの地を訪れた際、老僧（地蔵権現）より肘を折った際に治療した温泉を教えられた、という伝説が残る。そして、湯治文化もよく保存している、ホテルの先生から習った、温泉の分類、成分、効果が勉強になった。後で見学、体験の400年歴史の合海田植え踊り今まで受け継がれて、日本の文化保護と伝承学習に値する。私によって漢字を見ないなら、歌の意味全然わからない、しかし、歌を聴くと、いつも喜びの気持ちが出る。これはおそらく収穫後の喜びだろう。

今大蔵村の問題は高齢化であり、人口は減少傾向にある。若者を村に就職させるべきだ。近年、中国の貧困から脱却し、豊になった村は、政府の支援を受け、農業会社を建て、必要な人材と資金を集まって、地元に適した栽培業を発展させるために使われている。また、今のネット社会になった、YouTube、Twitterに村の伝統的な踊りと食べ物を宣伝して、観光客を引きつけに来るなど色々な方法がある。私はこの2週間村で学んだことを故郷に持ち帰り、故郷の農村人口を助ける。



工学部 Sさん

私自身は大蔵村に毎年訪れていたため、ぜひ村のことを学んでみたいと考えこのフィールドラーニングの参加に至った。今回は大蔵村で体験学習を通して学んでいた伝統や歴史をまとめる。

まず肘折は火山地帯であったためその軽石によって大蔵わさびの育成にとっても向いている環境ができたといえる。肘折ができたのは約1200年前が起源だといわれ、

その伝説の舞台は地蔵倉であり凝灰岩の断崖の岩陰で地蔵菩薩が並んでいる。かつてそこに住んでいた老僧が肘を折ってそこで肘を付けたら忽ち治ったと言われるのが肘折温泉である。肘折温泉は成分が有機性であり鎮痛作用があるため、この鎮痛作用が肘折の伝説の所以であると思われる。そして温泉街の長い歴史の中でニャンコブチという伝統がかつてあった。内容は賭け事であるがそこで賭けられるのが宿の配置なのだ、ここが温泉街らしいと思う。広い温泉街の中でも良質なお湯がある上の湯が中心にあり、ここに近い宿が儲かるのでいかに近くに宿を置かか賭けていたのである。今はこのようなものはないが大変興味深い伝統であったと思った。ちなみにこの宿が移動した跡は現在でも松屋という宿の温泉の通路内に見ることができる。このような伝統も踏まえ肘折の温泉街の歴史を観光客に教えれば興味を持ってもらえることが増えると思う。

肘折こけしはとても広く作られており最も遠くではブラジルで作っているという。肘折こけしは他のこけしと違い子供向けなので中に小豆を入れることで音が鳴るしかけがある。小豆を入れるための空洞を開けて作成するため大変な技量が必要だと思われる。実際に修業は5~6年かかると言っており制作の体験をさせていただいたがバランスよく塗るのがとても難しいのである。肘折こけしの作成様子を動画にしてSNSで配信することで伝統を引き継ぐ人材も増えると考えました。また四ヶ村の棚田は日本の棚田百選に選ばれており、様々な米を育てている。日本有数の豪雪地で上質な雪解け水でおいしい米が育つのである。体験してみて思ったのがとても大変な作業だということ、大人数で田植えをしていたが機械の圧倒的な速度には敵わなかった。ここで問題なのが棚田には機械が入りにくいというところで人手がたくさん必要だが現在大蔵村は人口減少傾向にある。大蔵村に足りないものは何かなるが冬の豪雪はどうしようもない。しかし現在はネット社会であり副業も街に出なくてもネットで沢山方法がある。FXや動画配信、ブログ運営などの工夫ができネットでは物珍しいが好まれるため大蔵村の大量の雪を使った動画企画などを使ってPRし広告収入が得られるように継続してみるなどの方法があると考えます。

農学部 Sさん

大蔵村では地区ごとに様々な伝統が存在している。私の故郷である合海地区には合海田植え踊りが存在している。約400年の歴史を持つ伝統が現在も続いている。現在田植え踊り保存会によって継承されている田植え踊りを継承する意義、今後の課題について考える。

田植え踊りとは、約400年前に清水城5代城主が百姓を慰め、豊穡を願うために始まった踊りだとされている。

地区の家一軒一軒を訪れ、踊る「門づけ」の風習は珍しいものである。さらに、田植え踊りの後に大黒舞として違う踊りをもう一度披露するのも他にはない風習となっている。現在は合海地区の150戸を6月の第一日曜日に巡り、披露している。田植え踊り保存会には約40名の会員がおり、高校を卒業し就職する人や、就職のため地区に戻ってきた人を会長などが直接勧誘しに行くという形式で加入が行われる。また合海子どもタウエーズとして、地区の子供たちへの指導も行っている。この目的は合海田植え踊りの保存、技能伝達である。

この合海田植え踊りを保存していく意義は、地域の人のつながりの強化にあると私は考える。田植え踊りは合海地区にとって一大イベントとなっており、それに向けての準備などで特に近所のつながりが増える。さらにタウエーズの活動を行うことで、合海地区の同年代の子供のつながりが深くなることに加え、指導者層と子供たちのつながりも生まれる。実際に私は指導者の方たちとは年の離れた友達のようなつながりができていると感じる。このつながりは地域が明るくなり、地区へ帰ってくる人が増えるという効果があると考え。近所や年が離れた人同士のつながりを作ることで地域内の会話が増える。さらに現在オンライン上で遊ぶ子供が増える中、深いつながりができているせいか、合海地区では子供たちが集まって外で遊んでいるのを頻繁に目にする。このことによって住民や将来を担う子供たちに明るく楽しい地域だという印象を与えることができる。そのような印象を持って育った子供は郷土愛を持ち、合海に住むと決める若者が増えると私は考える。

今後の課題としては、タウエーズの次世代の指導者の不足が挙げられる。タウエーズでは子供たちを楽しませることを第一に指導を行っている。これは現指導者による考えの物で、それを再現できるのは実際にその指導を受けた人物が行うのが最適だと考える。

受け継ぐことのできる伝統があることは大変誇らしいことである。その誇りを守り、地域への愛を育てることは地域の活性化につながる。地域を守るためには私自身を含めた若い世代の努力が必要になってくると考える。指導を学ぶことなど私自身ができることをおこなって、保存に参加していきたいと感じた。



人と自然と地域をつなぐ環境保全活動

活動状況

○実施市町村：鮭川村

○講師：鮭川村自然保護委員会会長 高橋 満
ネイチャーアカデミーもがみ代表理事 矢口末吉

○訪問日：令和4年5月7日(土)～8日(日)、6月18日(土)～19日(日)

○受講者：地域教育文化学部1名，理学部1名，農学部3名 以上5名

○スケジュール：

| 1回目 | 2回目 |
|---|---|
| 【1日目】5月7日(土) 8:00 山形大学発 9:30 新庄駅 10:00 開講式 鮭川村の自然と保護活動の説明 12:00 昼食 13:00 自然環境調査 17:00 宿泊場所着 | 【1日目】6月18日(土) 8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 10:00 自然環境保全活動 12:00 昼食 13:00 自然環境保全活動 17:00 宿泊場所着 |
| 【2日目】5月8日(日) 8:30 宿泊場所出発 9:00 自然環境調査 12:30 昼食 13:30 自然環境調査 15:30 現地活動終了・活動場所出発 16:30 新庄駅発 18:00 山形大学着 | 【2日目】6月19日(日) 8:00 宿泊場所出発 8:30 自然環境保全活動・自然環境調査 12:00 昼食 13:00 自然環境保全活動・自然環境調査 感想発表 15:30 現地活動終了・米地区公民館発 16:30 新庄駅発 18:00 山形大学着 |

授業記録

○活動レポート「私はもがみで考えた！」

地域教育文化学部 Gさん

私は鮭川村でのフィールドラーニングを通して、湿地を観察すること、ギフチョウとヒメギフチョウを実際に見ること、様々な植物の名前や特徴を知ること、ヨシ刈りをする、看板のペンキを塗りなおすこと、自然の中で自然とともに演奏されるオカリナを聴くこと、たくさんの方の経験をさせていただくことができました。その中で、鮭川村の産業と人口増加への取り組みに焦点を当てることにしました。

活動中に、多くの自然と触れ合う中で第一次産業の割合が高く、村を車で回る中で第三次産業の割合が低いのではないかとぼんやり思いました。調べてみるとその予想は当たっており、山形県全体と比較した際に、第一次産業の割合が20%ほど高く、第三次産業の割合が20%ほど低くなっていることが分かりました。また、鮭川村の皆様とヨシの草刈りをしていく際に、若者があまり参加していないことに気が付きました。私が住んでいる地域に当てはめて考えると、地域での活動では避難訓練や地域のお祭りがありますが、子供会を中心として町内会が運営しているので、小学生をはじめとし多くの若者が参加します。小学生の時に地域とのかかわりがあり、活動に参加したことで中学生、高校生になっても意識することなくとも活動します。私は自身で環境保全活動をする中で、自然は自然のままに完成されるものではないこと、一晩で美しくなることはないこと、何年も長い年月をかけて人間の手によってつくられていくものだとまなびました。自然保護は後世に語り継ぎ続ける必要があるうえ、草刈りという外での作業には元気な子どもたちと協力することは、産業の担い手不足の解決にもつながるのではないかと思います。

自然保護だけでなくほかの産業でも担い手不足が深刻化している中で、鮭川村内での就職を促進することがひとつの策ではないかと考えます。男女ともに村外就労が5割を超え、村内での就労者は2割程度に留まっているデータがあることから、単純に考えれば、村外に就職した方が村内に就職したら担い手不足ではなくなるのではないかと思います。村外就労者のうち新庄市が7割弱に達しているという点から、企業の誘致と雇用を増やすことが効果的であると考えました。

四日間という短い期間でしたが、最上地区への理解を深められ、鮭川への愛を深められたかと思います。この授業が終了した後も、今回の6人でたびたび鮭川にお邪魔させていただいたり、ボランティアサークル活動などを通したりして、楽しく関係を続けていけたらと思います。大変お世話になりました。貴重な経験をさせていただきました、ありがとうございました。



理学部 Sさん

我々の班の他の4人もそうであるように、私もこの2回のフィールドラーニングで多くの人に助けられながら様々なことを学んだ。私はその中でも、環境保全と観光産業発展の両立について考察し、その内容を記述したいと思う。

私は、現地での活動だけでなく、自ら調べたことも通して、いかに環境保全と観光産業発展の両立が難しいかを思い知った。大前提として、環境保全活動には人手が必要となる。私も2回目の現地活動で体験したが、米湿原の環境を維持するには、例えばヨシ（アシ）のような貴重な植物の生育を阻害する植物を除去しなければならず、これは少人数でやるとなると重労働であった。肉体の衰えたご老体ならばなおさらであろう。つまり、環境保全活動を次世代においても継続して行うためには、多くの若い人材がいることが望ましい。そのためには、若年層に環境保全活動を認知させて、興味のある人が少しでも生まれるように、外部に情報を発信して、現地に来て何かを体験してもらう機会が必要である。ここで、環境保全と観光産業発展が結びつく。観光産業が発展することは、米湿原をはじめとする鮭川村の自然や、自然だけでなく文化・伝統といったものに、村内外の人々に触れてもらい、それらに興味を持ってもらえるような機会を増やすということに他ならない。しかし、観光産業発展は環境保全にメリットのみを与えるわけではない。訪れる人が増えるということは、ポイ捨てや貴重な動植物が乱獲される可能性が増加する。これは、環境保全という趣旨に反するものである。観光業発展のデメリットへの簡単な対策は、いくつか考えられ、例えば、ポスターや看板の設置、簡易的な柵の設置などである。しかし、知識や経験・視野の足りていない状況の私がこれ以上の解決策を語ることは、無責任であり、教員や鮭川村の皆様に対して、あまりにも不誠実であると感じる。環境保全や観光産業発展は単一の問題の解決ですら困難を極め、鮭川村以外の様々な自治体でもこれらの問題解決に頭を悩ませており、さらに、ここで挙げた2つ

は独立した問題ではなく、互いに密接に関わり、絡み合っている。これだけ大きな課題を、一大学生であり、ほとんど専門知識のない私が解決することは今のままではできないであろう。残念なことに、今回のフィールドラーニングの活動は1年生前期で終わってしまうが、個人としてかグループとしてはわからないが、一度関わり、様々なことを学ぶ機会を与えてくださったからには、より具体的で効果的な解決策を考え、提案することを今回の授業の講師の方々や鮭川村の人々全員に対する恩返しとしたい。そのためにも、これからの大学生活で、一般教養や専門知識を身につけ、フィールドラーニングの様な外部での活動にも積極的に参加していきたい。



農学部 Aさん

私が鮭川村のフィールドラーニングで、特に印象に残っているのは2回目の活動で主に行ったヨシ刈りだ。ヨシは湿原の希少な植物たちの成長を阻害するためそれを除去する必要がある。生えている希少な植物も刈らないよう踏まないよう注意しながら行い、腰をかがめる姿勢で作業するため体力の消耗が激しかった。だが、活動の合間の休憩での時間や終了後に食べるご飯の美味しさ、だんだんとヨシがなくなり湿原の植物たちの姿が少しずつ見えてくることにとてもやりがいを感じた。

この作業をしていて気づいたことは、私たち大学生を除くと若者の参加者が少ないということだ。また、主な活動を行った米地区では住人の数が少なく集落が無くなるのは時間の問題と矢口さんがおっしゃっていたことが印象に残っている。

では、なぜ保全活動の主力になりうる若者が少ないのだろうか。それを考えたときに私は、大学生や単身の若者が村に来るときの制度があまり充実していないと思った。実際活動してみて、移動には車が必須、宿泊施設の料金の高さ等により若い世代が行きにくいのではないかと感じた。また、鮭川村はInstagramやYouTube等を積極的に利用しているが、自然保護委員会は有志により発足したため、村のSNSには載らず、自然保護の情報発信ができていないと感じた。

そこで解決案として、SNSで保全活動やイベントの情報発信を行う、イベント時のみ送迎バスを手配する、空き家を利用した宿泊施設を作るのはどうだろうかと考えた。SNSでの発信はローコスト・ローリスクだが、他2つは費用や人手の関係上現実的ではない。まずは保全活動の情報を発信し若い世代に鮭川の保全活動について興味を持ってもらうことが必要だと思う。私自身今回の授業で鮭川村を知らなければこのような素晴らしい保全活動に出会うことはなかったかもしれない。これは主観的な意見だが、保全活動に興味があるがどのような活動か、どこで行われているかが分からず参加したくてもできない人が少なからずいると思う。活動をきっかけに鮭川へ移住する人も増えるかもしれない。そのように考えると、鮭川の観光スポットや移住制度、地域おこし協力隊などのPRに加え保護活動の情報発信も加えて行うと効果的なのではないだろうか。

自然保護委員会の高橋会長がおっしゃっていた言葉である「地域の自然は地域で守る」。土砂災害に遭い湿原が埋もれても木道が破壊されてもあきらめず、地域の自然を守るため保全活動へ取り組む姿勢にとっても感激を受け、地域を大切に思う心、諦めない姿勢が大切なのだと思ふことが出来た。今回の活動で得た経験値や学びを生かし鮭川村の課題解決に貢献するとともに、大学生活での学びにつなげていきたい。



農学部 Hさん

私はこの2回のフィールドラーニングで多くの人に様々なことを聞きながら環境保全活動や鮭川村の魅力を学んだ。私はその中で、米湿原の環境保全活動の際に矢口さんから聞いた「車椅子の方でも観光のすることができるようにしたい」という話を聞いた。このことについてについて考察し、その内容を記述していきたい。

私は米湿原に実際に訪れ体験した中で問題点として大きく2点挙げられると考える。1つ目は米湿原の木道までの道のり、2つ目は環境保全を行いつつ車椅子が通れるような幅の木道を作ることができるのかという2つの点である。1つ目の米湿原の木道までの道のりは、以前

は現在ほど急な傾斜ではないと聞いたが、現在はとても急な傾斜になっているように感じた。あの急な傾斜は車椅子の方はおろか杖などを使う軽度な歩行困難者ですら危ないであろう。そのため、まずはあの急な傾斜をなるべく緩やかにすることに加え凹凸を減らす必要がある。しかし、あの距離と道幅すべてを整備するのは骨の折れる作業だと言えるため、車椅子1台が通れる幅を緩やかにすることで作業が楽になると考えた。一方、道幅を狭くすると上の方と下の方とで衝突してしまうことが予想できる。そこで道幅すべてが水平になっている区間を均等に数ヶ所作ることで衝突を避けることができる。さらにそういった場所を作成することで車椅子の方と車椅子を押す方への負担が少し解消されると考えた。

次に2つ目の環境保全を行いつつ車椅子が通ることのできる木道を作成することができるのかとある。車椅子の横幅は70~80cm程度である。現時点の米湿原の木道では横幅が足りていないように見えた。さらに、今回の環境保全活動の一環として木道に木材を打ち付けることで歩く際に滑りにくくなり、私たちは歩くのが容易になった。しかし、この木材が生む凹凸は車椅子が通るのは難しい。1回目のフィールドラーニングで頂いた資料では木道を100mリニューアルするための費用として150万円かかったと記載されていた。使える費用の上限がどのくらいなのかを聞けず把握ができていないが大きな額だと言える。そのため費用削減のためにも新しい木道を作成しない他の選択肢を考えた。しかし、私は新しい木道を作成する以外の考えを思いつくことができなかつた。しかし、バリアフリー木道の参考として釧路湿原が挙げられる。

環境保護と観光資源保全のためのバリアフリー化はとてもバランスをとるのが難しい活動だ。どちらが欠けてもいい結果につながることは少ないと私は考えている。大学生であり、専門の知識が薄い私が考えている解決策はベテランの方々から見ると費用の面なども含め欠点だらけである。しかし、このフィールドラーニングで様々なことを教えていただいた方々への恩返しとしてより良い環境造りを模索していきたい。

農学部 Aさん

私は、今回のフィールドラーニング共生の森もがみの鮭川村での活動を通して、鮭川村のみなさんの温かさにとっても触れることができました。普段の講義では経験することのできない本当に素晴らしい経験をさせていただきました。

1回目のフィールドラーニングでは、鮭川村自然保護委員会の活動について教えていただきました。鮭川村の住民の方々が一体となって、ギフチョウを守っていかうとしている姿勢を強く感じることができました。また、鮭川村に生息している植物をたくさん教えていただき

ました。保全活動をする上で、植物の名前や性質、鮭川村のどこに生えているか、などをたくさん調べることが分かり、保全活動への熱意に感動しました。

2回目のフィールドラーニングでは、米湿原のヨシ刈りを体験させていただきました。1ヶ月で他の植物が見えなくなってしまうくらいヨシが伸びること、想像以上にヨシ刈りが重労働なことに驚きました。2日目には鮭川村の住民の方々が多く集まってヨシ刈りを行われていて、自然保護への情熱に心打たれました。

私が鮭川村でいろいろな経験をさせていただいて感じたのは、情報発信の難しさです。私自身、数ヶ月ほど前に山形に来たばかりで鮭川村を知らなかったのですが、山形市民の方でさえ鮭川村についてくわしく知らないという課題があるように感じました。実際に鮭川村を訪れて、学んで、こんなにも魅力がある素敵なものを持っているのに、あまり知られていないのはもったいないと思いました。ただ、いろいろな情報発信は鮭川村でもうすでに行われており、これ以上どのように発信していけばもっと多くの人を引きつけることができるのかを考えていくことは難しいです。しかし、私なりに今できることを考えたところ、アピールする年齢層ごとに違った媒体を使用して情報発信を行ったり、違った観光地に焦点を当てて発信していったりすることなどが挙げられると思いました。私も、微力ですが様々な手法検討しながら周囲の友達や家族に鮭川村の魅力を発信していこうと思います。また、より多くの方が鮭川村に魅力を感じ、訪れてくれることを祈っています。

また、今回のプログラムを通じて、私は人間的にも成長できたと感じます。積極的に動くことで、住民の方から話を聞くことができたり、初めて行う活動も頑張っただけでこなすことができたりしました。これからの大学生活でも積極的に活動して、学びを得ていきたいと思っています。



里山保全と角川のパワースポット巡り

活 動 状 況

○実施市町村：戸沢村

○講 師：田舎体験塾つのかわの里事務局員及び地元インストラクター

○訪 問 日：令和4年5月21日(土)～22日(日)、6月11日(土)～12日(日)

○受 講 者：人文社会科学部2名、地域教育文化学部2名、理学部1名、医学部3名、工学部4名、農学部2名
以上14名

○スケジュール：

| 1 回 目 | 2 回 目 |
|--|---|
| <p>【1日目】5月21日(土)</p> <p>8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 9:40 新庄駅発 10:20 戸沢村農村環境改善センター着 オリエンテーション 10:40 蕎麦打ち体験 昼食 13:30 山菜採り 15:15 山菜したごしらえ 15:45 ふり返り 16:30 農家民宿に移動</p> | <p>【1日目】6月11日(土)</p> <p>8:00 山形大学発 9:30 新庄駅着 9:40 新庄駅発 10:20 戸沢村農村環境改善センター着 オリエンテーション 10:40 木エクラフト 12:20 昼食 13:30 移動 杉林の間伐・除伐 15:30 戸沢村農村環境改善センター着 ふり返り 16:30 農家民宿に移動</p> |
| <p>【2日目】5月22日(日)</p> <p>9:00 戸沢村農村環境改善センター集合 山菜料理作り 昼食 13:15 移動 キノコの菌植え 15:00 戸沢村農村環境改善センター着 ふり返り 15:45 戸沢村農村環境改善センター出発 16:30 新庄駅着 18:00 山形大学着</p> | <p>【2日目】6月12日(日)</p> <p>8:30 戸沢村農村環境改善センター集合 浄の滝トレッキングに出発 昼食 15:00 戸沢村農村環境改善センター着 ふり返り 15:45 戸沢村農村環境改善センター出発 16:30 新庄駅着 18:00 山形大学着</p> |

授業記録

〇活動レポート「私はもがみで考えた！」

人文社会科学部 Kさん

私たちの戸沢村におけるフィールドラーニングは計4日間という短いものではあったが、戸沢村の風土や料理、人柄、暮らし方、関わり方などを学ぶ良い機会となった。

そんな戸沢村での体験は、ほとんどが自然とのかかわりを持った活動であった。山菜取りでは山の恵みをいただき、キノコの菌植えでは木の幹を利用し、杉の木の間伐・除伐作業では山の資源を守り、そして貰い、浄の滝トレッキングでは湧水を飲み、自然の壮大さに胸を打たれた。これらの活動を通して私が感じたことは「戸沢村は決して山形市のように人が多く住む街を目指した家開けではないということ」である。もちろん後継者不足に悩みある程度の人口増加を必要としてはいるわけだが、戸沢村が目指すのは「自然と共生し恵みを貰うまち」としてのポジションだ。

そこで、自然との共生をより現実的なものにするために目を付けたのが「山形森ノミクス」である。間伐・除伐の体験を行う際山形の林業事情について聞くことができた。そこで聞いた話によると山形県では全体で「山形森ノミクス」という林業の取り組みがあるということだった。この取り組みは、木を植え、育て、採って、使うというサイクルを作り上げるという計画だ。しかし実態としては山に囲まれ木は多くあるというのに伐採が実施されていないというものだった。需要が多くなると伐採して活用する理由がないのだ。そこで私は、この山形森ノミクスのサイクルを完成させるべく、木材の需要を創出しようと考えた。

需要の創出の方法を考える際まず重要なものは、戸沢村の杉の特徴を捉えることである。東北には「秋田杉」「青森ひば」などの高級木材があることからわかるように東北地方の杉の品質は高く山形も例外にはならない。その高級なしっとりとした木肌の杉をどのように利用するか山形県でも考えられているようだった。しかしそれはバイオ発電やペレットとしての利用にとどまり高級品であることを無駄にしているように感じられた。そこで私は杉木材のあらたな利用方法を提案しようと考えた。

それは「木そのものとして手に触れ肌に触れる製品」である。例えば木の器や箸、スプーン、フォークなどの食器類や椅子や机、棚などの家具である。これらの製品が売れることで杉の需要が増え、伐採が進み、その分新たな杉が育つ。そのようなサイクルが続くことで、炭素固定が進み、どうしても余る木材はペレットやバイオ発電に使い無駄をなくすことでSDGsの観点からも注目されるような街になっていくのではないだろうか。

木材の使用方法は短い期間で調べられた範囲のもので、この方法で改善される確証は薄いため、今後もチームメンバーと共同し、より説得力のある計画に仕上げていきたいと思う。



人文社会科学部 Tさん

4日間のフィールドラーニングではそれぞれ違う体験をしたが、一貫して感じたことは里山の豊かさと里山保全の必要性だ。1回目のフィールドラーニングで山菜を収穫したが、似ていても毒の有無に違いがあるものも存在し、山菜取り初心者の私にとって見分けるのはとても難しかった。他地方から山菜取りに呼び込むことは、山菜の魅力を広め、戸沢村の活性化をすることに繋がると思う。しかし山菜の特徴の違いや、立ち入り禁止地区を詳細に記した文献は少なく、知識なしに山菜を取りに行くことは危険が伴うことが分かった。そこで、山菜の収穫可能場所、注意点、山菜の特徴の違いをまとめたガイドブックやサイトを作り、誰でも山菜取りに参加できるような環境を整えることが求められていると思った。また、自分たちで作った山菜料理はとても美味しかったが、山菜ならではの苦みや渋みがあり、少し食べにくいと感じるものもあった。そこで誰にとっても食べやすいレシピを考案することで、山菜をもっと身近な食べ物として位置付けることができるのではないかと思った。

二回目杉の間伐に行った際、木は収穫期を迎えているが、業者は広大な面積の伐採でなければ受け入れてくれないということが分かった。これは国外から安価で輸入される外材との競争に負け、国産杉の需要が減少し、林業が廃れていることが一因である。実際に平成27年に農林水産省が実施した「2015年農林業センサス」の山形県の調査では、農林業経営体数が10年で18.4%減少、耕作放棄地面積は10年で12.5%増加していることが分かっている。しかし、林業の廃れを理由に管理を怠ると、里山の豊かさを失うことにも繋がってしまう。そこで、私は木の利用サイクルを循環させるために問題の根本にある「国産杉の需要の減少」を解決するべきだと考えた。

戸沢村内を車で走っているとき、空き家や古民家をたくさん発見した。また、海外や他県から戸沢村に移住してくる人が多いということも聞いた。そこで戸沢村も含めた山形県への移住者に空き家を戸沢村の杉でリノベーションすることによって作った家を安価で提供するという案を思いついた。もし購入者が杉の木を気に入ってくれば戸沢村の杉の魅力の発信源にもなり得るし、山形県を活性化させながら空き家問題も解決することができるのではないかと考えた。しかしこの案には予算等様々な面で問題点があると思うので、その点についても考察してみたいと思う。また、浄の滝トレッキングでは豊かな自然の迫力と魅力に心を奪われるとともに、自然の豊かさを享受している私たちが里山保全をしていく必要があることを再認識させられた。

地域教育文化学部 Iさん

実際に戸沢村を訪れてみて、自然豊かで景色が素晴らしく、おいしいものが沢山ある村なのだということがわかりました。しかし、その素晴らしさが山形県民にさえあまり知られていないということが戸沢村の課題だと私は考えます。

私たちは四日間にわたりたくさんの貴重な体験をさせていただきました。戸沢村ならではの自然を最大限にかした体験ばかりで、自然と隣り合わせで生活するうえでの大変さなども知ることができました。例えば、土砂災害により川の水が汚れてたくさん取れていた魚も今やほとんど取ることができなくなっているそうです。また、日常私たちが行っていることが自然破壊へと繋がっていることも学びました。具体的には、自動車の排気ガスによって食べることができない道路沿いに生えている山菜などがあげられます。このように私たちの普段の日常生活と自然とは深いかわりがあります。

三日目は杉林の間伐・除伐を行いました。そこで問題視されたのは杉林の循環です。たくさん取れてもそれを加工して活用する企業がないと意味がありません。ロシアのウクライナ侵攻によりその問題は悪化しました。また、人手不足や後継者がいないことも問題となっています。これは林業だけでなく戸沢村のあらゆる職業で問題となっています。実際私たちが案内してくださったインストラクターの方々も年配の方々でした。戸沢村を活性化させるためには、たくさんの人に戸沢村について知ってもらう必要があります。

そこで私は仙台という光のページェント的なものが戸沢村にもあったらいいなと思い、戸沢村の伝統的なお祭りを調べました。すると、私たちが泊まっていた民宿の方が「角川雪回廊物語」という冬のお祭りを、写真を見せながら紹介してくださいました。そこでは、絵灯ろうが飾ってあったり、ランタン上げをしたり、景色や雰囲気がよくて是非一度行ってみたいなと思いました。山

形ならではの雪を活かした、かまくらを作るイベントもあるそうです。そこで、私は屋台を通じて戸沢村のおいしい食べ物を販売したりして、戸沢村について知ってもらえたらいいなと思いました。また、ほかの地域のお祭りでも戸沢村のものを販売できればより多くの人に戸沢村について知ってもらえるチャンスになります。また、食べ物を少しアレンジしたりして印象付けることで戸沢村を訪れた人がSNSなどで広めてくれるきっかけになります。しかしそれは簡単ではなく、衛生面や費用の面も考えなければなりません。課題解決を実行に移そうとすると必ず新たな課題が発生してしまいます。課題解決には具体的な計画と長い時間が必要なのです。

戸沢村についてたくさん知れた四日間でした。そしてまた行ってみたいとも思いました。戸沢村にはそう思わせてくれる魅力があふれています。その魅力を伝えるためのより良い方法をこれから探していきたいと思いません。



地域教育文化学部 Wさん

戸沢村で過ごした4日間の活動を通して、私は戸沢村の活性化に繋がるイベントを自分なりに考えた。ここでは、そのイベントについて具体的に企画したことを述べていきたいと思う。

まず、戸沢村の現状として、「戸沢村についてそもそも知らない人が多い」ということを感じる。また、戸沢村には若者が少なく、林業従事者や食文化を伝える世代が高齢化している。そこで、戸沢村により多くの人を集めて、若い世代にも戸沢の伝統文化に触れてもらい、認知度を上げることが必要だと考えた。イベントの目的は、山菜の季節とも重なるように、戸沢村で「春のお祭りイベント」を開催し、戸沢の伝統芸能と地元の食材・特産品をPRすること、工芸体験を通して戸沢で生育した木材を活用することである。イベント内容については3つの案を出した。

1つ目は、「手作りランプ」と「木工クラフト」のコーナーを設置し、自分だけの作品を制作する」というも

のである。材料の1つとして戸沢村で伐採された木を再利用し、牛乳パックや折り紙、100均商品など、身近で手に入りやすいものを取り入れ、費用を軽減させたいと考えた。また、私達が実際に体験した、ふくろうの木クラフトを活かして、更にアレンジを加えたいと考えた。

2つ目は、「戸沢村で採れる食材・地元の特産品を並べた販売ブースを設置する」というものである。今回実際に食べたコシアブラやウド、ワラビを使った山菜料理や、戸沢産のもち米を使ったぼたもちやくじら餅、角川餃子、戸沢産のお米などといった特産品をそのイベントで販売し、多くの参加者にその美味しさを伝えたいと考えた。

3つ目は、「角川太鼓の披露」である。戸沢村角川地区で活動する和太鼓団体である、「角川太鼓を育てる会」のメンバーへ演奏の依頼をし、太鼓を披露してもらうことを考えた。戸沢の伝統芸能である角川太鼓を、イベントをきっかけに知ってもらうことで、村外のイベントのオファーの増加や、会員希望者の増加に繋がることも期待でき、伝統文化の継承に非常に役立つのではないかと考えた。また、このイベントの開催前にボランティアを募集したり、SNSのアカウントを作成してイベントの宣伝をしたりするなど、より参加者を集める工夫も必要だと感じた。

あくまでもこの企画は私個人の意見ではあるが、今回の活動をふまえて、戸沢村の伝統と食文化の発展、そして戸沢村における林業の活性化を目指した企画を考えた。戸沢村は山菜の宝庫であり、豊かな自然と、心あたたかい村の人々で溢れる、魅力ある地域であることを、今回の活動を通して実感することが出来た。戸沢村に住むたくさんの方々にお世話になった分、今度は自分がその経験を活かして恩返しができるかなと思う。今後は班のメンバーの意見も取り入れながら、地元の人に企画案を伝えられたら、自分が少しでも戸沢村の魅力の発信に貢献できるのではないかと考える。



理学部 Tさん

第一回の1日目：手作りそばが美味しいが、それを作るには予想より難しい、水を注ぐ量と分量など色々注意しなければならない。作った蕎麦と先生が作ったのと同じような美味しいではないが、現場で見習い、蕎麦を実際に作るということができて、満足である。午後、山菜取りに行ったとき、車道付近の山菜が汚染され恐れがあるため、より歩きにくい山道に進んで山菜取りをした。途中で里山の先生から山菜に関する知識を教してもらい、食べられる植物を見分けるコツを身につけるようになった。万が一野外や森林などで迷子になっても、そのような知識さえ持っていれば、餓死までにならないと思う。そのため、それは非常に重要な生存知識だと考える。そして、山に関する知識に詳しい里山の先生たちに対する尊敬も生み出した。今回の山菜取り活動は見たことがない植物が多いので、時々リアルな『ゼルダの伝説・ブレスオブザワイルド』だという感じがした。

第一回の2日目：山菜は下処理が必要であり、手間や時間がかかったが、それが毒を無くし、食材として美味しくなる準備である。植物は山の中に沢山いるとはいえ、全部食べられるわけではない。それに、食べられるのも決して簡単に煮、炒めたら食べられるとは言えない。それは植物たちが適者生存の法則に追われ、自分を守るために段々進化していくことであり、非常に奇妙だと思う。それでも人類に食べられてしまい、少し悲しいと感じる。さらに、元の野生の植物から普通に食べられる野菜になるため、代々の人どれくらい選択し、栽培する必要があると考えると、昔の人たちに対する敬意がついに生み出した。美味しい山菜料理を食べながら、湧いたのはどんな複雑な心持ちだ。

午後はキノコの菌植え体験である。作業は楽しいが、楽だとは言えない。ハンマー、原木、種コマ、ドリル、発電機を備えるまで下準備は十分だと言える。一般的な作業の流れに従うと、まずドリルで原木の穴を作り、ハンマーを用いて種コマを穴に打ちこむ。それにキノコの十分な成長空間と栄養を保つため、適当な間隔を取り、原木を回す必要がある。昔ドリルがない時代で人たちはどのようにキノコを植えるのかという質問について、里山の先生はハンマーみたいな道具を紙で書いて説明した。その説明から見ると、昔のように原木で菌植えにふさわしい穴を作るため、かなり大きい力が必要であり、エネルギーの消費も大変だろう。

第二回の1日目：朝は木製の手作り鼻を作ることにした。鼻の体各部分はみんなでノコギリをつかって木を切りとて準備し、各自にグルーで『体』という木に目や鼻を貼り付け、完全体の鼻を作った。それで子供の頃レゴを組み立てる楽しさを思い出した。それにより、今回の課題を木製の部品で組み立てる動物や戸沢村独特な観光スポットなどを含むガチャポンをしようと思っている。でもそれらを作るため、どのような技術が求められる、よ

り豊富な種類ができるのかは今まだ分からない。それについてもう一度里山の先生たちに教えてもらいたい。

午後は杉の間伐を行った。剪定鋸で直径30cmくらいの杉を切り倒すのは不可能と思いきや、一時間弱を掛けて五種類の方法を使った結果、バラバラにして倒せた。心折れそう1cm、1cmできの真ん中に進み、木をやっと倒した後、物凄い達成感があった。実はその木はもうすでに半分枯れた、それでもかなり丈夫さがあるのは不思議だと思う。それでもこちらの木が売れにくい現状になったのはさらに不思議だと思う。第二次産業革命後、私の先のような効率低い労働は商業的な価値がほとんどないかもしれないが、私の実感からという、それは凄く楽しかった。私たちの祖先、言わば昔の人間もその様に「非効率」で生活しているだろう。それでも悪くないと思う。科学技術が目覚ましい発展したが、現代人の心の底は多分数十万年前の古代人類とあんまり変わっていないと思う。課題で救われるべきなのは戸沢村なのか、それとも都市に囲まれて自然と触れ合いの楽しさを忘れ、人間性が段々失っている人たちなのか、頭の中で混乱になった。ウォールデン池畔の森の中に木の小屋をまっているのはソローだけではないと思う。戸沢村もおそらくそうだろう。課題探究しながら、戸沢村の写真と記事を中国のSNSで投稿し、それはおそらく半年間でいいねとコメント数が一番多い投稿だと思われる。

第二回目の2日目：2時間かけ、雪まだ積もっている浄の滝にたどり着いた。先生の話によると、そのあたりは特有な鹿がいるらしい。されならカメラを置いてドキュメンタリーを撮らないと流石にもったいないだろう。途中お玉杓子、蛇、蜥蜴など見つか、その生物多様性に驚いた。何より意外のは、見つけた蜥蜴の形や模様と故郷のはほぼ同じく、ヨモギも食材として使っていることだ。

里山の先生と山大生の皆さんと一緒に歩きながら戸沢村の観光スポットを見るのは一期一会の体験だと思う。心より感謝申し上げます。

医学部 0さん

まず、フィールドワークでの感想について述べたいと思う。戸沢村に初めて到着したとき、村に住んでいる人々はこの村を愛しているということを感じた。自分の故郷が存在し、その場所を誇りに思うことができるということは自分にとっては少し遠い感覚だったので、衝撃を受けたのを覚えている。現地の人々はとても優しく、初めて民泊させていただいたときまるで祖母の家に泊まりに来たような懐かしさを味わった。人生で初めての一人暮らしでホームシックになっていた私にはとても安らかに感じられ、また班員と話す機会が与えられ漠然と存在していた孤独感が少しなくなった。民泊や体験を通して人々の温かさや生活、そして現状を少しばかり理解できた。この理解というのは現地で同じように生活す

ることでしか味わえないと思う。フィールドワークを通じて自分の足で実際に行くことの重要性を確認できた。また、伝統野菜を始めとした地域の習慣が根付いていたり、伝承が残っていたりして面白かった。戸沢村ではたくさん神社やお地蔵様が存在しており、かつての戸沢村の住民が自然を敬い、共生していたことがわかる。自然と共生できていたからこそ困っているときに助け合い、国民保険発祥の地になったのではないかと感じた。誰かと一緒に生きていることを自覚し、自然などの理不尽に思われるようなことも受け入れるという姿勢は今の社会に必要な視点だと感じる。

戸沢村の課題についてだが、一番の問題点は産業が農業・観光業しかないことだと感じた。まず、最上地域全般に大学がない。大学があることのメリットはその場所に確実に新しく住み着く人がいること、そして知識が貯蓄されることだと考えている。戸沢村の産業を考えると農業が大きな割合を占めているように感じられる。農業以外にも新たな産業や技術を導入することにより、雇用口が増加するのではないだろうか？最上地方に研究所・または大学を設置することにより実現するのではないかと感じた。次に現時点での戸沢村の最大の弱点であるアクセスの悪さについて考えた。道が廃線になってしまえば人々が使わないからである。定住者を増やすことにより、アクセスを改善することができるのではと思った。

最後に、日常生活を送っているだけでは気づかなかつたりわからなかつたりする物事に触れることができ良かったと感じている。また問題にぶつかったときに考えることの重要性を再確認した。考えることで、物事をなかつたことにするのを防ぎ、人々に関心を持たせることができる。まずは問題を知らせるということが肝要なのだと思えた。



医学部 Sさん

私はこの四日間のフィールドラーニングの中で、戸沢村の現在の魅力は何なのか、そして今ある課題は何なのかについて考えながら取り組んだ。

まず戸沢村の現在の魅力についてだが、「自然」と「食」であると感じた。「自然」については、山菜取りや浄の滝トレッキングが挙げられる。山菜の生えているような場所は、山の中でも道から外れたような奥まった場所にあることが多いので、普段、ハイキングで歩くような山道とは違った本当の自然の中に身を置くことができる。まるで宝探しをしているような気分だった。また、滝のトレッキングについては、非日常的环境を体験できることが大きな魅力だ。そもそもトレッキングとは山を楽しむながら歩くことを目的としている。ここが登山との大きな違いだ。実際にインストラクターの方にお聞きしたが、主に頂上を目指すことを目的としている登山とは違った、自然を全身で感じながら楽しむ目的で参加する人が多いそうだ。そしてなによりも、実際に浄の滝を目の当たりにした時は、言葉にならないほど感動したことをはっきりと覚えている。やはりそれは、重い荷物を背負って長時間歩き、目的地に無事たどり着いた時の達成感が与えてくれたのだろう。次に「食」についてだ。自分たて取った山菜を使った伝承料理や、蕎麦打ちの体験と共に味わった蕎麦、ブランド豚である戸澤豚など多くの食に触れることができた。特に山菜はほろ苦い野趣に富んだ風味で、決して野菜では味わえない独特の風味であった。その季節にしか味わえないという特別感も山菜の醍醐味の一つであった。

次に戸沢村が抱える課題について考察する。その課題は大きく分けて二つあると考える。一つ目は、山菜取りのツアーやトレッキングのツアーが多くの人に認知されていないことだ。恐らく、私もこのような機会がない限り戸沢村で山菜取りや滝のトレッキングができるということは知ることがなかったかもしれない。SNSなどを利用して、まずは多くの人に何があって、どんなことができるのかを知っていただくことが必要なのではないかと思った。二つ目は、杉林の再利用だ。このフィールドラーニングで、杉林の間伐・除伐を体験した。その中で伐採した木がすごくもったいないように思えた。この木々をうまく利用できれば、ご当地製品など多方面で活用できると思った。

これまで挙げた意見はまだ、想像に過ぎず、具体性も乏しい。これからグループのメンバーと話し合いを重ねて、戸沢村の魅力を何倍にも大きくさせられるような案を考えていきたい。



医学部 Iさん

戸沢村で過ごした期間は、たった4日間であったが、私にとって、たくさんのことを感じる機会であり、様々な視点から学ぶことができたとても良い機会であった。

1回目の1日目は、そば打ち体験と山菜採りをし、その山菜を次の日調理するために、前日である1日目から下準備をした。山形は、そばが有名であると、進学した際に、山形が地元の友達が言っていたのでこのフィールドワークを通して、本場のプロの味を頂くことができたのは、とてもよかった。私たちは、詳しい説明を受け、師匠がそばを打っているところを見ながら打ったのだが、師匠の味には到底及ばなかった。師匠のそばは、のどごしがすっきりしていてとても食べやすく、おいしかったのでたくさんの人に食べてもらいたいと思った。そば打ちが終わり、午後になると山に歩いて山菜を採りに行った。山道は、険しく、年配の方には厳しいかもしれないと思ったが、容易に行くことができる整備された道路脇は、排気ガスをかぶってしまっているため、食べることはできないらしい。また、山菜は私たち素人から見ると識別をすることが難しいため、安易に採ることはお勧めされていないということを知り、山菜採りには、経験と体力が必要であると感じた。また、その山菜の下準備は、山菜ごとに非常に異なるものであった。例を挙げると、比較的簡単に下準備を終えることができるのは「ワラビ」である。また、逆にとても手間がかかるものは、「イタドリ」というものであった。それは、下準備から食べるまで期間が少なくとも半年かかるものであり、驚いた。やはり、雪が多く、冬の間、移動が困難になる地域での保存食の大切さを感じた。2日目は、下準備をした山菜を使って、様々な料理を作った。1つの山菜からたくさんの料理ができるのを見て、私たちが普段食べている野菜と何ら変わらないと感じた。そして、その午後には、キノコの植菌作業をした。初めての経験であったため、新しい知識を身に着けるこ

とができたと思う。

2回目の1日目は木工クラフトや杉林の間伐を行って、戸沢村の「杉」の質の高さに驚いた。どれも太く、高いものばかりであり、長い間、大切に育てられてきたと一目でわかった。また、ここでその気持ちを途切れさせてはいけないとも思った。2日目のトラッキングは、危険が多くあったので、もう少し整備をし、観光地として売り出して、観光客を集客していければよいと感じた。

4日間、様々な経験を通して、戸沢村の良いところ、改善すべきところを身に染みて感じる事ができたので、発表までにメンバーとたくさん話し合い、戸沢村に今よりも明るい未来がくるように熟議していきたい。

工学部 Kさん

四日間のフィールドラーニングでは戸沢村でしか出来ないことを体験し、戸沢村の魅力や問題について学ぶことが出来た。

一回目のフィールドラーニングではまずそば打ちを体験した。簡単そうな工程でもコツがいる難しい作業だったり職人さんが作ったそばが私たちの作ったそばの何十倍も美味しかったりと職人の凄さを体感した。また、山菜採りでは、舗装道路のすぐ脇にも山菜があることを知って驚いた。しかし、それらは車の排気ガスなどの影響で食べられないことを知り、今まで気づかなかった環境問題を学んだ。戸沢村は自然が豊かで様々な山菜が採れることが魅了だと感じた。山菜料理づくりでは下準備の仕方や食べられる部分が少ないことなど初めて知ることが多かった。山菜料理は苦いというイメージがあったが、実際に食べてみると苦みが少ないものをあり、美味しいものも多かった。山菜は採れる期間が短いことや下準備の方法があまり知られていないことが取りかかりにくい要因だと思った。

二回目のフィールドラーニングでの間伐作業ではのこぎりやチェーンソーなどを使って行ったが、すべて手作業で木を育てることは大変なことだと思った。また、農林業の人材不足や高齢化が進んでいることが大きな課題であると感じた。森の保全のための循環システムについて学び、木材の需要の少なさが問題であることを感じた。浄の滝のトレッキングでは、険しい山道や川を渡ったさきにある迫力のある大きな滝を見ることが出来てとても楽しかった。しかし、近年の大雨による土砂崩れなどで滝への道の状態が悪くなってしまっていることを知った。

今回フィールドラーニングを通して戸沢村の一番の課題は住民の高齢化が進んだことによる人手不足だと感じた。これを解決するためにはまず戸沢村の魅力を沢山のの人に知ってもらうことが必要だと考えた。そこで私は戸沢村の山菜に注目し、村の魅力として発信していれば良いのではと考えた。具体的には、戸沢村のホームページに戸沢村の山菜の特徴やおすすめのレシピを載

せたり、道の駅などで販売する時には商品のパッケージやポップに山菜についての情報を載せたりすることを考えている。



工学部 Oさん

1回目のフィールドラーニングではまず、そば打ち体験をしました。うまく丸め、細く切ることが難しく、職人さんに作っていただいたそばを食べたときその差の大きさに驚きました。午後からは山菜採りに行きました。少し険しい道でしたがとても多くの山菜があり、その自然の豊かさに驚きました。雪がたくさん降る、潮風の影響を受けないなどで山菜がおいしくなるということを知り戸沢村の山菜の特長を学びました。その後山菜の下ごしらえをしました。食べられる部分を選別すると思っていたより少ないと思いました。その後農家民宿に移動して夕食をごちそうになりました。戸澤豚というブランドのお肉の料理をいただいてとてもおいしく戸沢村の知名度を高める材料になるのではないかと感じました。2日目は前日に下ごしらえした山菜を調理しました。昔ながらの調理法を学び、山菜には薬の効果もあることも知りました。そして食べてみるとおいしいものも多かったですが、なかなか若者の舌に合わない物もありました。もし戸沢村の山菜として売り出すということになったら、昔ながらの料理を残し、それとは別に現代風にアレンジなどをすると様々な世代の人に楽しんでもらえるのではないかと考えました。キノコの菌植えでは、ドリルを使って気に穴を開けるところを昔は金筒を打ち付けていたことを知りました。

2回目のフィールドラーニングではまず木工クラフトをしました。山形市の進める緑の循環システムを知り戸沢村では、「収穫」と「使う」というところに課題があるとわかりました。そして「使う」を増やすことで戸沢村の杉に興味を持つ人も増えて里山保全につながると考えました。杉林の間伐・除伐で十分な面積がないと大きな重機などが入ることができず業者が請け負って

くれないという話を聞いて、道路の整備などが課題になっているとわかりました。2日目は浄の滝を見に行きました道は険しかったですが滝はパワースポットということだけあって迫力満点でした。

今回のフィールドラーニング全体を通して「杉の使用量が少ない」、「村の食の知名度が低い」という課題があると考えました。具体的な解決案として「木工クラフトキットを販売する」「山菜などで新たに名物料理を作る」などを考えました。まず戸沢村に来る人が増えれば経済的にも潤い交通の便も良くなるのではないかと考えました。

工学部 Aさん

戸沢村での4日間の活動を通して私は、戸沢村の人々にとって豊かな自然を利用した村の伝統は宝であり、これまで長い世代を経て大切に継承されてきたことであることが自然と感じられました。そのため、今回の活動で体験してきた村の伝統はこれからも継承されていくことを望みます。しかし、その上で高齢化と過疎化が進行している現状と向き合い、村のコミュニティを存続していくための努力をしていくことが今後必要であると考えました。また、普段は感じるものがほとんど無かったような自然の独特な雰囲気や美しさに刺激を受け、改めて村の自然が持つ不思議な力に偉大さを感じました。次に私が特に戸沢村について考えさせられた活動を紹介します。

まず一つ目は山菜を採って調理する活動です。山菜採りでは初心者の場合、間違えて食べられない草を採らないように山菜の見た目は最低限知っておく必要があると活動を通して考えました。また、後の学習で山菜を採る場所が適当であるかを判断することはとても重要であることがわかりました。具体的には、車道に近い所に生えている山菜は車の排気ガスが含まれていたりすることや、採ってはいけない場所で山菜を採ると森林窃盗で犯罪者になってしまうことがあります。一方調理ではまず下処理をすることが大事であり、美味しく食べれるまで手間がかかることを知りました。特に、食べずに取り除く部分が多かったりわらびのアク抜きに重曹を用いて一日以上時間を用することが自分にとって大きな発見でした。またこの活動では、料理の種類が多くていろんな食べ方があり、味は予想以上に苦味が強いという印象を受けました。山菜はこの苦味に体から老廃物を排除する効果があります。この効果はダイエットにつもながるため、健康志向の人や痩せたい人にむけて宣伝すれば苦味が受け入れられて戸沢村に収益をもたらすことが可能であると考えました。

2つ目は森林の間伐除伐作業についてです。間伐除伐作業をする現場は勾配が急で足場が凸凹しているため、作業がやりづらく感じました。特に雨が降った後の状態

で作業するときは滑りやすく高齢者が間伐除伐するのは危険だろうと考えられます。作業は主に力作業であり大木が自分の方へ倒れてくる危険があります。山奥での作業ほど怪我をしたときに助けが来るのに時間がかかることから、常に周りの危険を察知できることが望ましいと考えました。またこの作業は森林の中の木それぞれの質を高める点でとても重要なことであり、若者の担い手を得ることで作業効率を上げることがこれからの課題であると考えました。



工学部 Sさん

このフィールドラーニングで1, 2日目に戸沢村の食資源、3, 4日目に自然資源を体感した。戸沢村はどちらにも長けていると感じたのでこの2つを活性化する方法を考察したい。

1, 2日目のフィールドラーニングではそば・山菜・きのこなど戸沢村で採れた食を体感した。そば打ちは慣れない動作に苦戦し、山菜料理作りでは独特な癖に苦労した。どちらもあまりおいしくできず悔しい思いをした。宿泊した民宿で食べた山菜は、山菜の豊かな風味が引き出されていてとてもおいしく感じた。山菜は普段あまり口にしないが簡単においしくできる料理方法があれば、山菜が特産品として広がるのではないかと考えた。

3日目で行った杉林の間伐と除伐では林業の難しさを感じた。ある程度育った杉林はオートメーション化が進んで機械による伐採が可能となっている。しかしそこまで育てるためには、足場の悪い場所で重い荷物を持つての作業が必要となる。高齢化が進み林業の従事者が減少していく厳しい現状が分かった。里山保全とは環境保護とは異なり、自然を破壊しないように生業に利用していくことだと学んだ。里山保全の一環である緑の循環システムを実現するためには、杉の需要をもっと増やすことが必要だろう。戸沢村の杉の特徴はとくにない聞いたが、秋田杉や同じ山形県内の金山杉は年輪が細かく丈夫であると知った。戸沢村の杉も品質を調べる、収穫年数を変えるなどして魅力を見出すことができれば、需要

が増えるのではないだろうか。また、それらが杉の単価の上昇や林道の整備などにつながれば、後継者も増えていくのではないかと考えた。

4日目の浄の滝トレッキングではとても壮大な景色を見ることができた。険しい道を通ったこともあり達成感を感じた。途中立ち枯れしている木を見かけた。それらは近年の降水量の増加による土砂の流出が原因にあるようだ。戸沢村には浄の滝だけでなく、幻想の森や白糸の滝などの美しい自然の景観がある。そういった景観を守り観光客に楽しんでもらうためにも、環境について考え対策していく必要があると感じた。

実際に戸沢村に足を運び、想像以上の魅力を感じた。しかし山形県に来るまで戸沢村について全く知らなかった。そのため、戸沢村だけが載ったパンフレットではなく、観光情報誌や山形の観光地まとめサイトなどを利用して、広範囲の多くの人に知ってもらうことが戸沢村の活性化につながるのではないだろうか。また里山保全の現状を知り、山形をはじめ日本の木材資源が十分に活用されていないように思った。木材は将来的に金属やプラスチックに置き換わる素材になると考えているので、新たな活用技術を研究してみたいと考えた。

農学部 Sさん

二度のフィールドラーニングとその中での様々な体験を通じて、課題として見えてきたものや、逆にうまくすれば地域の活性化に利用できそうな資源を見つけることができました。

まずあげられるのは他の多くの農村と同じように過疎化と高齢化の問題です。この問題の主な原因は、都市部に比べると利便性が小さいことや職が得づらいことなどです。しかしこの問題に対する有効な対策が戸沢村では行うことができると思います。私は戸沢村に数多く存在する、山形杉をはじめとした木材用の木々が利用できると考えました。なぜなら今現在山形過ぎなどの森林は十分伐採可能な段階まで育っているところが多いものの、伐採を請け負う企業が不足していることで森林が飽和状態のような状態であるのです。この現状は地元の方も危惧しており大きな問題でもあります。この問題の解決、つまり伐採を請け負う企業の誘致などに成功できれば、それにより若者も流入しますし、職も増えます。さらに森林を人間の手で管理し持続させることは地球温暖化の原因であるCO₂の増加も防ぐことにつながります。現在の時流としても輸入品に頼っていた木材は不足するという予測ができます。この機に企業を誘致できれば地域活性化につながると考えられます。

また戸沢村にはお菓子など多くの嗜好品の名産もあります。例を挙げるとくじら餅などですが、くじら餅は名前の由来が菓子の見た目が鯨の皮つきの脂身を塩漬にした塩くじらに似ていたからであるとされる通り、お世辞にも今の若者が求める映え、には添わないもので

す。おいしさは間違いないものでも菓子類は特に見た目も重要です。くじら餅も作る時の型をくじらをデフォルメしたようなデザインにするなどの工夫をする事で、これも地域振興のための観光資源になるのではないかと感じました。このようにもともと製法や味自体は昔から引き継がれていておいしいものの、デザインのシンプルさなどから知名度が低い名産品は多いように感じます。これらの名産品をデザインの面からPRすることも地域活性化につながるのではないかと感じました。

今回直接に農村という名前がふさわしい地域を訪れて、予想以上に地域の人が感じている問題点が多様で、一口に過疎地といってもその土地ごとに違いがあるということを確認しました。これから発表内容についてグループ内で意見を出し合っていくことになると思いますが、私はその時上記したそれぞれを軸に考えていこうと思います。

農学部 Aさん

今回フィールドワークというものを初めて体験しました。1回目に行ったときは、そば打ち体験・山菜取り・山菜料理づくり・キノコの菌植えを体験しました。どれも初めての体験でとても楽しかったです。特に山菜取りでは、普段歩かないような場所に入って行って山菜をとってきたので非日常を体験出来てすごく楽しかったです。そば打ちは、みんなと協力して粉から蕎麦を作りました。自分で作ったからおいしく感じるだろうと思っていましたが、全然おいしくなくて少し残念でした。蕎麦屋の人は簡単そうにやっていたけど、それはすごい練度が織りなす技だったのだと思い感心しました。2回目に行ったときは、木工クラフト・間伐体験・トレッキングを体験しました。一番印象に残っていることはトレッキングです。前日に雨が降っていたせいか道がぬかるんでいて、インストラクターの方が小学生でも簡単に行ける道と言っていましたが、なかなかハードになっていて、たまに崖から滑落しそうになり、ヒヤッとすることが何回もありました。しかし、目的地で滝を見たときはすごく感動しました。返りも合わせて六時間ちょい歩きましたが、道中でよくわからない蛇やイモリなどの生き物を見つけることができてとても楽しかったです。民泊では、戸澤豚を使ったトンカツやさくらんぼ鶏を使った唐揚げなどが夕食で振舞われみんなで夕食を楽しみにしていたのが印象に残っています。近くにある温泉入ることもできてすごく充実した体験でした。

私が今回のフィールドワークで考えたことは、地域を活性化させるために必要なことです。今回行ってきた戸沢村では地域を活性化させようという工夫がたくさん見られました。しかし、戸沢村では人手が不足しているため、なかなか活性化させるのが難しいのだと感じました。なので、まず戸沢村がすべきことは、人口流出対策だと思っています。戸沢村に行ったとき学校もあり子供がい

ないようには見えなかったので、このような人たちが戸沢村に残りやすくなるようにすることが大事だと思いました。そのために必要だと思ったことは、働き口を増やすことです。働き口があれば地元である戸沢村で働きたいと思う人は多くいると思います。また、働き口ができることで地域の経済もより回るようになるので一石二鳥です。



山形大学エリアキャンパスもがみ運営会議委員名簿

令和5年3月31日現在

山形大学

| | | |
|-------------------|---------|-----------|
| エリアキャンパスもがみキャンパス長 | 大 西 彰 正 | 小白川キャンパス長 |
| 教育開発連携支援センター | 栗 山 恭 直 | 教 授 |
| 人文社会科学部 | 松 本 邦 彦 | 教 授 |
| 地域教育文化学部(教育実践研究科) | 江 間 史 明 | 教 授 |
| 理学部 | 栗 山 恭 直 | 教 授 |
| 医学部 | 後 藤 薫 | 教 授 |
| 工学部 | 木 俣 光 正 | 教 授 |
| 農学部 | 江 頭 宏 昌 | 教 授 |
| 学士課程基盤教育機構 | 阿 部 宇 洋 | 講 師 |
| エンロールメント・マネジメント部 | 伊 藤 真由美 | 教務課長 |
| 小白川キャンパス事務部 | 佐 藤 俊 次 | 運営支援課長 |

最上地域

| | | |
|------------------|---------|--------------|
| 新庄市教育委員会 | 高 野 博 | 教育長 |
| 金山町教育委員会 | 須 藤 信 一 | 教育長 |
| 最上町教育委員会 | 中 嶋 晴 幸 | 教育長 |
| 舟形町教育委員会 | 伊 藤 幸 一 | 教育長 |
| 真室川町教育委員会 | 門 脇 昭 | 教育長 |
| 大蔵村教育委員会 | 有 馬 眞 裕 | 教育長 |
| 鮭川村教育委員会 | 矢 口 末 吉 | 教育長 |
| 戸沢村教育委員会 | 市 川 重 保 | 教育長 |
| 高等学校長会 | 高 橋 剛 文 | 代表(新庄北高等学校長) |
| 最上地方町村会 | 大 友 弘 克 | 事務局長 |
| NPO法人田舎体験塾つのかわの里 | 安 食 輝 敏 | 代表 |

オブザーバー

| | |
|--------------------|---------|
| 山形県最上総合支庁総務課連携支援室長 | 小 泉 篤 |
| 同 総務課連携支援室主査 | 工 藤 真 紀 |

エリアキャンパスもがみ事務局

| | |
|-------------|----------|
| (大学事務局) | |
| 学士課程基盤教育機構 | 三 上 英 司 |
| 小白川キャンパス事務部 | 池 野 尚 美 |
| 同 | 柿 崎 利 津子 |
| 同 | 箭 柏 秀 司 |
| 同 | 小 林 美 緒 |
| 同 | 國 分 聡 子 |

(最上事務局)

| | |
|------|---------|
| 事務局長 | 岸 隆 一 |
| 事務局員 | 澤 野 ひろみ |

エリアキャンパスもがみ研究年報2022

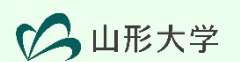
エリアキャンパスもがみ 令和4年度 事業報告書

令和5年(2023年)3月31日

編集：山形大学エリアキャンパスもがみ



エリアキャンパスもがみ



事務局 山形大学教育開発連携支援センター TEL 023-628-4720 FAX 023-628-4836
〒990-8560 山形市小白川町 1-4-12 E-mail acmogami@jm.kj.yamagata-u.ac.jp